断片 二〇一一

u_

（今日中に表紙が…）

今日中に表紙が天使の顔の冊子を全て配らなければならない。天使を信じる心を持つ人には必ず。冊子の数に余裕はない。捨ててしまう人には配れない。また天使を良く思っていない人もいて、冊子を配っている事さえ知れてはならない。だから先ずしなければならないのは表紙を隠す事だ。次に天使を信じる人にだけ、冊子を配っていると知らせる事だ。そのためには、彼らにだけ聞こえる声、彼らにだけ感じられる風の薫り、或いは彼らの胸にだけ響く微かなざわめき、そんなものが必要なのだ。そしてそれは何処にでもある。今も確かに感じ取れている。ただそれを感じ取れている人が何処の誰なのか、どのような態度姿勢表情を取っている誰が、そうである人なのか。しかしまだ、冊子の積み上がる狭い部屋に、じっとして居るだけだ。それらを抱えて街頭に飛び出せば、全ては理解され、体が独りでに動くだろう。天使などすっかり忘れて。うっかり思い出しそうになったら自分が天使だと決め付けて。それでも冊子は少しも減らず、腕の痛みはもうその重みに耐えられない。雑踏も冊子も、そこを走り回る身も腕までも消えて、その痛みだけが残り、それは決して天使など思

い出さず、天使を信じる人の何処にも居ない事の証となるだけだ。その証もまた消えて、雑踏だけが甦り、それらが全て天使の大行列だったとしても、矢張り誰も天使を思い出しはしない。まだ冊子の積み上がるままの埃臭い部屋の窓を、物珍しそうに、天使達は覗き込んで行くだろう。しかし直に、何が物珍しかったのかも忘れられ、その天使の雑踏も二度と戻る事なく過ぎ去って、（二〇一一年一月一日）

（閉ざされた部屋では…）

閉ざされた部屋ではないのか。棚の奥に、そう小さくもない穴が開いていて、風は螺子のような渦を巻いてそちらへ吸い込まれる。濃い影の痩せた男が土足で入って来て、「何も見ていない。見ようともしていない。こうしていられるからには、非の打ち所もない。風も、風を知る世界の拡がりも直ぐに消せる」と叫ぶと、頭から穴の奥へ消えた。それで風は已んだ。目が燃えるように熱く開けていられないが、それでも部屋は見える。それは風と男を吸い取った穴が、部屋を見ているからで、その穴の目が見据える部屋は止め処なく縮んで、遂には砂粒より小さな点になって、そうなればその穴もその小さな点の中だが、そ

の穴を見て取る目だけはその点の上に浮かんで、それを見失わないよう、じっと動かない。しかしその浮かぶ目までは見えて来ない。そんな目など贋物だ。小さなつむじ風の尻尾の先が、来し方を振り返っているだけだ。ただ点の中の穴は、それでもやはり点を見てはいて、その見ようという意志が続く限り、点は見失われない、とそう決め付けた途端、その意志ごと点も穴も見失われ、そう見失ったと断念するには、新しい目が要るのだが、そこには、棚の奥に穴を見付けたままの目があるだけで、その目の余りの動きの鈍さには目を背けたいが、その目だけではどうにもならず、取って返すしかない。何も決め付けてはならない所へと。しかしそのように、取って返すと決め付けてしまうのでは埒もなく、取って返すべきものなど初めから無かったと嘯けば、男の叫んだ通りをなぞっていないか。それにしては風は起きず、トロリとした目は、生臭さを増し、(二〇一一年一月三日)

(鞄に穴が…)

鞄に穴が開いている。中身は空で、それを覗き込む頭はもっと空で、その足元の地面も空なのに、何故そこに立っていられるのか。空の鞄から話しが始ま

ったから。ならばその穴に命を救われた訳だ。救われた序でに、兵士になって、銃弾飛び交う前線に身を晒そう。どうせ儲けものの命だ。しかしそこはもう生暖かい風のそよぐ平穏な所で、何処まで見渡しても同じ景色だった。ただ相変わらず、足元の地面は失われてはいても、そのずっと先に、地層を剥き出した崖が見下ろせた。そこをずり落ちながら将校はまだ号令を下し、兵士共はもう散り散りで、号令を聞き取れる者も居ないだろうに。すると地層の中に幾つも顔が浮かび出て、勇ましい雄叫びだけは、日頃の訓練通りに揃えた。いやそれらはどれも崖から突き出た顔に似た石に過ぎず、その石の表面の歪んだ窪みに風が当たって音を鳴らすだけ。将校もまたその中の一番大きな石に過ぎない。崖はゆっくりと傾いて、空の地面から見下ろしている、この真下の方へ、水に浮かんで流れるように滑って来るが、陽は落ちようとしていて、地層の表面は闇に溶け掛け、それでもそれが段々と足下へと近付いて来るのは、例の雄叫びに似た音で分かる。ここでただ逆立ちさえすれば、空の地面は消え、宙に浮いて、真っ逆さまの尖った石になって、凄い速さで地層にぶち当たり、突き刺さる全身に満ち溢れるのは、(二〇二一年一月五日)

(森には立ち入れない…)

　森には立ち入れない。その森の周りを一回りして来た。その通った道よりも森は一段低いので、ずっと森を見下ろしながら歩いた。出発した時は独りで、途中から暫く一緒に誰かと歩いて、戻った今はまた独りだ。森を一回りするためでなく、その誰かと会うために出掛けた筈だが、森の眺めは、思い出そうとする人の顔も姿も遠ざけるらしい。森の外周に道はぴったり沿っていたが、一箇所だけ森を離れ、間隙が出来ていた。そこは森よりもっと低く暗く、道を逸れてその低い方へ降りて行く者など、まずいないだろう。ただ覗き込みたいのなら、電灯が用意されている。棒の先に電球が付いて、赤っぽい一筋の光りをくねくねと垂らす。すると、まるで赤い綱を手繰るように、その光りを辿って髪の長い痩せた人影が、柔らかな身のこなしで登って来る。こちらが手を離すと、棒と光りと人影は、そこから低い方へと絡み合って、一つの渦を描いた。渦の真ん中だけが仄明るく、その中で人影は二人になって、ひらひらと羽が舞うように踊っていた。そしてその踊る姿を見下ろしながら、私達は、それが見えている間だけ、ゆっくりと二人並んで歩いた。森が道に迫って来て、低く暗い隙間が閉ざされると、また独りだった。森の眺めに背を向けさえすれば、そんな事は何もなかったのかも知れず、

（二〇一一年一月七日）

（必ず裏を…）

必ず裏をかいてくる。が、そいつは敵ではない。ただこちらが何を遣っても、あっという間に完璧に裏をかいてくるので、どうしても敵に見えてしまう。尤もそれによって、こちらは実害を被るし、何とか切り抜けても裏をかかれたままであっては、嫌な気分はずっと残る。それ程のものであれば、どうしてそいつが敵でない事があるのか。偶にそいつに不幸が降り掛かれば、笑いを堪え切れない。そんな奴が敵でない筈がないではないか。そしてそいつはこちらの裏をかいて屡屡集会を開く。その時間と場所を知らされた事はない。後になってその集会で重大事が扱われたのを、噂に聞かされるだけ。何時も聞こえるか聞こえないかの小声で話すそいつに、どうしてそんな集会を開けるのかも、さっぱり分からない。もしそいつがその気になれば、知らぬ間にこちらの全てを奪う事も出来るだろうか。しかしやはりそいつは敵でなどない。本当の敵は身を隠していて、その身を隠している事さえ決してこちらに気取らせない。こちらが実害を被っている事など、金輪際分からせはしない。もしそいつが死んだりしたら、こちらは間違って、同情の涙さえ流しかねない。しかもその死に際に、後事をひたすら私に託していたと、必ずこちらの裏をかいて来る奴から、それ

となく聞かされた挙げ句に、（二〇一一年一月九日）

（高坏に盛られて…）

高坏に盛られて来たのは、食べ物ではなく雑多な小振りの器械類で、中に一つだけ白い麻布に包まれたままなのを見付けた。細長く、時々ぴくりと傾いて独りでに他の器械の中に少しずつ埋もれて行く。それがすっかり見えなくなると高坏の脚が震え出し、僅かずつ卓上を滑って唸るような音を立てる。その震えが真っ直ぐ伝わり、他を押し退けて浮き上がる器械から順に、高坏から食み出て落ちた。高坏の中には、どっしりとした器械が三つと、麻の布切れが残った。包みを解いた細長い奴は、高坏の底に自らを装着させて、その動力で高坏を震わせるに違いない。三つはしっかり組み合って動かない。どうやらそれらは三つに組んで一つで、震えを吸収しながら、それを測定するらしい。麻布は捩れて縄になり、小さな白い蛇のように高坏の底を這い回っている。それが、三つで一つの器械の中心の震えを関知する部分に絡まると、三つはばらばらに弾け飛び、勢いで高坏は一本ずつ脚を持つ四等分に綺麗に割れ、そのまま卓上を跳ねて踊った。その脚の形が僅かずつ違って、初め同じ形をしていた四つの

欠片は、それぞれにその跳ね具合に相応しい獣の姿に変わって行くが、どれも一本脚では覚束ない。別種の四匹で一つの獣に成るには何が足らないか。姿を眩ませた白い蛇がそれを探しに行っていて、（二〇一一年一月十一日）

（汗塗れで…）

　汗塗れで真っ暗な砂の斜面を登っていた。逃げてはいても、まだ囚われの身で、息が切れても休む訳には行かない。初めて高い風が来て肌を冷やし、道程を確かめたくなって足を止めずに振り返った。斜面の底は遥か下で、男が頬杖を突いて横向きに腰掛け、足元に目を落としている。呼んで聞こえる筈もないが、仮に聞こえても決してこちらを向かないだろう。彼だけが人質となって、覚悟を決めて残ったのだから。他の者ではなく何故彼だったのか。それを忘れてしまったまま、彼を見捨てては逃げて良いのか。斜面を転げて行けば、直に彼の足元まで戻れるだろう。それで仰向けの体を投げ出したが、思いの外、砂はザラザラして少しも降りて行かない。全身に力を込め、やっとの事で寝返りを打って、やっと斜面の下に目を向けた。すると、僅かに薄い曙光が差すだけで、砂の斜面は鈍く銀色に輝き、その途中から急に霞んで、それより下の視界

は白く覆われ閉ざされた。力が抜け、そのまま起き上がれなくなった。逃げ果せたのだ。もう囚われの身ではない。しかし必ず、どうして独りなのか尋ねられるだろう。伴侶を連れて来る約束だったじゃないか、と責められるかも知れない。自由とはいえ、砂塗れの裸の身で答えなど用意出来る筈もない。これでは、この地から脱出を試みる者の身代わりに、ここで人質となって、頬杖を突いて横を向き、（二〇二一年一月十三日）

（遺跡までは…）

遺跡まではもう歩くしかないが、荒廃は却って足を軽くし、知らぬ間に行き過ぎた。昔そこを貴人が訪れたというだけで、何も残っていない。戻るにしても目印がない。「戻る事なんかないじゃありませんか」と袖を掴まれたが、どの道戻るしかない。ではと、楕円の地図を渡された。それを図嚢に収めて踵を返すと、途端に道が分からなくなって、直ぐまた地図を取り出すしかない。それは人の脳を透ける程薄く切った物に似て、翳して見ると、今居る場所が手に取るように分かる。丁度地図の真ん中に居た。ただ遺跡だけが載っていない。遺跡の位置が分からなければ、戻る方向も分からない。寧ろ何処にも戻る必要

など無く、ずっとここに留まるのが最善であると地図に示されていないか。いやそれに抗う事こそ必要では、とも地図を眺め返して思えて来る。目を閉じて三度回って、ふらつきながらそのまままずんずん歩いた。もう振り返っても何処をどう来たか分からなくなっただろう辺りで足を止め、また地図を翳して見た。それでもその居る場所は直ぐに分かった。先程と同じ地図の真ん中だった。何人かが追い付いて来て「先に行った人はどちらですか」と尋ねるので、指差すと彼らは直ぐそちらに向かった。地図を見直すと、どちらを指差したかさえ知れなかった。
　地図を渡してくれた人とはもう会えないのだと、(二〇一一年一月十五日)

(泥塗れの道に…)

　泥塗れの道に投げ出されて転んで膝を激しく擦り剥いた男を見て、自らの立つ所を顧みた。そんな必要はなかったと、直ぐに気付いたが、見下ろしてしまったそこは、一度目の当たりにしてしまえば、もう頭はそれで一杯になった。一杯と言っても、何かが満ちているのでもなく、他の考えを持ち込もうにも、それらを受け付けない空白で一杯なのだ。などと思い巡らす事が最も危険なの

だと、どうしてもっと早く気付けないのか。そのせいで彼はもう、擦り剥いた傷の痛みに耐え兼ねて泥塗れで転げ回る男と、まるで瓜二つだと、自らを感じてしまうのだった。全て手遅れの、どう足掻いても抜け出せない所に、彼は拠って立つしかなくなっていて、それで背筋が凍る事もなく、泣き叫びたい気持ちなど露も湧かず、ただ痺れた脚を組み替えて、こっそり咳払いをしようかどうか思案する内、その転げ回る男の姿さえ思い出せなくなって、入れ替わりに、軽々と宇宙と調和する己の姿さえ浮かんで、その昇って行く姿が僅かに尾を引いていた、地上の塵も途絶えて、それがただの物思いに過ぎないとなれば、どうしても新しい服に着替えなければならないが、その服が見付からない。汚れた服を着てしか彷徨き回れない所を、幾ら探しても、新しい服の見付かる筈もない。それなら先ず、汚れた服を脱ごう。しかしその服の汚れだけが、彼の全てであっては、（二〇一一年一月十七日）

（帽子を脱ぐと…）

帽子を脱ぐとそこは玄関だった。ドアが開いていて、入って行くとそこは居間だったが少し違う。私さえ居なければそこは居間だったろう。しかし私は、

誰かに追い出される事もなく独りなら、こうして居続けるしかない。そこを居間にするための私であるべきか。そうでないままそこに居るなら、私のせいでそこは破壊される。いや私が足を踏み入れた瞬間、そこはもう破壊されていて居間の面影もない。であればこそ、そこは居間だった。それでもう何もしなくて良い、と思ったのが間違いで、居間は消え、振り返ると玄関もなかった。出口は塞がれ、私は囚われた。いや囚われたのは私ではなく、私になれなかった者だ。私になれたかも知れない者は、居間と玄関と共に消え去った。残された者は、望み通りもう何もしなくて良いが、何かをしようとも出来ない。それで帽子を探せば、帽子だけが残る。それを拾って被れるのは、帽子だけを残して消えた者だけだ。そして帽子がそこに残るなら、それを被れる者も、時を超えてもう呼び戻されていて、実際それを被っているのではないか。それを彼が脱げば、そこはまた玄関で、ドアが開いていて、入って行くとそこはまた破壊された居間だろうか。しかしそこが居間である事はない。そこへ入って行く事もないし、玄関も帽子もない。それで、何処へでも行けるとしたら、（二〇一一年一月十九日）

（生まれて初めて…）

生まれて初めて疲れを実感したのは、子供の頃、毎日砂遊びに熱中して、考え得る全ての砂遊びを遣り尽くし、もう新しい工夫は決してこの頭の中からは出て来ないだろう、それでもまた何か新たな遊びの考案に取り組むには、この砂場は決して相応しい場所ではない、と思えた時のような気がする。その砂場の見窄らしくて禍々しさが、世界に毒を撒いて、柔らかな膝の砂塗れな私は行き場をなくし、少しだけ冷たい秋風に晒されて立ち尽くしていた。などというは恐らく誰か他人の回想で、道に落ちていたそれを、何時かうっかり拾って持ち帰ってしまったらしい。実際私はそれを、駅への道の途中、私と旧知の仲だと言う女と話しながら思い浮かべている。誰であるか何とか思い出せはしたが、話しに花を咲かせる程の仲なのか。しかし話しは止まらない。寧ろ私の方から旧い話の題を持ち出して余計に喋っている。それは、女の声の調子が、私に頭の奥のその砂場での疲れに気付かせたからで、その疲れを振り払えたと実感出来るまでは、日が暮れてでも、そこでその女との長話しを続けるしかない。などという考えも、道に落ちていたそれをうっかり拾ってしまったらしい。ただ確かなのが、話せば話す程、女の顔が、側を通り過ぎて行く別の女の顔と見分け難くなり、話しの中味も、別の女の話しかも知れなくなり、そして私などは、誰かにうっかり拾われて、直にうっかり捨てられただけの誰かで、（二〇一一

年一月二十一日）

（腰の皮が…）

腰の皮が分厚く捲れ、肉の色が何かを思い出させようとする。肉は石のように硬い。その継ぎ目らしき所を指で辿ると、指は肉の中に入り込んで、捲れた皮は腰を一周しそうで、そうなっては腰の皮は剥がれて落ちてしまうので、指を止めた。辛うじて皮は腰に残った。連絡表を読むと、それは腰でも皮でもない、それに気付かずにいれば、お前の体は錆びて使えなくなる、と書かれてある。それでやっと思い出せたのは、その硬さは軍用だからで、腰の皮が捲れるのではなく、それは、敵を誘き寄せるための装置で、肉が青っぽいのは、防水のためと、水の中に身を隠し易くするためだが、水は何処だ。もう已めにしたい。誰にそれを伝えられるか分からなければ、自らの重みを頼りに、沈んで行くしかない。皮が剥がれたが、落ちるのではなく寧ろ浮き上がって、そこに炎のように明るく波立つ傾いた水面がいきなり現れ、皮は燃えて、散り散りになった。その水面も垂直になって高く遠ざかり、身だけが沈む。水は見付からない。そうして、ぬるぬるした継ぎ目の中を滑って走っていた。その身が水か、

と気付くと、水を取り除こうとする一隊が後を追って来ていて、恐怖からか、怠惰からか、何も考えられなくなった。そうして成るに任せていると、どうやら継ぎ目を抜け出ていて、それでもまだ何かの装置であるなら、ただ考えるためだけの装置に違いなく、それでこそ、何処からでも敵兵を誘き寄せられる。が、もう彼らの追って来られない所まで来てしまっている。何とも簡単な事で、腰と石との相性のせいだ。いや、防水の青が剥がれ、もう水が浸み込んで来ていて、簡単な事など一つもないと諦めるべきか。重力がやっと、これらの事を已めさせて、水を吐けた。その錆の匂いのする水と相性の良いのは何か。それをもう懐に忍ばせているか、或いは直に調達出来るか、それを考えるのと水を吐くのは全く同じ事で、そのただ一つの事に係り切りでいられれば、（二〇一一年一月二十三日）

（何を言っているか…）

何を言っているか聞き取れないが、それを耳で辿って形にすると、みるみる貝の化石に似て、そこに据えられた。隣の部屋のラジオの音か、壁を叩くだけの音か、或いは、屋根の上で出会った二人が大仰に挨拶を交わしているか。挨

撈であるなら放ってはおけない。窓から身を乗り出し、屋根の上に顔を出した。傾斜のきつい黒い屋根に強い陽が差しているだけで、誰も居ない。誰かが現れるまで待ち続けたら、そのまま貝のようになれるだろうか。体を渦巻き状に丸めて、屋根の縁にぶら下がった。空が急に曇って寒気がし、段々とその空が渦巻き状に縮まって硬くなって、化石になって落ちて来そう。直ぐに鳥達がそれを察し、上空を群れをなして旋回を始めた。その旋回は、空が渦巻き状の化石に成る速さにはまるで追い付けず、パラパラと落ちるしかない鳥達は、黒い影になって山の端に消えた。空はすっかり冷たい化石になったが、空は空の事、地上は地上。いや、そうではなく、空は化石に成る前から、空がこの地上の空になった当初からもう、地上に落ちたままで、ただそのままに化石に成ったに過ぎない。そうして先を越されたせいで、こちらは化石になり損ねた。化石の空ののし掛かる地上で、何時まで待てば化石の身に成れるやら。屋根の縁にぶら下がって他に何を出来ず、じっとそれだけを待つ。途方もない時間を、途方に暮れて過ごす。そして何も聞こえないからには、どうやら耳だけは、化石に成り始めたか、或いは、耳だけは地上を離れ、空の方へ組み込まれたか。しかし身動きが取れず、化石か生身か確かめようはない。声を出している積もりにはなれても、声になっているかどうかは聞き取れない。しかしその声で、何を言えようか。その言えていた筈のあれこれも、今はもう耳と同じに、化石

の空に奪い取られ、その一つ一つが、貝の形に硬く渦を巻く様を思い描こうにも、その思い描く能力が、頭の中で化石になっているらしく、(二〇一一年一月二十五日)

(瀕死の猫を…)

瀕死の猫を抱いて、磁石を覗き覗き、ゆっくり慎重に狭い路地を上っていると暗い所に来て、灯りを求めて左右に目を遣っても、両側の家並みは逃げるように消え、それまで聞こえなかった各家々の生活の音ばかりが飛び交えば、入り乱れる音の圧力に蹌踉めいて道が見失われ、入れ替わりに音を消した闇が来て、闇から滲む明るさが満ち、何処までも見通せるようでも、何も見えては来ない。知れるのは、何処へも通じない所に立ち竦んでいるという事だけ。行き止まりとは違う。行き止まりなら穴を開ければ向こうへ通じる。行く手を遮るものは何もなく、ここが一番高い。周りがただ低いばかりの、その低いという他に何も知らせてくれない所で足は止まったまま。眠りから覚めた弾みのように、猫は腕を擦り抜け、迷わずその体の向く方へ黙って去った。猫には先も後もない。風が来て、ぴりぴりと砂塵が細かく頬を刺しても、その向きが知れな

い。風向きを探ろうと、どちらへも体を向けられるようにはなった。来た道は消えてはいなかった。確かに見て取れたが、そちらが後ろとは限らない。恐らく道は、螺子の緩んだ時計の針のように、どちらへもクルクルと回る。或いはそれは本当に針で、道に見せ掛けているに、それなら猫のように、後先など知らんぷりで、体の向くままへ、降りて行けば良いのか。ただ一つの持ち物である磁石を、まだ手に握っていた。それこそが、猫を見習おうにも、足を竦ませる元凶だろうに捨てられない。そんな捨て場が見付かるなら、ここは何処へでも通じている。その北を指すのを已めてしまった針が、体の向く方を、闇へと揺き消しているのなら、その闇の方へ行けば良いのでは。そうするまでもなく、そすっかりそちらへもう来てしまっていて、壊れた磁石をずっと握ったまま、その闇の方の何処かに嵌り込んでクルクル回るしかなく、(二〇一一年一月二十七日)

(初めに何が…)

初めに何があったか。初めには初めがあった。いや初めがあったかどうかは確かめようがない。急に忘れ物でも思い出したように、初めに何かがあったの

では、と考えてみようとされただけ。その初めより後になって、初めなど要らない、それが役に立った例しはないと言ってみても、初めをなしにする訳にも行かない。尤もそれは、初めがあってそう言わせる事で、初めがなかったら、初めなど要らない、とは言えない。と言うにしても、初めについて考えられてこそ言える事で、初めに何があったかとも考えられなかったら、何処をどう進めば良いか、進むも退くも当て所なく、ただ行き惑うばかりで、事態を打開するために、どうしても初めを定めなければならないと、そればかり考えてしまう筈だ。しかし、そのために初めを考えようとしたのだとすれば、初めは、それらしい何処かを、初めと見定めれば済むだけのもので、つまり初めについて考え始めた処で、初めはもう、何も考える事もなく初めとしてあって動かし難い。しかしその動かし難さも所詮、進むか退くかしかする事もない者が、力尽くでそうしているだけで、力が尽きれば、ぐらぐらと見失われる。そして、そんな事では初めを考えるのも端から詮無い事、となれば改めて、考えるのも詮無いそこを初めと思い定め、そこから進んだりも出来そうだが、振り返ればもう何も見定められず、その見定めようのなさの中に、初めからの続きの気配を探るにしても、それで初めとどう係わって行けるのか。振り返るのと向き直るのと、進むのと退くのと、先であるのと後であるのと、それらはそのどちらであるともないとも言えず、それらにかまけず処構わずクルクル回っているだ

けで済むのであれば。いやクルクル回るのと回らないのも、もうどちらがどちらとも知れない。ただ何故そうなるかなら、初めを初めと考えようとしたからだとは知れても、それが初めとどう係わるかは、係わりようのない初めの決めるか決めない事であるなら、（二〇一一年一月二十九日）

（虎になって深い…）

虎になって深い泥濘に嵌り込んでいた。長い修行の果てが虎とは。四肢は泥を相手に独りでに暴れていた。それでも疲れが紛れ込み、諦めるしかないと思う途端、内臓が体よりずっと激しく荒れ狂っているのが分かった。虎になる前の事は忘れたが、恐らく内臓は何処かに置き忘れて済んでいたらしい。ただ虎ともなれば、それが疲れ知らずに暴れるのも仕方ない。それでも、体は強張り泥の重みに耐えるだけになると、内臓の荒々しさも次第に収まるようだが、泥とそれに屈した体に馴らされるのを飽くまで拒むように黄味を増し、遂には隅々まで黄金色に輝いて固まった。これは何の事か、考えてはみたが直ぐに已めた。虎であろうと、内臓など置き忘れたままで構わない。しかしそれに替えて考えるべき事も浮かばない。もう虎かどうかも知れず、少しだけ毛色の違う泥

の塊かも知れない。そんな弱気を跳ね返し、この先ずっと泥に埋もれて生きて行くにしても、自分が泥でなく虎であると、忘れずに居させてくれる黄金色の内臓ではないか。すると吐き気が襲い、喉が詰まった。内臓がまた暴れ出したせいなら、悪い事ではない。しかし黄金の輝きは次第に失せ、それを見分ける目も塞がれ、泥の重みは増して腕も脚も分からなくなり、蛆虫にでもなって、泥の養分を吸って気楽に生きる身分ならそれも良し。そこへ小さな硬く尖った痺れが走る。それは小さいまま泥の中をずっと走って行く。同じ痺れが次々に続いて、泥の中はすっかりその痺れに侵されて、泥はもう痺れと同じものなのか。そうして泥が痺れに毒されたように、全身にも毒が回ったのだ、きっと黄金色の。痺れる泥もまた同じ色に染まって、その毒だけが生き残って、（二〇一一年二月一日）

（狩りもせず漁りもせず…）

狩りもせず漁りもせず耕しもせず盗みも奪いもせず、何故俺は、飯が食えるのか。多分、盗んだり奪ったりしているのだが、知らずにそうしていられる身分に生まれ付いたのに、周りが薄暗いばかりに、何事もなく居られるらしい。

照明でも当てられれば一溜まりもない。薄暗さに紛れる薄い影の俺は、一閃で消される。それならば照明とは、つまりは俺が死ぬ事で、死ぬしかない事など忘れるに限るが、せめて盗んだり奪ったりする手付きだけでも、目に見える程度には身に付けておきたいものだ。それがただ宙を舞う振り付けでしかなくても、実際に日々盗んだり奪ったりしているのなら、それは絵空事ではなかろう。そしてそれを知らずにいられる身分で以て、俺はその絵空事を生き抜こうとしている。そうするしかないから。「いや」と絵空事が反駁する「何処も彼処も照明を当てられて、薄暗い所のないのが取り柄。薄い影の紛れ込める訳もない。」そうなのか、それなら俺は差し詰め、書き割りの絵の具で描かれた影。ずっと照明を当てられ通しで、それで何時になったら死ねるのかな。しかしまあ、何時かは死んでしまうしかない訳で、そんな事なら忘れるに限る。などと嘯いていられるのこそ絵空事で、それならやっぱり、振り付けに励んで何が悪い。絵の具で影を好きに描き足そう。などと、そんな勝手気儘からして、有りもしない絵空事。何処も彼処も照明を当てられて、薄い影でしかないお前に好きにしていられる処があるのかな。ある筈もないなら、一体、何が絵空事か。絵空事は生きられない、と言う訳か。しかし、忘れるに限る、と言われるその先は絵空事に違いない。そこへは照明も用はない、そこが照明の光源であれば。そこが俺に、俺の姿を影に見せる。俺の身分とは、ただそういうもので、盗むも奪

うもそれを知らぬも何も、そんな事を気に病むのが見当違いで、（二〇一一年二月三日）

（ここが外ならもう…）

ここが外ならもう何処へも行けない。見えるのは外ばかり。ここが中なら外までは行けるかも知れない。外は見えているし、それなら、外への道は必ず開ける。そしてもう道は通じていて踏み出している。それが大きな誤り、その道はもう外だから。外ならもう何処へも行けてしまう。しかしそれこそが誤りであって、何処へも行けない外へと直ぐに行けてしまうのは、ここがずっと中であるままだからで、道は呆気なく塞がり、その向こうに、ここでない外がまた見えて来るだろうし、またつい踏み出してしまいそうな道も引かれる。それなら、待つだけ無駄と考えるなら、宙返りを打って、中と外を入れ替える離れ業に賭けるしかない。それでそうして、ここが外なら何処へでも行けて、ここが中なら何処へも行けない。そうなったとして、ここが外なら何処までも外で、ここが中なら何処までも中で、それでは外と中はずっと離れたままで繋がらず、ここであろうが中であろうが、どうという事はない。中なら中、外なら外で良し、外

その先を考える用はない。もう幾らそこで宙返りを繰り返しても、ただ引っ繰り返ったものが着地と共に元に戻るだけでは、どんな宙返りも座して待つのと同じ。いや何も待たずに座すばかり。しかしそんな宙返りなら、空気のように軽く透き通って、その姿の何処にも晒されないで、心行くまで打ち続けられそうだが、それでも終わりは来る。外の外へ外へ…。或いは、中の中へ中へ…。何もしなくても、そのどちらかに収まるのは避けられない。初めの宙返りから無効だった。その先に答えはない。それでも尚、軽く透き通っていたいなら、中でも外でもない所へ行くしかないが、実際は、中であっても外であっても良いそこに愈愈収まって行く。その増すばかりの重さに抗って宙返りを打てるか。中でも外でもあるようでは、何も入れ替わらない。軽さと重さが入れ替わるなら、或いはそこは、中でも外でもなさそうだが、恐らくそれは、二度と戻れない一度試されて終わりの宙返りで、後に残るのは、裏返った軽さと重さが折り重なる差し違えた死骸のような、（二〇一一年二月五日）

（濡れた地面に…）

濡れた地面に揺れが来て、土を拡げた。それから地鳴りの遠ざかる方を見れ

ば、その揺れによって地肌は撫でさすられ、低い空の下の地平線に至るまでが、艶のある白い獣の悶える姿に見えた。直にその獣は、仰け反ろうとして僅かに腰を浮かせたきり、土に埋もれた。足元に向き直ると、土の拡がったせいで、そこに小さな裂け目が開いていた。覗くと、中は狭く丸い穴が深い。その覗き込む目玉が片方、ぽとりとそこへ落ちれば、ぴったりと嵌って穴の奥を塞ぎそうだった。しかし真下に穴をじっと覗き込むにしても、そう簡単に目玉は落ちたりはしない。そのままの姿勢で、日が暮れて夜が明けて、日が暮れて夜が明けて、三日目になった。三日目は空気が違う。目玉は遂に卵のようにドロリと落ちて、水滴が地面に浸みて行くように、穴の中に吸い取られた。穴の奥は暗くて、よく見えない。指を一本入れてみたが何もない。狭い中、五本の指を全て入れ、拳にして無理に穴を押し広げて奥へ進めた。腕が殆ど穴に収まり、腕が地面に触れそうになって、拳は少しだけ硬い物に当たった。腕を抜くと、五本の指は白い弾力のある玉を掴んでいた。落ちた目の中に入れようとすると、そこにもう目は入っていた。目玉は落ちてはいなかった。目玉に見えて落ちて行ったのは、何だったろう。玉が指を擦り抜けそうになり、指が抗うと玉は水になって、歪な形を見せる穴の縁に零れた。少しだけ張り出した穴の縁が濡れて艶を出し、歪さを際立たせれば、それはこの土地の歪さに違いない。確かめるようにぐるり見渡すと、土は暗いままどの様な姿も現わさず、それでも目を

凝らすと、それは大きな水の塊になって僅かに傾く方を向き、獣のような息遣いを、（二〇二一年二月七日）

（初めの内こそ何処かへ…）

　初めの内こそ何処かへ向かって水を切って泳いでいる積もりが、最後は、何処だが分からない大海原の真ん中で、溺れて死ぬだけ。そこへと俺を行き着かせたのも、俺を溺れさせるのも、全て己の妄念で、俺はその妄念の海を漂って藻屑と消えるだけの者。そんな情景などをぼんやり思い浮かべていた男は、もう死んでいるのかも知れないが、他に出来そうな事もないので、まだ何かを思い出そうとしていると、「死んではいないさ」と声を掛けられた。そんな彼に声を掛けられる者など居る筈もない。遠くの誰かのお喋りが紛れ込んだらしい。見渡すと、妄念の海などなく、変化に富んだ陸の光景が、そのままに変化し続けていた。ここが何処であるかは、その変化によって定まり、それを憶えておけば、自分の居場所を見失いはしない。仮にその居場所が壊れても、その壊れて行く変化の中に、嫌でも己が何処に居るかは見出されるしかない。しかし長居は禁物。それらの変化が、何時また大海原のように、ただの平板な拡がりに

しか見えなくなって、直にその拡がりは、己の妄念の渦へと巻き込まれてしまうか知れない。とは言うものの、その陸の変化の中に逃げ場がないのも確かだ。それでも変化の外へ逃げ出すとすれば、そこが真っ暗な窖だろうと、もう彼は、妄念の海に投げ出され、溺れ掛けていないか。尤もそれは、溺れて死ぬだけの元へ戻っただけ。無理に変化の外へ逃げようなどと足掻くまでもなく、何れはそこへ辿り着く筈。「そうとも限らないさ」と声を掛けるのは波の音で、彼はそれにずっと欺されて来た訳だが、そのせいもあって、またぞろそれは、懐かしい響きを伴った慰めに聞こえて、「俺もまた、初めからそんな波の一欠片であれば良かったのに」「そうじゃなかったとでも」と隣の波が笑って砕け、（二〇一一年二月九日）

（深夜ガリヴァ旅行記を…）

深夜ガリヴァ旅行記を読んでいて、どうしてもその先へ読み進められない、おかしな所に行き当たって難渋する内、眠ってしまった。次の夜、早速栞を挟んだ頁を開いて読んではみたが、昨夜とはまるで違う文章だった。結局朝まで掛かって初めから終わりまで注意深く読み直しても、おかしな箇所は何処にも

なく、寧ろガリヴァ旅行記の完璧な明晰さに驚かされ、白んで行く東の空から先へ続くこの世界の丸ごとが、何処にもおかしな所は無く、一切が明晰であるとの確信を得る始末だった。いや一つ何かがおかしい、と振り返ると、こちらを見詰める蜥蜴の顔がおかしかった。近付こうとすると蜥蜴は部屋の隅へ逃げ、そこで喉を磨り減らすような音を立てて咳き込んだ。何時もなら、ねじ曲がったゴキブリの死体とドロドロの蜥蜴フードの塊を吐くのだが、胃液塗れの紙切れが出て来た。僅かに見覚えがあり、拡げて書かれた文字を辿るとそれは、前夜難渋したおかしな所を読み解こうと、半分眠りに落ちながらも、何とかそのおかしさの要点を書き取ったメモだった。これでもう夢の中の出来事では済まない。しかも書き取れた内容は、かなり要点からずれているように思えて、前夜読んだガリヴァ旅行記の内容を初めから順に思い出して書き出して行った。すると矢張り、おかしな所に行き当たってペンは止まり、為す術なくぼんやり本棚を眺めていると、ガリヴァ旅行記があるのに気付いた。徹夜して読んだ方は机の上にある。ガリヴァ旅行記は二冊あったのだ。急いで本棚の方を読み始めた。そこには今思い出して書き出した通りの内容が書かれていて、前夜と同じく、どうしても先へ進めないおかしな所で、頁を繰る手は止められた。動き出した朝の景色に明晰な所など一つもなく、その本の中と同じに、この世界の丸ごとが、決してやり過ごせない、おかしなものに変わった。もう会社の始ま

る時刻だったので出版社に電話を入れた。「ガリヴァ旅行記の贋作を出版されているでしょう。」「はいでは、著者と替わります。…あー、スウィフトですが何か」「スウィフトさんとやら。贋作なんか出さないで下さい。おかしな所に行き当たって、先へ進めず迷惑です。」「や、何頁ですか？…そうです、そこを見付けたんですね。分からないように書いた積もりだったが。そうなんですよ。おかしいでしょう。そのおかしさは、原作の中に隠されているもので…」「原作におかしな所は一つもありません。全て実際の通りに書かれています。リアリズムのお手本です。」「そうです。そうであるのが、それこそおかしいのです。何ともあの野蛮なアイルランド人ときたら。それであなたと同じに読み進められなくなりまして、一計を案じ、記録した動画を巻き戻すように、原作を終わりから始めに向かって辿りながら、つまり話しをその細部まで一々ひっくり返し、それを逆に逆に繋げながら書いてみたのですが、それでも矢張り、あなたの見付けた所まで来ると、そのおかしさに囚われて、そうなるとどうしてももう、そこを抜け出せなくなり、それで苦し紛れにそこは逃げて、そこからは、原作など放り投げて、読む価値のない適当な出鱈目を書き連ねるしかありませんでした。でも何も気付かず読み切って、その出鱈目な方を、段々と盛り上がって面白く読めました、とっても評判ですよ、なんて言ってくれる人も居りましてね。でもそれより、私はあなたと話せて嬉しいんですよ。そこで一つ、

（二〇一一年二月十一日）

（引っ掛けた鉄条網を…）

引っ掛けた鉄条網を引き摺って進む内、次々に鉄条網が纏わり付いて来て、雪達磨式に脹れて行く。もうなかなか真っ直ぐには進めない。鉄条網の塊が重過ぎて、それに引っ掛かったまま、その周りを巡っているだけか。それならまだ脹れ上がった鉄条網の塊を、その場で、ゆっくりと回してはいるだろうか。勿論そうとばかりも言えない。塊と雖も鉄条網なのだ。縺れて潰れて固まりもするが、気紛れに解れたりもする。それを引き摺って進めなくなっているのは、その解（ほつ）れのせいかもしれない。いや解れているのは、どうやら私の方なのだ。私は、遠目には鉄の塊にしか見えないような、固く押し詰められた鉄条網の塊で、その端から順に解れていて、その解けた鉄条網が絡まり合って、それが脹れてまた絡んで、もうその端まで見通せない大きな達磨を拵えてしまったに違いない。では初めに鉄条網の塊の私に引っ掛かったものは何だったのか。それはもう、達磨の中の奥深く、その芯になっていないか。それともまだその尻尾の方で、引っ掛かったままの姿を晒しているか。或いは、鉄条網の私

が別の鉄条網に引っ掛かって、互いを引き摺り合う内に、達磨になってしまったのかも知れない。そうしてその場を巡っていた積もりが、何時の間にか、その達磨の体内に潜り込んでいて、それでも円を描くように進めば進むほど、その芯へと近付いているようで、そうであるにしても、進むのを已めようとしても止まらないからには、寧ろその芯の方へと呑み込まれて行く、と言った方が近い。どんどん窮屈になって、それはまた縮んでいるらしく、私が芯に辿り着く頃には、達磨は、全くの鉄の塊にしか見えないような、固く押し詰められた鉄条網の塊になっているに違いない。しかしもう芯の辺りまで届いていても良さそうだ。いやそれでもここは、何処か芯を外れているようであり、その外れたまま堂々巡りをしているようだ。そうして遂に、そこだけ段々と鉄条網が擦り切れて、小さな空間が出来て、その中でなら、（二〇一一年二月十三日）

（着ている服が…）

着ている服が間違っている。風を壁のように止め空気を骨のように硬くし、重い足枷を付けて地中を歩くかのようだ。ここで服を脱げる筈もない。服は拡大された砂粒にそっくりで、体はそれにすっかり覆われている。だからこそ、

砂時計の中の砂の一粒のように、時の流れを滑って行ける。いや、それは見掛けだけで、埋もれたままでは時は止まったままで、その止まった時は、時々ギシギシと擦れ合う音を立てるだけで、何処へも流れて行かない砂のようで、その中で、その擦れ合う音の中に閉ざされて僅かに動いては戻るだけの時となら、気が向けばクネクネと絡み合えたりもするらしい。それなれそれで、脱げる筈もなかったが、服を脱がずにいて良かったのかも知れない、と思えると、どうやら裸だった。そして地中ではなく、向きの定まらない風の吹き抜ける地上を、向きも分からず歩いて行かねばならず、向きを決めようのない裸では、止まった時を少しも動かせはしない。しかしそうして止まった時の中にただ居られるなら、風のように軽々と動き回れるという訳で、長年私を抑え付けていたものから解き放たれたのか、と思うと、裸である筈がなかった。仮に何処かに隠されたまま私をずっと抑え付けていたものがあったなら、それらの方こそ解き放たれ、私に何重にも纏わり付いて、風に靡いて軽々と動いているに違いない。或いは、そんなものなどなかったとしよう。それでもその服は、止まった時に馴染むままの私にぴったりで、脱げる筈もない。そしてやはり、着ている服は間違っているに違いない。何故なら、それは無闇に風を起こし、私の体をその風よりもずっと軽いものにしてしまうのだから。私はずっと地上に晒され、どれ程疲れようと傷付こうと、風よりも軽い振る舞いを続けるしかない。しかし

その止まった時も、一切を押し流す時の力には抗えず、時でなくなる時が必ず来る。時でなくなって、それは塵になるのか水になるのか影になるのか、孰れにしろ時が時でなくなれば、服も服でなくなって朽ちて行くだろうか。それとも服だけは残って、別の止まった時へと絡まって行くのなら、そうとも知らず私もまた、いそいそと砂に埋もれ、間違いを嘆くための砂の服をもう着込んでいて、（二〇二一年二月十五日）

（車の修理を…）

車の修理を頼んでおいた。それが、他に代え難い人生の重大事に思えてしまう。もっとずっと大変な深く考えるに値する事がある筈だと思い巡らしてみるが、特にない。生まれて来た事と死んで行く事、その二つくらいが結局それらしいが、それらにしても然したる事でもなさそうな。それを確かめようと、整備工場に足を運んだ。人手不足なのか人が余っているのか、整備工は皆痩せた老人で、私の車を扱うのは、百歳を超えていると言うのが自慢の男で、車体からエンジンを取り出したところだった。それは赤錆にすっかり覆われ、所々欠けたり罅が入ったりしている。細かく眺め入る程、その鉄の塊が自分の心臓に

思えて来た。「これで直りますか」「直すさ」と男が言うと、彼の玄孫くらいのひょろりとした若者が数人、吊り上げられたエンジンに走り寄り、青っぽい溶液を振り掛けては、小さなブラシで磨き出した。自分の心臓がそのようにされているのだ。いや、そうでなかったとしても、私はそれをそのように感じるしかなく、悶絶した。気が付くと、運転席でハンドルを握り、前のめりで、一杯までアクセルを踏んでいる。車は勢い余ってもう、切り立つ高い崖を飛び出ていた。猛スピードのまま車はどんどん落ちて行く。しかし崖下の何処にも激突せず、車は何時までも何処までも落ち続けた。「なるほど、こうした事なら」と私は呟く。「生き死にに勝る重大事だろうか。少なくともその人生の道程からは逸れてしまって、こうして果てもなく」崖の景色も消え、（二〇一一年二月十七日）

（進む道は一本で…）

進む道は一本で知らせる相手は間違えようがない。しかし少しでも速く走ろうと気は急いて、何を知らせるかを忘れている。まさかそれは初めから頭に入っていなくて、それなら手紙か何かを持たされているか。その心当たりもなけ

ればきっと知らせなければならない事は、体に刻み込まれているか、或いは私の体そのものが、その知らせなければならない事。そうなら、一本道を何の考えもなしに走り続けて良いものか。一刻を争う程の事ならば、悪い知らせなのだろう。私の体が届けば、私は労を労われるどころか、彼らのその悪への憎しみによって、真っ先に処分されてしまうに違いない。足を止める訳には行かない。悪の大波は背後に迫っている。食い止められるのは、彼らを措いてない。しかし足は重くなるばかり。ここで足を止めて何やら分からない悪事に呑み込まれる位なら、いっそ来た道を戻って、最後にその憎むべき正体を真っ直ぐ見据えて遣ろうか。彼らに罵られながら処分されるより余程増し。そうは考えても背後の悪に手足を操られるように、振り返る事も儘ならず、前を向いて走り続けるしかなかった。しかし道を逸れる事なら出来そうだ。道の左右は、崖でも壁でもなく、ただ道よりゴツゴツした草は生え放題で、走り難そうなだけだ。そうして私は道を逸れていた。いやそれまで通り真っ直ぐ走っているが、道の方が勝手に逸れて行くのだ。などと遠ざかる道を横目で睨んでいる内は良かったが、その道が荒れ地の向こうに消えると、どちらを向いて走れば、それが真っ直ぐな方向か分からない。走れば走る程、却ってまた道に近付いてしまうのかも知れないし、悪い事の方に引き返してしまっているのかも知れない。しかし転んで骨折でもしない限り、足は止まりそうにない。均された道よりずっと

走り難い筈なのに、走る速さは少しも変わらず、凸凹に足を取られて蹌踉ける事さえない。もう今頃彼らは、悪の不意打ちを喰らって、大波に打ち砕かれるように、（二〇二一年二月十九日）

（彼らは言葉を…）

彼らは言葉を掛けたが伝わらず、そのせいで泥濘に足を取られた。誰かが言葉を返したが、もう言葉ではなく泥濘に心囚われた彼らには、その言葉は伝わらす、言葉を返したその誰かの足下も、覚束なくなって来た。言葉は、ただ伝わらないだけで、そんな面倒を引き起こす。言葉はなくて済むし、言葉が巧く伝わったところで、これと言って何かが好転するでもなかろう。などと誰かが言い出せば、それを言った者も聞いた者も、泥濘に足を取られる位では済まなくなるかも知れない。それなら言葉を、伝わったり伝わらなかったりするものでなくせば良い。たとえば出掛けに、それぞれが独りで、その人に備わる言葉を発しておき、行き会った時には、その行き会った事を以て、言葉を掛け合う事は済まされたと互いに理解し合い、その理解からしか導かれない事態にのみ黙って専心する、というのはどうか。その独りでの言葉とはどんなものだろう。

これから向かう先の空を見上げ、大声で腹に溜まった事を吐き出す、或いは今日一日自らと自らが係わる相手の幸運を祈りつつ、その相手と交わすであろう対話を独りで語っておく、などというものではない。それでは時と所と言い方を変えたに過ぎない。そうではなく、誰かと行き会うかも知れない所へと現れ出たその姿、そこにその身を隠さずに居る事が、その言葉なのである。いや誰とも出会さない所に籠もっていてさえ、その居る事、その姿が言葉なのではないか。であるなら誰の足下も泥濘んだりはしない。「こんにちは」とその彼に誰かが声を掛ける。空耳か。しかしもしそれが彼に言葉として聞き取られてしまったらどうか。泥濘に足を取られる位では済まない。泥濘で溺死かも知れない。尤も、その死んだ姿も彼の言葉であるなら、そこで無事彼の言葉は発せられ全うされたのである。彼に声を掛けた方は、自分のした事に気付きもせず、そこに居るだけで言葉であるその姿を晒し、言葉での遣り取りが済まされたと理解し合う相手と、黙々と仕事の相談を始めていて、（二〇一一年二月二十一日）

（思い出すに値する…）

　思い出すに値する、そのまた中心を占める事柄だけを、その通りに思い出さなければならない。それは一つしかない。しかしいきなりそれだけを、は少し無謀で、周りから順に思い出して、段々と核心に迫って行く、いや、そんな遣り方では駄目で、濁った中から順に混じり気を取り除いて、透き通らせて行くような遣り方も、いろいろな角度から眺めたり測定したりして近似値を得るような遣り方も、何の効も奏さない。思い出すに値するその事だけを直ぐに見分け、ただそれだけをそのままに取り出すのでなければ、今日の仕事の予定を思い出すのと然して変わらない。仕事さえ捗れば忘れられて済まされる。それで済まない事もあるにはある。それは、目先の仕事の出来不出来でなく、もっと先のもっと大きな事を肝に銘ずべし、それこそ思い出しておくに値するであろう、というような事かも知れない。しかしそれこそ空疎な答えでしかない。例え雲の上の神仙界とて所詮塵界とは地続きな訳で、思い出す程の事でもなく、ふと在らぬ方に目を遣れば、ありありとそれは眼前に浮かんで、それで済みそうだ。その地続きである事、終わりに出来ない遍歴を強いる、この希望の大地こそ、思い出すに値する事を彼方へと隔てる。いや彼方とは言い過ぎで、その地続きの距離だけ、と言うべきで、その距離の及ばない先へ、地続きに囚われる方法とは別の仕方で、一瞬にして立ち至れば、もう二度と、それを思い出そうと頭を捻る事からも解き放たれるに違いない。そのために今日も、ひたすら

規範となるような演奏を目指す音大生の、何百年も忘れられずに残った古い曲の練習を、道を隔てて聞きながら、庭いじりに精を出しているのだが、勿論この庭ではなく、（二〇二一年二月二十二日）

（遠く霞んだ…）

遠く霞んだ先、その暗い中に赤い樹を見付ける。滑って転げるようなラジオの女の声が流れる。二つの事は、必ず結び付いていなければならないだろう。二つがそれぞれ別に起こったとなると、何もかもが離れ離れになって、もう何も見付からないし何も聞き取れない。赤い樹がラジオを付けたか。ラジオの女の声が暗い赤い樹を見付けたか。どうやらそのどちらでもないようなら、私は、配達されたばかりのまだ温もりのある濡れた封筒を握り締め、大粒の雨が、重力がふと失せたように、全て止まって見える先に、二つの事を結び付けている何かを探しに行くしかないが、何もかもが離れ離れになりそうな中を、どうやって歩を進められるのか。封筒を開けてみたところで、郵便配達の順路が知れる訳でもない。雨が止まって見えるなら、雨と同じ速さで落ちているにしても、その落ちて行く向きも知れない。それなら例えば、その二つの事が起こる直前

に、私は事故に巻き込まれたか戯れに自殺を試みたか、生死の境にあって、それによって二つの事が結び付けられたのなら、私は何処を探しに行く必要もないのだろうか。そうなら寧ろ今や探している真っ最中で、しかも探さなければならないのが私自身であると分かっていて、それでもそれが見付からないような気ばかり焦って、ただ無駄な時を過ごしているばかり。いやそのような中から抜け出す道こそ探さなければならないのだが、時はもう全く残っていないどころか、苦し紛れに恐らくは時を逆に回してみて、その中にやっと、離れ離れになりそうな、或いはもうなってしまった諸々を映す出し、辛うじて、女の声のように流れる私が、暗く霞む赤い樹になって見付けられたか、或いは、それとは少し別なそのような事共はもう何処にもなく、逆に回ったにした時も、開けず仕舞いの封筒か、一瞬で風に砕ける雨粒の中に、閉ざされてその行方の知れる筈もなく、（二〇一一年二月二十三日）

（誰も乗りこなせない荒馬に…）

誰も乗りこなせない荒馬に跨って、彼はずっと戦っていたのではなかったか。それが何処か怪しい。確かに馬の姿は、勇猛であるより、ただ狂っているだけ

のように見える。或いはそれは彼を貶めようとする疑いの眼差しのせいかも知れない。いや馬が一時勇猛に見えたのは度を超えて狂っていたからで、それが幾分でも収まれば、ただの臆病な駄馬なのでは、と疑いを抱くのは彼自身で、乗り手にそう思われてしまっては、馬はその通りであるしかない。もう鞍から浮いて、彼だけが柔らかい砂の上にそっと降り、そのまま腰を落としていた。戦うだけが取り柄の者には、凡そぐわない場所と姿勢ではないか。過酷な戦いが寿命を縮めて来たなら、その分ここで己の名声が生き長らえなければ割に合わない。振り返ると馬はもう剥製とも見紛った。戦いに於いて俺がどれだけ勇猛であったか、それが全てなかった事にされ、馬同然にただの大人しい男の剥製で終わってしまうのでは遣り切れない。寿命は帰って来なくても、名声ならどのようにか帰って来る事もあるだろう。女の肌よりも柔らかい決して何も傷付けそうにない砂しかなければ、それを掻き回し掻き分けるしか出来る事はない。もう何処をどう引っ掻いているか分からなくなってやっと、少しだけ硬いものを感じた。砂塗れで自分がどんな恰好でいるのかも知れないまま、指先でそれを辿ると、少しだけ脹れた細い筋が引かれ、塞がれた継ぎ目のようだった。その手前だけが、はっきり白く、継ぎ目の向こうは何となく黒ずんで見えて、それだけで彼は目を背けた。何がそれを分けるのか。砂が被るのを掻き退け掻き退け、黒い方にだけ目を凝らすと、「どう足掻いても、こちらへは

来られないぞ」と血腥い息の声がする。「何故」と彼は尋ねた。「俺達は誰もお前を知らない。」「戦いの場で、俺がどれだけの者を殺し、理不尽な犠牲を強いて来たか。」「それは殺された俺達にしか分からない事だ。俺達にどれだけ恐れられ俺達の心を無残に引き裂いたか。その傷の死を免れない深さが、戦士の名を刻む。お前の方からは古びて行く継ぎ目にしか見えないだろうが、俺達にはそれは今も癒えない傷口で、それが、永遠の戦士の名の下に塞がれるように隠されて、その憎しみもまた永遠に残って行く。誰にも憎まれていないお前などは、いずれ真っ白な丸い砂の一粒になって、（二〇一一年二月二十四日）

（いきなり壁から造り…）

いきなり壁から造り始めている。基礎工事は、その壁の下だけに溝を掘って砂利を敷いて済ませた。柱も立ててないし、地面に一本の線も引いてない。それが外壁か内壁か、どちらが内か外かも決まっていない。そうと分かったのは、直ぐ側で同じ事をしている奴に気付いたからで、それまでは、それが壁であるのも分からなかった。或いは何かを造っている事さえ知らずにいたかも知れない。奴はこちらに未だ気付いていないのか、背を向け腰を屈めて黙って作業を

している。別に話し掛けても構わないだろうが、そちらはこちらより少し暗く、奴がもしこちらの声に驚いて急に振り向けば、眩しい中に同じ事をしている者の影が壁の脇に立って、それはきっと怪しげに映るに違いない。自ずと口は重くなり、奴の辺りはまた少し暗さを増して、もう手元が狂っても、細かな所は直しようがないのではないか。それでも作業は止まらない。鈍い光を受けた丸い背だけが、上下左右に規則正しく僅かずつ揺れて、滞る気配はない。確かに造り出してしまえば、何の迷いも生まれないだろう。ではと自らを振り返り、こちらには迷いが差しているのかどうか。迷いどころか、何だか見分けも付かない見窄らしい残骸が積み上がっているだけで、壊そうにも、何をどうすれば壊した事になるのか。何もなかった事にするには、穴を掘って残骸を全て埋めるしかないが、直ぐそちらの壁が邪魔で穴を掘る場所がない。そちらの壁は、こちらが手を止めている間にも作業を続けた分、出来が良くなって、その壁だけを繋げて延ばして行くべきではないか。そこでもう一度こちらを振り返ると、見窄らしい残骸だったものが、そちらと同じ仕上がりを見せて、すっかり壁らしくなっていて、その作業をしているのは、そちらとそっくりの丸い背を僅かずつ規則正しく揺らす人物で、どちらかが鏡に映る像であっても不思議でなさそうな。二枚の壁は、そっくりにどんどん仕上がって行く。もう壁だけでなく、左右対称の部屋が仕切られ、家具を置く位置も検討されている。それでも穴だ

けは掘っておきたかった、何かをした事にするために。すっかり仕上がった壁と壁の間に立ち、鶴嘴を振り下ろすと、床は大理石で、鶴嘴は大きな音を立てて跳ね返され、その音を合図のように、腕を組んだ正装の男女が列を成して勢い良く脇を通り過ぎ、その先の広間では、急き立てられるように、舞踏会が催されようとしていて、（二〇一一年二月二十五日）

（また損をした…）

また損をした。昨日もその前も損をした。損ばかりで得をした事は一度もない。それでもまだどうにか遣って行けるのは、恐らく生まれた時に、無償で一纏めに何程かのものを得ていたのだ。生きるとは、それを食い潰して行く事で、全て食い潰せば死ぬ。死んで初めて、その人物がどれ程豊かであったか貧しかったか、つまり生まれた時にどれ程のものを与えられていたかが分かる。分かると言っても、他人には分からない。本人が最期にひょっとして僅かばかり分かるかも知れないという程度。であるなら、自分は豊かだから或いは多くのものを得たからと、貧しい者、失うばかりの者を憐れんだり、自分は貧しい或いは失うばかりで何も得られなかったと、多くを得て得ばかりする者、豊かな者

を羨むのは、全くの見当違いだろう。豊かに見えたからと言って、彼はただ豊かに見えるだけのものを与えられ、それを一生掛かって失って行っただけであり、ただそれだけで他に何も与えられていなかったとすれば、彼は貧しい。貧しく見えたからと言って、それはそう見えるだけのものを与えられたからで、それとは別のものを与えられていたなら、ただ貧しいだけの一生だったとは言えない。などと言う理屈を書き並べてみても何も変わらない。何故なら、自分がどれ程のものを与えられているかは、生きている限り分からないのだし、ましてや他者との比較など出来る筈もないのだから。ただ何を失っているか分からないまま、それをどうにも出来ず、今日もまた、何かを失い続けている。そうなら、と彼は一計を案じる。同じ損をするにも、二倍三倍損をするようにしよう。この先損の量が多ければ多い程、俺は生まれた時に多くを得ていた事になる。そう考えてそう行動するのも、予め俺に与えられていた事ではあるのだがな、と彼はニヤリとし。そこへいきなり車が飛び込んで来て、彼は自らの死の瞬間に立ち会わされる。で、俺の一生は損ばかりして、損な一生だったのか。それとも初めに、損ばかりしても生きて行けるだけのものを無償で得られて、得な一生だったのか。どちらとも決めかねる。或いは他の誰かなら、その答えもまた予め与えられ、それを感謝したり逆に恨んだりして死んで行けただろうか。しかし俺には、その答えが与えられていない。全くもう時間が残されてい

ないというのに。いや待てよ。俺は全く見当外れの事を考えているのではないか。損とか得とかでなく、もっと別の事を考えて行動しなければならなかったのでは。いや抑も、考えるとか行動するなどという事からして怪しい。それらとはまるで別の何かがあって、それに向かって生きるべきだったのではないか。それが彼の最初の悩みになって、（二〇一一年二月二十六日）

（桜が咲いた…）

桜が咲いた。桜は咲いていない。桜が咲いたという声を聞いただけ。ぬかるんだ道のじめじめした中を三日も歩けば、その声に辿り着けるだろう。帰り道を間違えないように、後ろを振り返っては、慎重に景色を描きながら。しかしその慎重さは何の考えもなく、ただ目に付く所に拘ってそこばかりを丁寧に描くだけで、描いている間にも心細い。それでも気候の良さに気を取り直せば、背後の景色はすらすらと写生帖に収まって、桜の声はもう直ぐそこだ。登りが終わって、草の匂いのしっとり濡れた平地が開けた。小川の先に大きく枝を広げる桜の木がもう花を咲かせ、根元で男が刈った草を重ね、床を敷いている。真上から柔らかな暖かい色の光りが注ぐのに、その床の周りだけは夜を纏うよ

うな色だった。夜の色は小川の端を染めていて、より鄙びた方へと逃げて行きたい者を誘っている。きっとそれは罠なのだ。小川を超えれば、いきなり闇が来て、断崖の底へ突き落とされるかも知れない。後ろを振り返り様、写生帖は腋を擦り抜け、ぬかるんだ斜面を見えなくなるまで滑った。その細い山道も夜の中に溶けて、小川を跨げないならば、その流れに付いて下って行くしかない。桜の根元はと見れば、延べられた床に横たわる男の柔らかな腹を、突き立つ刃のような背の高い女が見下ろしている。その先に起こるのは酷い秘密なのだ。それでも水の流れに従えば、その酷い展開に立ち会わずに遠ざかって行けるのを嬉しく思えた。周囲の夜の色は、闇さえも突き抜けて、何処までも濃くなって行くというのに。そしてもう振り返っても決して何も見えないだろうと思えた所で足を止めると、濃過ぎて何の色かも分からない中に小さな窓の明かりが浮かべば、そこでもし振り返ってしまっていたら、どんな災いが降り懸かっただろう、その窓の色を見て取れるまでは進んで行けるのをまた嬉しく思って歩み始めると、その先の方から地中を這う低い音が来て、それは地の果てまで覆いそうなる地鳴りに違いなく、背の高い女の横を向いた冷たい色の片頬がその震源であるのなら、桜の声は、その女の息の捩れて伸びる虚ろな響きを空っ風が伝えたに過ぎず、（二〇一一年二月二十七日）

（Ａの外とＡの中…）

　Ａの外とＡの中。それにＡ。Ａとは、外と内の間にある部分か、外と内を含める全体か。先ずＡがあって、その内と外があるのか、或いは、二つ別の事があって、それがＡによって結び付き、片方がＡの外へ、もう片方がＡの中へ収まったか。どう考えようと、考えた限りその答えは常に正しく、考え直す度に答えは変わり、果てがない。それがＡであり、であるのでＡは侮れない。Ａが何もせずに、ただそこにあるだけで、数限りない事柄が出来する。それらを並べ描写し分析するのは他へ譲るとして、取り敢えずＡの外を概観してみよう。しかし概観とはまた取り澄ました態度ではないか。概観など出来る代物であろう筈がない。Ａの外を見付けるだけでも、それだけのための或る狂気とでも言うしかない態度が不可欠だが、一体、狂気のような態度を取るとは何をどうする事か。狂った振りなど無力で、こちらがどうしたところで見付かるものではなく、いきなりＡの外が見付かってしまって、狂気のような態度に陥るだけだ。だから初めは、Ａも外も何も一つも分からない。いや、Ａの外などと尤もらしい呼び名を与えてはいるが、やっとそれで一息吐いているだけで、何一つ分からないままに、それを見付けてしまった当初と何も変わっていない。それにそ

れはこちらが付けた呼び名ではなく、初めからそれはＡの外として見付かったのであり、それに気付くだけで、大量の狂気のようなものが注ぎ込まれなければならなかった。より精確を期するなら、それが何かの外であると気付かれるまでに、大変な時と労力が費やされ、その外であると分かれば、Ａは直ぐに見付かった、と言うより、Ａは疾っくに見付かっていたが、それが、見付かったものとどう係わるかが不明であったという事だ。ＡがＡであるだけなら、それは何の変哲もないものであって、それがＡの外という姿と共に現れた時に、その様相を一変させたのである。つまりＡに外があるとなれば、Ａに中があるという発見に直結する訳で、その中と外を挟んで、Ａという訳も分からないものが嫌でも目に入り、（二〇二一年二月二十八日）

（エジプトに居る友人に…）

エジプトに居る友人に珍しい馬を送る。彼より馬を分かる者はいない。旧い仲でエジプト人ではないが、会う度に彼の国の人のような風貌になって、訳を尋ねるとエジプト美術を遣っているからと言う事で、あちらへ行ったきり長く戻らない。その馬を、野暮用で出掛けた帰りに偶々通った山で捕まえた時、真

っ先にエジプトの壁画に描かれた馬と似ていると思えて、それで彼の事も思い出した。暫くして連絡が来たが、それはエジプトからではなく私が馬を捕まえた山からだった。それによるとすっかりエジプト通になった彼は、研究者も匙を投げる或る馬の壁画の研究に没頭し、その描かれた情景を探し回る内に、その山に辿り着いて、隅から隅まで、そこを歩き回ったが、それでも目当ての馬の野生種は遥か昔に絶滅したと考えるしかなく、今は家畜馬の中に、その血が引き継がれていないか近隣の地域を探しているのだが、送られて来た馬を見て大いに驚いている、との事だった。そしてもう一つ、送り主であるあなたは、私の旧い友人との事だが、私はあなたの事を幾ら頭を捻っても思い出せずに困惑している、ともあった。早速私は山に向かった。その場所は地図の上では分かるのだが遠回りばかりしてしまうのか、中中行き着けない。地図を眖めば眖む程、その山の方角に背を向けて、地球を一周する程の遠回りが必要であるようにも思えてしまう。明らかにそれは、焦りから自虐的な気分に陥っているせいだと自らに言い聞かせてみても、やはり最も現実的な選択に感じられ、結局足はそちらへと向かった。そうして道を一本横切れば、そこはエジプトで、その山の事を尋ねると誰も知らず、逆に何故その山なのかと問われて壁画や馬の説明をすると、それは初めて聞く話しだが中中面白いと、付いて来る者が後を絶たない。その彼らを何とか撤いて独りエジプトを脱出すると、そこは、先は見

えないながらも何処までも緩い上りで、一歩一歩目当ての山に近付いていると言う実感だけは湧いたが、ただそれだけでは増して行く疲れに抗えず、遂に足は止まり倒れ込んだ。遠い地響きに振り返ると、あの馬の群れが砂塵を上げ、その背に跨がるのは、付いて来ていた連中と同じ顔だが、旧友の顔もその中に紛れていたようで、彼の姿を探しはするがその内に群れごと砂塵に霞み、地響きが収まれば、白い裸馬が静かに傍らに居て、あの馬の群れの一頭に違いなかったが、誰より馬の分かる私の目は欺けず、それはエジプトに送った馬とは似ても似つかないが、それでもそれに跨がって先に進むしかない。すると上りは終わり、そこから急な下りが終わりなく続いて、決してエジプトではない見知らぬ景色、しかし見知らぬながら、どの細部に至るまでも馬と同じに、その何であるか悉く分かってしまう景色が拡がって、それで、エジプト通の彼を旧い友人と思い込んだのが全くの勘違いであったと馬上で確信は出来たが、その分、山へは遠回りすらしておらず、何処までも遠ざかって、このままでは決して行き着けないのに、(二〇一一年三月一日)

(招かれたのでも押し掛けたのでも…)

　招かれたのでも押し掛けたのでもない狭い部屋で、席は幾つか用意され、一番乗りで取り敢えず端に座った。知り合いの女とその親族で席が埋まると、年長の一人が色褪せた新聞を取り出し、その中の幾つかの記事を混ぜ合わせて、嘘に決まっているような話しを拵えた。新聞が回され、同じような嘘話しがされ、番が回って来て彼らを真似て辿々しくはあったが、出鱈目な話しを何とか為果せた。誰の何の反応もなし。日が改まり、また同じ部屋で、席は部屋中隙間なく埋まり、知り合いの女の親族も居たが知らない顔がそれを圧倒した。色褪せていない新聞から一つの記事が取り上げられ議論は熱したが、理解出来ないどころか聞き取れない。中休みとなり、糞の味のする菓子と黴臭い笹の匂いの茶が出て、堪らず抜け出した。夜で、庭の草は粘っこく濡れ、灯りに背を向けると、暗い竹藪の中の細い道を登っていて、ぬるりとした高い段差を踏み越えれば、月明かりを浴びた白い天神の輝く池だった。畔に池を眺める男が居る。離れた所に同じ出で立ちの別の男。叢で見難いがまた遠くにも居て、池を囲んで五人。それらを結ぶ正五角形が、円い池の形を抑えて、五角形の宙の上で連句でも結ばれているような、名月や池を巡りて夜もすがら。月明かりに群青に照り映える蛇を踏んだか踏み損ねたか、池の方に足を跳ね上げ、音もなく仰向けに倒れた。空耳に違いない神楽の響く方、低い頭をまた低く仰け反らせて逆様に一面の竹藪を見下ろせた。その細い道を、寄り合いを終えた者らは一列に

帰って行く。同じ道の筈なのにこちらへ向かう気配もない。人が絶えると、道も竹に塞がった。身を立てようと体を捩っても、草を枕の頭はより低い方へ滑るばかり。月明かりも池も、叢の奥に傾いて失せ、五角形だけがそこに架かれば、何処が何処やら、反り返るのは背を這う露と、（二〇一一年三月二日）

（暗い木箱の…）

暗い木箱の中からでしか人と話しが出来ない。しかしそれは嘘で、そのような男が木箱の中に居ると宣伝して回るのは、その男と同一人物である。そうして彼は、木箱の中の男にしか話し掛けられない者を連れて来て、熟達した奇術を用いて、気付かれずに木箱の中に潜り込み、木箱に閉じ籠もるままの男を演じる。しかし或る日、どうしても木箱の中に入れない。饐えた臭いの染みたじめじめした暗がりに身を置くのはもう沢山で、幾ら気力を振り絞っても、己の気持ちを変えられなかった。苦し紛れに、箱の中には誰とも口を利きたくない男が居て、それでも話し掛けられるのを待っている、という事にした。そんな言い草を信じるのは余程のお人好しで、彼は信用をなくし、箱は打ち捨てられた。そこへ自分は木箱の中にずっと居られるという男が現れ、そいつと組んで、

使い古した木箱は捨て、新しい木箱で同じような事を始めた。初めの内は以前と同じに人を連れて来られたが、段々と誰も来なくなって、その箱も捨てるしかなくなった。その箱はそのまま埃に塗れ、直にバラバラに壊れた。しかし使い古した前の方の箱は、捨てられた時のまま、埃も被らず壊れない。その箱には、本当に暗い木箱に閉じ籠もってしか人と話しが出来ない男が、何時の間にか住み込んでしまい、そんな男にしか話し掛けられない者らが集まって来てしまったからだ。と言うこの話しは、どうやら一種の教訓話しらしいが、一体何の教訓が含まれているのか。嘘でも良いから仕事は一人で貫徹させろ、と言う事か。或いは、一人で完結する仕事の道具には、それだけで人を惹き寄せる何かが宿るが、二人組の仕事の道具は、仕事が終わればただの不要品になってしまう、と言う事か。「どっちにしろ」と二人組の一人が提案する「木箱に持って来いの男が、勝手に閉じ籠もってくれたんだ。奴を利用しない手はない」「いやそうじゃないんだ」ともう一人が反論する「俺もお前も初めから、一つの木箱に閉じ籠もったきり一度も外に出ない男の妄想の中で息をしていて、だから利用されっぱなしなのは俺達の方で、どんな教訓だろうと、所詮奴にしか通用しない」「いや教訓について俺達に話し合わせるためなら、それだけで俺達に通用している。教訓話しはもう終わっているのに、こうして二人で話し合えるのも、教訓が役に立っているからで」「空っぽの教訓も使い方次第という教訓

か」「しかしお前は誰だ」「そういうお前は誰だ」「ひょっとして俺達の内の一人がずっと箱の中に居て、もう一人が、箱に話し掛けてるんじゃないか」「それは同意したい、が、その同意は空っぽの教訓と同じで、（二〇一一年三月三日）

（先住民は…）

先住民は、立ち向かう者はその場で殺され、そうしなかった者は奴隷にされ牛馬のように潰されて、命を落として行った。残ったのは彼一人で、近寄り難かった。一人残ったので近寄り難いのか、近寄り難いので一人残ったのか。暫くすると、その彼が、征服民を全て従わせた。皆殺しにしないまでも、重大な災禍を彼らに負わせる事も出来よう。しかしそうはせず、する事をなくし、誰にも知られず旅に出る。国境を越えて更に歩き、もう歩く事もなかろうと思えた所で足を止め、辿々しい手付きで、それまでしたことのない新しい仕事に就く。「それであなたは復讐を果たしたのですね」「誰の？」（二〇一一年三月四日）

（カウンターで…）

カウンターで「水割り」「ここはミルクバーですが」「そうなのか、しょうがない、じゃミルク」「どうぞ」「不思議な味だが」「母乳です」「牛乳より高く付くだろう」「いいえ」「疫病で今日日牛が足らないのか」「いえ妻の乳が張って、幾らでも母乳が出て困るのです」「しかし他の客には白い牛乳を出しているようだが」「まあそうですが、それより、何なら妻の乳首を直接吸って貰えませんか」「夫であるあなたがしなければならない事ではないのか」「勿論、吸えるだけ吸いました、それでもう、下痢気味で、今も腹一杯なんです」「しかし、何故他の客には見向きもしないで、私にそうして欲しいのか」「それはあなたが私達の息子だからです」「私は赤ん坊じゃない、あなた方とは同年代か或いは私の方が年長だろう」「大地震で、分厚い岩盤がバネのように跳ねて、ずれてしまうように、時もバネのように跳ねて、大きくずれたのです。ジはジでも、大地の地でなく時間の時の、大時震。空間が揺れるのと同じに時間も揺れるのです」「それで？」「私達は、その時の大揺れに襲われ、赤ん坊だったあなたを、そのずれの向こうに持って行かれてしまったのです」「仮にそんな事があるにしても、誰もそれには気付かずに普通に生活しているが。一体何がどうなって、

そんな事が起こり得ると？」「何がどうだからとか、そんな事は、どうとでも話しを丸められる嘘吐き共が捻り出すでしょう。全ては、あなたが私達の前に居る。それで十分です。何故妻は大人を腹一杯にしてしまう乳を出すのか。それは、赤ん坊でなく、大人になってしまったあなたを母乳だけで育てなければならないからです」「残念ながら私にはもう母乳は、あなたと同じ、飲み過ぎれば下痢を起こすのが関の山で」「しかし妻は、いやあなたの母親には、喜んで乳を吸うあなたが必要なのです」「いや、時が止まったなら別だが、ずれた時であるなら、私も私の母親もずれてしまって、元の鞘に収まれる筈もないだろうに居るからこそ、こうして出会えて言葉を交わせるのです。時と一緒に私達までがずれていたら、あなたは私達には何時までも赤ん坊で、あなたはいきなり耄碌した私達の顔を覗き込み、何の不思議も感じないまま、それを受け入れてしまうでしょう」「それこそ時だけの仕業ではないのか」「時だけの仕業？　時なんて時じゃない。それは私達がずっと変わらないからこそ、そうなのです」「それじゃ時間は止まったままだ」「時間は止まっていて、私達が変わらないせいで、時間がずれて、それに私達は巻き込まれる。誰の仕業かと言えば、私達自らの仕業でしょうね。地震と同じように」「？」「私達が絶えず先に揺れ

ていたら、地面のずれなど私達に何も感じさせませんよ。時のずれも同じです」「いやそれならあなたは私とは出会えない」「時がずれている限り、何時だって出会えます。その時のずれの中で、惨めな程に真っ直ぐに」「惨めなだけは確かにしても、あなたも私も、時に抗える筈はないさ」「それでどうして、時のずれに、あなたを持って行かれる事がありますか？」「抗えなかったからだろう」「あなたの母親をご覧なさい。時に抗う事の他に一体何をしていますか？」「じゃ乳を吸うのは止めにする。私に時に抗う理由もないからね」「たっぷり乳を吸って大きくなったあなたなのに？」「それなら私は時に抗ってないじゃないか」「いいえそうしてあなたはずっと時に抗って来て、だから今あなたたたけのものである止まらない母乳を前に出来るのです。ずれて行くばかりの時が、どうしてあなたをここまで連れて来られるでしょう」（二〇一一年三月五日）

（川の水嵩が…）

川の水嵩が増し中州のホテルが孤立した。嵐は何日も続き、大掛かりな救助が続けられたが、取り残された人達の見詰める前で、救助隊員が何人も流されれ

た。結局、ホテルに居た全員が飢えと寒さで命を落とすが、自分達のために殉じた救助隊員の姿を目に焼き付けて、死に際にも、それが慰めとなっていただろう。しかし実際には殉職した隊員は一人も居ない。余りの流れの速さと水量に、早い段階から二次災害を防ぐため救出は諦められていた。しかしそれを、救出を待つ人達に悟られては、彼らは絶望の内に死んで行かなければならない。それで遠目には分からない程度に、隊員と同じ背丈の人形に制服を着せ、彼らの目に届く所まで近付け、操って、それを濁流に流して見せて、救えない人達へのせめてもの対処法としていた。しかし実際にはホテルの中で誰も死んではいなかった。ホテルの部屋の窓に顔を押し付けて、救助隊員の働きを見守ったのは、客と従業員の服を着せられた、彼らと同じ背丈の人形だった。当局の制止を振り切って、まだ川の水が治まっていない時に、その家族だけが、強力なエンジンを積んだボートを出して中州へ向かった。何日か後、嵐が収まって救助隊員が駆け付けた時には、遺体は家族が茶毘に付したとの事だった。何が目的かというと、彼らは事前に調査し水害の及ぶ可能性の最も高いホテルを選び、赤字に苦しむそこの経営者を抱き込んで、犠牲者を出した事にして、国から賠償金を取りたかった。その裁判の判決が出て、彼らは金を受け取った。しかし国の財政は火の車で、端から金など出す気はない。だから裁判官も検事も、彼らの背丈と同じ人形に法衣と背広を着せただけで、渡した金も全て贋金だった。

しかし余りに精巧に出来た贋金なので、気が付く者は居ない。今はまだ記者は、金では癒えぬ遺族の気持ちを熱心に伝えていて、これらの全てがまるまる明るみに出るのは、何十年か更に先の事だろう。しかし、もしも会見場の記者と遺族が人形だったとしたら、(二〇一一年三月六日)

(時を費やす程…)

時を費やす程、それを止めるのは厄介で、更に無駄に続く時の先に、その浪費を取り戻して余りある、有益な結果なども、無闇に望まれてしまう。それで、どれだけ自らの身を痛め付けて来たか。その廃残の身一つで、石を磨き続けるその手は、やはり止めようがない。ふとした切っ掛けさえあれば次の仕事にさらりと移れるだろう、などと外からの働き掛けを待つばかりの態度が駄目なのだ。しかし、と記憶を辿れば、その間に様々な天変地異が繰り返されたではなかったか。そのどの一つでも十分に手を止める切っ掛けになっただろうに。いや、費やされた時が無益であったかどうか考えるのこそ無益だ。石を磨く手が止まらないのは、時とは係わりがない。それは、何かと似ているからだ。それが、と言う前に、それの中に何が何かと似ているか、それが知れずに、或いは、

知れる見通しが立たずには、手は止まらない。石が何かと似ているのか、その石とも思えない軽さか、妙な柔らかさか。或いは、それを磨く手付きが、或いは、その手を覆うぼろぼろの手袋が、或いは、石と手袋の擦れる音が、何かと似ているのか。或いはもっと他の、目に止まらない思い付きもしない事柄が、何かと似ているのか。そして、そのどれなのかが突き止められなければ、その何と似ているのかも、厚い雲の中なのである。そうではなく、せめてその何と似ているかの僅かな手掛かりでもあれば、疾っくに腰を上げて、それを探す長旅の途上にあるに違いない。しかしそうなっていたならいたで、そんな旅こそ時の浪費で、じっと石を磨き続けていたら、今頃はその腰の下に、その似ている何かが見付かっていたに違いない、などと悔やんでもいそうで。尤も、あった事となかった事を比べるのは詮ない。それより何より恐れるべきなのは、石でも手でも手袋でも音でも或いは他の何とも分からない事柄でも、そのどれか一つでも、それがどう見ても何にも似ていないものになってしまう事だ。何にも似ていないものなど決してあってはならない。それはその隣のものを何にも似ていなくさせ、それが更にその脇のものを何にも似ていなくさせて、どれがどれとも似ていない情景に取り囲まれては、いやそこにはもう情景などはあり得ずに、ただバラバラの、いやバラバラな事さえあり得ずに、（二〇一一年三月七日）

（体がどんどん痩せて…）

　体がどんどん痩せて行く。病気でない筈はない。しかしそれで関節が硬くなって体が言う事を聞かないとか、肌の色艶が衰えるとか、死相が出ているとか死臭が漂うとか、そんな気配すらない。痩せれば痩せる程、体は幾らでも柔らかく敏捷に自在に動き、肌は愈愈若々しく、力が内から漲って、ジッとしていられない。窮屈で服など着ていられない。誰の目にも止まらない速さで、駆け回らずにはいられない。疲れなど一切感じないし、もう何時からこうなのかも忘れたし、思い出す必要もない。病気だとしても治す理由は一つもない。さて同窓会である。数は大分減っているが、生き残っている者らは、毛も歯も抜けてはいても、どいつも意気軒昂で。とは言っても今回がもう最後で、会は解散を決議してお開き。奥の部屋を開けると、布団が並べて敷かれてあって、皆そこへなだれ込み、先頭切った一組が早速抱き合って事を始めれば、後は熟れ切った肉の塊が入り乱れて競うように交わった。そして次々に相手を変え、何時終わるとも知れない。私独りは、何も出来ず、その部屋の隅で素っ裸の痩せた体を晒していた。抑も自分が男か女かも忘れているが、忘れたままで一向に構わ

ない、いやそれを忘れている事を思い出したのさえ、忘れてしまいたかったし、忘れてしまえた。それから動物病院に瀕死の大蜥蜴を預けたあった事を思い出し、これは忘れずにいて良かった事で、早速、そこへ走って行くと、そこはがらんとしていて、廃業の後片付けをする、暗い顔の若い看護婦が独り居るだけだった。私とそっくりに痩せていて素っ裸で、肝腎な所を見ると確かに女の形をしていた。その目で自身の股間を見下ろすと、小さな突起は、私が男であるのを知らせていた。その私は痩せた女の手を引っ張って蜥蜴のように素速くそこを出て、二人で駆け回れる所は全て駆け回って、結局また、終わりを知らない雑婚老人達の部屋に舞い戻った。私達二人はそっくりの背丈を貼り合わせるようにし、そうしても痩せ過ぎているので、二人合わせた体の厚みは殆ど変わらずに、それで自分が男か女かを思い出すのさえ忘れたまま、大蜥蜴を取りに行った方だったか廃業の後片付けをしている方だったかも分からなくなって、

（二〇一一年三月八日）

（峰を幾つも超え…）

峰を幾つも超え、共に手を携えて遂に目指す頂上を征服した。歓声を上げて

抱き合い喜びを分かち合った仲間は、満ち足りた顔で来た道を戻った。その山頂の更に先に目を向けてしまった私は、独り、そちらへ降りて行った。目標はなく下るだけなので、疲れも手伝い景色は何処か色褪せるが、やはり峰峰の連なりばかりで登りと変わらない。しかしその景色の他は、何もかもが違っていた。訳はただ一つ、何も聞こえない事だった。向こう側は、登山者達が犇めき合って登山道は彼らの声と足音と登山具の音で終始喧しかったのに、こちらには人っ子一人居ない。そしてその静寂が私に気付かせたのは、私には、失われた腕と脚がもう二本ずつあって、それを失ったまま長らく忘れていた、と言う事で、その失われたままの四肢の感覚が、今ある四肢と同じように甦り、私は八本の脚を操って地面を這う姿勢で、木に登っては鳥を喰らい、地面を掘っては土竜や鼠を喰らい、その八本脚の生活に没頭した。それが或る日、何人かに囲まれ、銃口を向けられて我に返った。彼らは国立公園の管理官で、密猟者をその場で射殺する事も許されていたが、命乞いして私は縛り上げられるだけで済んだ。勿論、彼らに見える二本ずつの腕と脚が縛られただけで、残りの四肢は自由が利いた。しかし、彼らの声や道具の音や乗せられた車のエンジン音タイヤの音、それらが、その腕と脚の神経に襲い掛かり、縛られている方の腕や脚など比べものにならない程の痛みに私は悲鳴を止められなかった。見かねて彼らは縄を弛めたが無駄で、私は彼らの音が痛みの原因なのだとやっとの事で

説明し、事務所に戻ると、私は硝子ケースの中に入れられ、隙間もテープで塞いで、音が入らないようにして貰った。中で私は、音によって傷めた失われている方の四肢を、舐めたり撫でたりした。峰を幾つも超えた先の警察が来るまでそこに居るしかないが、何日かして、悲鳴を上げ続ける女が運び込まれ、硝子ケースは一つしかないので、女はその狭い中に私と共に押し込められた。その夜私達が交わると、失われていた四肢は呆気なく跡形もなく消えて、私達の体は一つになり、私の四肢と女の四肢との八本の脚を操る、一つの生物になった。次の朝、管理官の目には恐らく、私達がただ蜘蛛の真似をして巫山戯て遊んでいるようにしか見えなかっただろう。それからやっと警察が来て、硝子ケースが開けられ、警察車両に向かう途中、その私達である生物は素速く縛めを振り解いて逃げた。彼らの怒号や車や威嚇発砲の音が襲い掛かった。その音に、私達の失われていた四肢が、激しい痛みと共に甦って伸び上がり、私と女は弾けるようにまた別々の体になって、八本脚で山のそれぞれ違う方を向いて、（二〇一一年三月九日）

（池の上で風が…）

　池の上で風が回って、水面が傾いて盛り上がり、おかしな波が北の方へ走った。窓から見渡せる小さな池なのに、その北の方だけは、その受けている陽の色が寒く見える。おかしな波は、水面を傾かせたまま、その寒い色に染まって動かない。それで私達は、揃って外へ出た。先ず私が、これを問い質さなければならない。声は出た。その水面の様子を私なりに的確に言葉には出来た。しかしそこで口籠もり、私の声は急に弱々しくなって、忍耐の足らないせいで問うべき事をしっかりと突き詰められずに、しどろもどろの末に黙り込むという様を晒した。しかし他の者は声も出ない。或いは、無言にじっと耐えて、問うべき事が、はっきりとした形を取るまで、水面に目を凝らしているのか。そうなのかも知れない。私独りが脚を弱らせ歩く力をなくして、その場にへたり込んだが、他の者達は、変わらぬ足取りで池に向かった。その彼らに対する怒りの表明のように、池の上の風が、空まで通じているような深みのある鋭い音を鳴らした。その響きは波打つようで、やはりそれも、耳にすんなりとは収まらないおかしな形をしていると聞こえた。彼らに聞こえていない答はないが、彼らの耳にそれが風の威嚇する音だと聞こえなければ、水辺で彼らは、一瞬で池に呑まれてしまわないか。私の忍耐が足らないばかりに、こんな事になってしまった。いや仮に私が正しい問いを発する事が出来ていたとしても、彼らの足はその答えを求めて、却って池へ急いだかも知れない。私は地を這うような恰

好のまま腰を浮かせ、腋の下に隙間を作って、そこに風を通して笛のように鳴らした。それは風を除けた薄い煙のような行く先の定まらない形で、体に纏わり付くままだったが、暫くすると一つに纏まって、白い玉のような形になって浮かび、腋の下の角度を微妙にずらす事で、私はその白い玉を操って、幾らかはその向きを変えられるらしかった。池の上の風もそれには直ぐに気付いて、私に一目置くような、或いは私を風の仲間と認めるような気配を漂わせた。いや私の姿はなく、私の腋の下の作った三角形の隙間だけがあって、それは僅かな傾斜をずれ落ちるようにゆっくりゆっくり南を向いて、それに逆らうのか或いはそれとの平衡を保ちたいのか、白い玉の形は北へ傾いて、その音色を少しずつ寒く染めて震わせるようで、もう彼らの姿もなく、動かないおかしな波は、細波のざわざわと行きつ戻りつする繰り返しに取って代わられていた。水面を傾かせた風はどうなっただろう。白い玉の音が、寒さに貫かれて途絶えれば、恐らくは池もまた何処かへ消えて、（二〇一一年三月十日）

（惑わすものばかりに…）

惑わすものばかりに囲まれて、 こちらは相も変わらず空っぽで何もなく、 そ

の空っぽのまま、それを脇にしっかりとは携えて、ただ目先の前方へと進む。それは叫んだではないか、何時かの荒々しさと違って、子供のようにか細く柔らかく。子供のようにか細く柔らかく、短い音を立て続けに立てたではないか。それを何時もの音と、耳の中ですり替えてしまうとは。拡がりと光りと静けさと親しみとそれを共に見て感じるお前の目を、それは求めていたのに。そんなお前だけを、それは求めていたのに。そんなお前でも、求められていたのに。惑わすものにばかり惑わされて、お前は、お前の姿しかないお前の先ばかりを見据え。有りもしない先、乾いた終わりしかない、どちらを見ても惑わすものの真っ只中。相も変わらず何もかも見損なっていた。脇に何を携えていたかも考えず。時を見誤った、と言うより、見誤らなかった時にまで届く目が、どうにもならず歪だった。その歪さが、それの中の取り替えの利かない中心を狭い方へと押し遣る固い塊を、ぐるぐると突き上がらせ食い込ませ、それの中でそれは水に溺れ、それがそれであるための行き場を閉ざされ、そうしてただそこに一点となって縮んで息の止まった時、お前は何を、（二〇一一年三月十二日）

（誰も見向きもしない…）

誰も見向きもしない置きっぱなしの傾いた甕。古びて多分もう穴が開いているか罅が入っていて、使えそうにない。しかし繰り返し使われて出来る擦れた跡や手垢の跡もないので、造られはしたものの、扱い難そうに思われたのか、まだ水を流し込まれた事はないようにも見える。甕自らも甕であるのを忘れている。何時もの闇が騒がしく落ちた中、小さな雫が静かに届いた。冷たい甕の中を透き通った音が短く響いた。それから雫は、段々と甕の下の方に集まって、楕円の小さな水溜まりになった。水は一滴も漏れない。そのまま雫は一滴一滴と続いて、遂には甕を満たした。水は一滴も漏れない。俺の何処にも、穴も罅もなかった。温い水の重みは心地良い。時にはその重みを感じられない程にさえ。そしてもう新しい雫は落ちなかった。その甕を満たすためだけの水であるかのように。甕もまたその水を容れるためだけの甕のように。しかし水は命があり、それは、甕の中に何時までも入れては置けない短さで、甕なら分かっていた筈だ。腐ってしまわない内に、一度で水は取り出され、直ぐ様高い方へ運ばれて見えなくなった。突然だったが、水の命に猶予は許されない。甕の匂いが移ってはいたが、甕にとっては、初めの一滴と変わらない綺麗なままの水だった。空にされた甕は転がされ、埃を被り、また誰からも見向きもされず、もう使われる事もない。また俺は、自らが命の容れ物であるのを忘れてしまうのだろうか。あの水しか駄目だったのだ。あの一度限りの水、（二〇一一年三

月十三日

（見えているものを見えなくする…）

見えているものを見えなくする言葉。もう一つは、見えないもの、見えなかったものを見えるようにする言葉。言葉にはその二種類しかなく、見分け方は簡単で、生きている者と交わす言葉は、見えているものを見えなくする。死者と交わす言葉は、見えなかったものを見せる。初め気を抜かせておいて、後からお前を傷付ける。或いはそうして、言葉は言葉としての地位を勝ち得たようでもある。だとしてもその残酷さ、言葉を抱えて生きるには、それを忘れたり忘れた振りをしたり、それから身を躱したりする技を磨くしかない。生きている者と言葉を交わして、或いはただ言葉を投げ掛けて、それで、見えないものを少しずつ見えるようにして行く事なら出来るだろう。そこで用いられる言葉に、幾らでも精確さを求める事も。そして全てを言い切ったと思い込むのも勝手だ。しかしその語り掛けた相手が死ぬと、それらの言葉にたとえ何の誤りもなかったとしても、それらはただ、見なければならなかったものを覆い隠すためのものでしかなかったと思い知らされる。何故だ、などと叫んでいる暇はな

い。その見なければならなかったものが、死者へと語り掛けるべき言葉を要求して来る。その死者との隔たりに急いで言葉を埋めなければならない。そして時にそれは、精確さを求めに求めた、生きている者への言葉と殆ど瓜二つで、ただ何が足らなかったかと言えば、それはただ精確さなのである。それはそのまま生きている間にも見えていたのに、生半可な言葉の精確さによって、折角見えている精確さを見えなくしてしまっていたのだ。尤も死者と言葉を交わすには、必ずその生前に、たとえ一方通行でも言葉が交わされていなければならない。或いは生きている時に、言葉抜きの理解を試みようとは出来るだろう。しかし実際、どうしたらそんな事が出来ようか。そのように目論むのも、既に言葉の領域であれば。だから結局生きていた者が死んで、そこで初めて交わされる言葉を待つしかない。精確さを求めるならば。いや抑もの初めから言葉に精確さ以外の何が求められているのか。ほんの僅かの精確さを欠くだけで、生きている者の前でそれがどのようにか有効に働いたとしても、死者の前では、それは見えている何かを、何一つ言い当ててはいないではないか。それでも、分からない事が残る。死者と交わされる、見えるものを精確に言い当てた言葉が、果たして死者へと届くのか。少なくともその問いにはどんな精確さも刃が立たず、或いはその刃が立たない事が精確さを齎すので、（二〇一一年三月十五日）

（駆け上ると何時ものように…）

駆け上ると何時ものように空気が違う。しかし未だ空気だけ。次にお前に必要なのは、拡がりと光り。仕上げが、高さと暖かさ。それだけ揃えば、世界は思うように回せる。その回る世界の、天と地を貫く軸も見て取れる。いやそれを見て取るのはお前ではなく奴。でも奴は何もしていない。ただ付いて来ただけ。奴にそれが見て取れるのは、奴にそれが見えるようにと世界と一緒に回っているお前を、奴が見ているから。勿論、奴がそこに居るから、お前も世界も回る。奴はそれより近付けない。世界を回し、世界と一緒に回るのはお前だけ。そして奴だけが、その世界の外に居る。でもその外が、世界を回すお前を自由にし、喜びで満たす。その内に、そうしているお前の周りを、お前などよりずっとぎこちなく、奴は回り出す。見て取れていた天地の軸も、もう見失ってしまったに違いない。その辿々しい足取りを見れば明らかだ。そしてお前の回り続ける姿に縋り付こうとしては、跳ね返され、外よりもっと外へ弾かれそうになっては、回るお前に助けられて体勢を立て直し、それでもまたお前の姿を追って、眩暈の中で回り出す。お前はもう擦り抜けていて、何故なら、拡がりも

光りも高さも暖かさも身に収めて、その中心の小さな空っぽを満たそうと、冷たい匂いの陰の方へ降りて行き、直に奴が追い付くのを待って、（二〇一一年三月十七日）

（二つが並んでいる…）

二つが並んでいる。それだけでもう、二つは決して同じものではない。瓜二つであったにしても、初めからそれぞれの道を歩んでいる。並びながらの片方ずつの、その有りようと歩みなら、どうにか書き記したりも出来る。もう片方との関係を、そこに精妙に書き加えたりも出来る。独り善がりであろうとなかろうと。しかし、二つ並んだその有りようと歩みを、そのままに書き記せるかとなると、余りに複雑過ぎて、何をどう書いて良いものか。複雑と言うより、そのどちらかからしか、或いはどちらでもない、どちらからも離れた所からしか、その書き記すべきものを捉えられないのが難点で、それならと、片方からと、もう片方からと、どちらでもない方からとを、可能な限り精妙に複雑に継ぎ合わせてみても、それぞれによって既に書き記されたものに、何かが新しく付け加わるのでもない。それ程に、二つの内の片方である事、またその動きと、

二つが二つのままにある事、またその動きとは、別のものであると思い知るしかない。要は、二つが並んでいるのだから、その二つが並んでいる方から、その二つが並んでいる有りようを、見て感じてそのままに捉えなければならないのだが、その、二つが並んでいる方から、どちらの方からなのか、皆目見当が付かない。二つの並んでいる所を、どれだけ探し回ってみても、それは見付からない。抑も誰が何処から探しに行くのか。或いは誰でもなしに何処からでもなく、探すべきか。或いはそれは、探して見付かるようなものではなく、常に変わり続け、その速過ぎて微か過ぎて取れない変化の中に隠されてだけ、そこにそれがあって、感じ取るのさえままならないか。そしてそのままに、二つ並んだその有りようの、何か尻尾でも掴んだか分かった積もりで、その分かった積もりを並べ立ててしまったりすれば、それは見当外れの、二つ並んだものの行く手を遮るかも知れないだけの、厄介なゴミを増やしているに過ぎない。さて当然のことながら、私はその片方であり、それをどう考えても、どうにもならない。私が、もう一つと並んで歩んだ有りようは、私によって私の方から捉えては来たが、一切は無駄だった。或いはそれが、並んだ二つの歩みの邪魔になったのなら、有害でさえあった。私でないもう片方も、私と同じ愚行を重ねていただろうか。それとも私などよりずっと、二つが並んでいる方から、二つをどう捉えられるかに、思いを馳せていたか。しかし、その思いと私の愚

行が並んで、私達は二つ並んで居られたのなら、私は私の愚行を否定しようもない。だからと言って、それを認めて受け入れようにも、そこでもまた、二つ並んだ方から、そうするしかないとなれば、そう出来ないままに、ただ片方である私が、或いは私でないもう一つが、それぞれもう片方との関係を梃子に、違った方から、それぞれにとっての二つ並ぶ有りようを捉えれば、何故二つ並んで居られたのかさえ全く不思議で、ただそれぞれに、（二〇一一年三月十八日）

（これがあり…）

　これがあり、それがある。これがあるからそれがあり、それがあるからこれがある。これがなければそれはなく、それがなければこれはない。しかし、これはそれではなく、それはこれではない。何故なのか。或いは、それがなくなって、それでも、これがあってしまうなら、その、これとは何か。或いは、それが、ただそれだけで、これをあるままにしてなくなるなら、そのなくなるのは何なのか。何故こんな事を考えなければならないか。考えなければならない事なのか。いや、ただ一つの考えなければならない事ではないのか。他に何の

考えられる事があるか、ただ一つの考えるしかない事ではないか、何かを考えなければならないとしたら。しかし答えは出ている。これはそれではなく、それはこれではない。それが答え。それを何故かと問うたのに。問いが、そのまま答えとは。いや、そうなってしまうのは、ただこれとそれだけしかないままに、そのこれとそれだけで答えを出そうとする性急さの咎。或いは逆に、これとそれだけがあるのではなく、ただ問いと答えだけがあって、これもそれも、その問いと答えを、ここに生身の形として導き出すためのものでしかないのか。問いと答えしかないなら、問いが答えであり答えが問いであるしかない。そのどう仕様もなく在り来たりの事を、ここに示すために、これとそれは、ここに呼び出されたのか。何のために。或いは、では何故これとそれでなければならなかったのか。と問うたところで、それは問いにさえならない、独り言の呟き。問いも答えも、もう決して取り返しが付かずに、尽きているのであれば。そうして、これはそれではなく、それはこれではない、という、そう問う事でありそう答える事だけを、ただ黙って持ち帰るしかないなら、何故と問い、考えようとした事が抑も虚しかったのか。或いはその、虚しく幾ら考えても何も齎されないという事が、その何故を、ただ一つの、考えなければならない考えるしかない事にしたまま、(二〇二一年三月十九日)

（いきなりＡだけが…）

　いきなりＡだけが、来てしまった訳ではない。確かに前触れはなかったし、どう扱うかの知識も仕入れてはなかった。それでも、Ａが来ても自動的に拒むばかりではないような、それなりの検討はされていた。と言っても、別の話しの間に挟まれた軽い冗談のような、もしＡが来ていなければ、それきり忘れられてしまうような、僅かな言葉が交わされただけ。それならやはり、いきなりＡだけが来てしまったようなもので、その来た時を境に、Ａを拒むか受け入れるかで先行きの大きく違って来る事から、目を逸らす訳には行かなくなった。それで少し戻るが、Ａが来る前に、何故Ａについての検討が為されたのか。それは当然、Ａが求められるような事柄が生じたからで、その事柄こそ、何の前触れもなく、いきなり遣って来て、Ａが来るような事でもなければ、どうにも扱いようがなかったのである。尤もＡが来て、それでその事柄に変化が見られたかと言うと、それは全くなかった。Ａは結局、期待はされたが、事態の好転には役に立たなかった。それでもＡが直ぐには拒まれないのには、それなりの理由があるだろうが、それが分かるのは未だずっと先であって構わないと、それを分かろうとする者も、のんびり構えていた、それで何も困りもしなければ。

そういう事だったので、Ａの立場は微妙と言えば微妙で、またそのＡが求められた事柄が別の方途で解決を見てしまえば、Ａは、その事柄と切り離され、そこに在るだけのＡが、Ａが受け入れられる理由の全てで、そうなったＡは、何の前触れもなく、予め何の検討もされず、いきなり来てしまったＡであるしかなくなって、微妙とはまるで逆の、Ａかさもなくば非Ａか、その答えは全てＡ自身に係っている、と言う、はっきりした立場に立たされたとも言える。しかしそれは、それが喫緊に問われなければならないＡであればの話しで、Ａはもう問うべき事など初めから何もないような風情で、Ａの居場所を定め、そのようなＡであるのを、ただＡがＡとしてそこに居る事で以て、周りに理解させ始めていて、（二〇二一年三月二十日）

（私は帰らなければ…）

私は帰らなければならなかった。帰れなければ死に等しい。帰れないまま、どれ程生きても、それは私が生きるのではなく、無数の野生生物の内の一個体が、私と無関係に生きるだけ。などと言う事を考えてしまうのは何故か。いや何故かと考える必要などどなかったのだ、ただ帰り着こうとしていただけの時に

は。それが今は、それを問わなければならない。いや何故それを問わなければならないのか。それを問うて、何を得たいのか。得られるものなど、もうないではないのか。私は今何処に居るのか。見えているのは、帰れなければ私でなくなる、と思っていた景色ではない。その景色は少しずつ少しずつ変わり続けていたに違いなく、私はその変化から目を逸らしていたのかも知れない。私は今何処に居るのか、などと、今更ながら問わなければならないのは、疾っくにもう、帰り着けなければ死に等しい所から決して戻れないまでに離れ、それでも私は私と無関係な一個体とは成らずに、すっかり変わっていたのにそれに気付けなかった景色の一番端で、もう私は何処にも帰らなくても良いのだと、そのような私でずっと居られるのだと、そこへ帰らなければ死に等しかった私と私をそうさせていたものの事を忘れて、往きも復りもしない道でもないような中を行き来していただけで、そんな私をそこに残して消えた嘗ての私の景色を振り返ろうとする私は、（二〇一一年三月二十一日）

（動いていても…）

動いていても、動いていると、それを感じてはいけなかった。いや、動いて

いれば、動いていると感じないではいられない。では、何がいけなかったのか。その感じ方。その感じ方の中に、殆ど感じ取れない、感じてはいけない感じが混じり込んでいた。それはしかし初めからそうであったかのように、或いは初めからそうであったかも知れず、どうにも修正が利かない。その修正が利かない事も、その感じ方で、感じ取れていたに違いない。そしてその感じ方によってのみ、その動いているものから、その外へと、例えば、水へと向かう事も出来た。その感じ方を措いてしか、水の在処は嗅ぎ分けられない。そしてその水の味も、その感じ方の中でしか味わえない。その水の味も修正が利かないが、それもまた感じ取れていただろう。しかしその水の味の後はと言えば、そこには、何も感じなくて済む空白が、そう感じてはいけない感じ方で感じ取られていた動いているものを消し去って、暫しの、修正の要らない感覚が満ちたのかも知れない。しかしそれも実は、そんな空白ではなかったのだ。ただ空白であっては、それを修正したところで仕方がないだけの事。或いは、その空白の中にこそ、その感じてはいけない感じ方は、修正を免れて保たれていたのかも知れない。と言って、その空白を切り取ってしまっては、どんな感じ方によっても、水の在処も何も嗅ぎ分けられない。そんな掛け替えのない空白から、また、そう感じてはいけない感じ方で、そう感じてはいけない動きを抱え込んで、その味であってはいけない水へと走る。その果てが、そうあってはいけない、つ

まり、どうにもあり続けられない動きを導いて、水の味を、愈愈そう味わってはいけない、濃い味へと変え、動いているものは、愈愈そう動いてはいけない、軽過ぎて強過ぎて鋭過ぎる剥き出しの動きを晒し、またその感じ方を、愈愈そう感じてはいけない、そこまでしか決して行けない、水を枯らす行き止まりの先を感じ取らせるように仕向け、（二〇一一年三月二十二日）

（そこから来た…）

そこから来た。忘れてはいない、多分。しかしずっと、その事を考えては来なかった。忘れてはいないかも知れないが、忘れたようなもの。他に行く当てもなし、ここにずっと居るしかない。だから、そこから来た事は、忘れてはいなくても、忘れているようにしているしかなかった。そしてそれは苦もなく出来た。それで良かった。悔いもない。夢を見る。夢の私は、そこでの私なのか。他に夢に現れる場所はなさそう。見知らぬ景色でも、私がそこから来た景色に繋がって行くだろう。しかし、そんな事を考えて夢を見ない。夢など見ていなかったのか。それでも何処かの景色が、眠りに流れ込んでは来ていた。それには直ぐ背を向け、忘れて構わないものの方に振り分けていた気がする。そうで

あったなら、それらの景色は頭の隅に折り重ねられただろうか。そして或る日、そこへと向かう扉が開いた。何故だろう。開かれるべくして開かれたか、ただの偶然か。頭の隅の景色が導いたか。分からないし分かりようもない。それでも扉から、そこへと通じる道が一筋、煌々と燦めいた。体を風のようにして、光りと共に一心に走る。そうしてただ走れば行ける。そうはっきり分かった。そして、そこに立った。時を経ていた。気の遠くなる見知らぬ長い時が、私に知れる時を押し流していた。そこがそこであるのは間違えようはない。しかし、決して私が長く立ち止まっていられる所ではなかった。それはそうであるしかないのだ。だから、ずっと忘れたままでいて良かったのだ。私は戻った、そこではないここで培った、懐かしさを溢れさせて。そして、行って戻ったそこの、方向だけが頭に残った。それでも、敢えてそちらを向く気には暫くはならなかった。しかし今は、そこを、実際に高い所に立ってそちらを向いて、初めにそこを離れた時の、忘れていない限りのそこを、眼に焼き付けたい。何が目に映るのでもないだろう、それでも、私にしか見えない私の道程を見晴るかす、ただ一度の機会。その時の中に身を置くと、私の前にも後にもう、全ての道程は時の向こうに溶けて消えて、（二〇一一年三月二十三日）

（駆け上った先…）

駆け上った先、高い風の匂いだけ。命の匂いは一瞬に吹き払われ、だから死の匂いからも解き放たれ、その風の中の高い匂いにだけ包まれれば、その匂いが全身を静かに貫いて、風のように或いは突き出た石のように、風の中に立っていられる。見下ろせば、世界は出鱈目なものばかりの、出鱈目な組み合わせでしかない。それはしかし、とても静かで冷たく色褪せた青ざめ低い風のようにゆるゆると流れて行く。不思議な程に気分は鎮まるが、何も不思議ではない。寧ろこのように鎮まった気分で、今まで一度も世界を見下ろせなかった事の方がずっと不思議。そんな不思議も風のように流れて行く。やっと追い付いた彼方も、直ぐさま命の匂いを吹き払われて、私を、彼の方に向かせはしない。これは未だ少し不思議かも知れない。彼の方ばかりを向いて来て、ずっと彼の方を向くのだけが、私だったのに。それともう、体が彼の方を向かなくても、何処を向いていても、彼の側に彼と共に居られるような。いや、少しもそうではない。その全く逆の私と彼なのだ。その二人もまた、静かに高い匂いに貫かれれば、他に何が残るだろう。その何も残らない事の素晴らしさを、高い風の匂いとして吸い込めば、肺の中の血の匂いなど、（二〇一一年三月二十四日）

（光りが多過ぎる…）

　光りが多過ぎる。隅から隅まで光りに満ちた、その一番端の狭い中に身を置いて、真下から上って来る、細く微かな冷えた風を嗅ぎ、鼻の奥に小さな闇を脹らませて、その中に身を潜らせる。闇は直ぐに消えて、光りの中に戻されると、また次の微かな冷えた風を嗅ぐ。その繰り返し。冷えた風が僅かな水を含めば、そこを光りが満ちている限り途絶えない。そうしてずっと待つ。楽ではないが辛くはない。待ってはいられるし、必ずそれは報われて来たから。すっかり光りに侵されて頭にはもう何も浮かばないが、何かを浮かべる用もない。いや、光りが幾ら多過ぎても、それを跳ね返すだけの冷たい風の高い拡がりが、ずっと頭の中には映っていて、だから他に何も思い浮かべる用はない。或いは、何も映っていないのかも知れないが、その静かな空白によって、冷えた風を小さな闇に変えられるようではないか。待ち続けられるのは、ただじっとしてさえ居れば、そのほんの何かの弾みに壊れてしまうだろう実は酷く危うい光りと風と闇の仕組みが、そこに保たれるからだ。そしてその待たれていた、冷たい風の高い拡がりが、光りだけの拡がりを切り裂いて、起き上がって、その裂け目を抜けてその先に飛び出せば、そこに光りも拡がって、風よりずっと高い所

まで伸び上がり、一瞬それを見上げてから低い方へ少し走ると、そこはもう灰色の優しい陰の中で、そこに鼻の奥の小さな闇を散らばらせれば、先程とはまるで別の騒がしく動き回る空白が頭の中に満ち、身は躍り、思う存分嗅ぎ取れる水の匂いを捉える新しい闇は、どんどんと滑って拡がり、闇の方から熱い体の中へ潜り込んで来て、（二〇一一年三月二十五日）

（俺がここに来れば…）

俺がここに来れば、必ず奴は顔を出して、先ずAをする。次にBをする。それからCの方へ行く。何時もそうだ。奴の事なら俺は全て見て分かる。「いや」と奴。「こっちは君がそんな事を考えながら、何時もこっちを見ているのを分かっていたさ。その上で、君の見ている前で、君のその分かっている通りの事をしていたまで。」そうだろうな。それだって俺には分かっていた。そんな事を考えて遣ってるよって顔に書いてあったじゃないか。「そうなのか、君がそこまでお見通しだったとは知らなかったな。」知らなかったって。何故だ。それを知らなかったのなら、俺の負けだ。知らずにそれを遣られたんでは、知ってる方は勝てる訳がない。さて、それを伝えてやろうと探しても、奴の姿はも

うない。しかし俺は本当に分かっていたのか、奴と同じで何も知らなかったのではないか。だとしたら、また俺の負け。奴は、奴が俺の何を知らなかったのかまで、ちゃんと知っていて、しかもそれを知らずにいるのだから。それで奴を見付けたとして、奴に俺の負けを伝えられるか。伝えられる筈はない。奴には勝ち負けなど無縁だから。「？」と言う顔をされるだけ。そこでまた俺は負ける。しかしこれは良い前兆ではない。俺は負け続け、奴はそれを理解もしない。苛立つ俺は、それを奴のせいにしてしまうかも知れないし、俺の脇を擦り抜ける奴の技に、愈愈磨きがかかり、俺は奴の姿を追い切れない。俺の負けは何処までも続き、もう負けているのさえ忘れ、そんな俺と奴の関係について考えるのも已め、ただ奴の姿を何時もと変わらぬものと決めて掛かって、それで奴と対等だと勘違いし、何故なら、それが俺が奴に負け続ける原因だとしても、俺に出来るのは考える事だけの筈で、それでは対等どころか負けるのさえ放棄したようなもので、（二〇一一年三月二十六日）

（私は守られている…）

私は守られている。あなたが私を守ってくれている。あなたなしに私はここ

に居られない。初めからずっと。いや、あなたは私の何も守っていない。私を守っているのは、ただ私だけ。初めからずっと、私は私を守るためにだけ動いて来た。動くばかりか眠るのさえ、それは私が私を守るためだった。他に何もしていない。しようにも何もない。しかし限りがある。私の動きは弱く、ごく僅かずつしか事態を善く出来ない。そしてそのやっと勝ち得たものをいとも簡単に無にしてしまうのがあなたで、あなたはそれで、私を守った積もりになっている。私に限りがある大半は、あなたのせいだ。確かにあなたは、私を見捨てたりは出来ないだろう。それを疑った事はない。だからこそ私は、あなたの遣る事を、嫌な顔こそすれ、固く拒みはしない。拒もうとした事も以前はあったが、無駄だった。また、もしあなたが居なくなって、私の好きに出来るようになったとして、新たに私の得られるものは知れているだろう。だからあなたにその遣り方を変えさせる事は、諦めるしかなかった。いや、私は何度かは、はっきりと、それは已めてくれと声を上げなかったか。伝わらなかった筈はない。しかしそれもやはり、いとも簡単に無視されてしまう。半ば諦めていたが、声を上げたい時には声を上げていた。ただあなたが何時か遣り方を変えるのではないかという微かな望みだけは捨てていなかった。捨てる理由もないので。そうして私は独りで私を守っていた。しかし、何かが変わった。それは巧く言い表せないが、言い表せないのは、それが微妙で曖昧だからではなく、逆に恐

らく言葉さえ届かない程に、どう仕様もなく取り返しも付かず、はっきり明らかに変わったのだ。私は本当に独りで、あなたの関与如何に関わらず、私を守らなければならなくなった。どうやらあなたには、その私が守らなければならないものが見えないようだ。あなたに見えるのは、ずっとあなたが守って来た私だが、私はもう、それだけの私ではなくなっている。あなたは反駁するだろうか、自分にも何かが変わったのは見えていたと。しかしそれは、あなたでなくとも、外から見る限りでは、分かりようのないものだ。すると実際またあなたは、その私の僅かずつの努力を無にして、あなたのしたい通りの守り方を私にした。私は声を上げた。これまで通りにそうした。その声はしかし、聞き覚えのない軽く弱く妙に波打って震えるもので、だから却って、重く強く真っ直ぐに伸び上がり、深夜の空気を震わせさえした。あなたは恐らく、始めて私の声に狼狽えた。はっきりと私の意思が、あなたの心に突き刺さるのを感じた。私とあなたはそのほんの一瞬だけ、そっくり同じ未来を見て取ったに違いない。或いは私にしか守れないものを、その決して近付けない分かりようのない外から、あなたは、垣間見たような感覚に揺さぶられただろうか。それなのにそれから直ぐまたあなたは、何時もと同じに、あなたの遣り方を通した。やはりそうするしかないあなたなのだろう。そしてあなたは、これを最後にもう二度とそうはしないと決めたかも知れないが、そう決めなくても、そうしない機会は

二度と訪れず、（二〇二一年三月二十七日）

（風が匂うだけで…）

　風が匂うだけで、ここより低くなければ、何も失われていない。高さを全て見通せるなら、外を向いていても、ここは外ではない。勿論、中から外に移されたからには、外でない筈もないが、中と分かち難く結ばれているので、外とは言っても、中にある何ものとも隔てられていない。一切は、中と同じにここにある。寧ろ、中に居るままでは見失いそうなものが、一切全て見て取れて、それは全身を貫く。いや見えるのではない。見えるまでもなく、疾っくに全身を貫いている。ここでは見るのなど無用だ。段差があって飛び降りる。全身が覚えている。段差を見てはいない。少しだけ低過ぎて危険だが、初めから全身で分かっている。左に直角に曲がる。次は複雑。段差と傾斜と断絶とその先に別の傾斜。全身が全て覚えている。それから、一気に高い方へ上って行く傾斜と断絶と隙間と段差と平坦な拡がり。それから後は少し真っ直ぐ。全身を貫いているものを、それを囲み巡り守るように、螺旋を太く描いて、低い所から高い方へ一息に動いた。その動きは、全身を貫いているものと一致する。いや、

全身を貫いているのが、その熱い螺旋の動きであって、その動きが、外と中を分かち難く結び付けている。さては、動きは完結した。しかし未だ何も進んでいない。これからが全てだ。ここまでは、ただ全身を貫くものがその通りに動いただけ。ここから、真っ直ぐ中に突っ込まなければならない。しかし身は垂直に弾かれる。そのまま垂直に上るだけなら容易いが、真上には無用の闇。絶えず重力に縋って全身を引き下ろし、真っ直ぐ中へと向ける。そしてそれはまた、先垂直への力にねじ曲げられる。身を捩ってそれを繰り返す内、その動きが、その分かる程程の螺旋の動きに代わって、全身を熱く貫いて行くのが分かる。その分かる程に、動きの速度と力強さは増し、力は止め処なく溢れるようで。ただその発揮されたまま、全て垂直の闇に圧され、頭の奥の暗い空白にしか行き場はなく、その空白に仕込まれて行く未だ殆どぼやけた全身を貫いたものの影の折り重なりが、何時かその真逆の、明るくはっきりした光りに変わるのを密かに気付いているなら、（二〇一一年三月二十八日）

（眠らなければならない訳では…）

眠らなければならない訳ではない。眠くもないし疲れてもいない。何時でも

何処でも眠りたければ幾らでも眠れる。それでもそこで眠るのは、ずっとそこに居るため。居場所としてのそこを、失わないため。その居場所をなくさない事の他に、考えを向けなければならない事もない。だから、そこに辿り着いて、そこに暫く居られるようなら、一瞬で眠れる。尤も眠れたからそれで、ずっとそこで眠って居られるとは限らない。いきなりそこを追い払われる事も屡屡ある。その時はあっさり諦めて、また次その居場所を見付けられるように、そのそこで眠れたと言う事を、体に覚え込ませておけば済む。その、次があると言う事が、考える事の殆ど全てで、他に何かあったとしても些細な事。いや、その些細な事の中に、決して見逃してはならず、真剣に考えなければならない事が、必ず混ざり込んではいるのだが、次そこでまた眠れると体が覚えてしまうと、それらは見過ごされるしかない。ではその些細だった筈の事が、とんでもない事となって立ち塞がって来て、どうにも出来なくなったらどうするか。どうにも出来ない。しかしどうにも出来ないのを、体がそう表現すると、眠っていたそこが、その居場所の方から、その身動き取れない体の脇に何故かぴったり寄って来ていて、そこへするりと身を躱せば、もう危機は去り、後は眠る算段をするばかり。勿論、何時もそう巧く事が運ぶとは限らない。重大な局面に晒されたまま、居場所が見付からないまま、身を縮めているしかない事もある。そしてそのままでいきなり何もかもが終わり、と言う事だってない訳ではない

筈なのに、今のところ、そうなってはいないのは何故か、などとは考えも及ばない。居場所をなくさない事の他に、考える事もなければ。或いは、何事に付け、それを何故か、などと考えそうになるだけで、その時こそ、眠らなければならない時とばかりに眠りに逃げ込めば、後は、（二〇一一年三月二十九日）

（突然の声には…）

突然の声には匂いがある。一日中続く容赦のない嵐のような凶器の匂い。その凶器の突然振るわれた時の事は忘れられない。それまでずっと育み守って来た、断たれる事などあり得ない、柔らかで安らかな匂いは、呆気なく踏み躙られた。その声は、今は猛威を振るってても、嵐のように何日かでも待ちさえすれば、孰れは去るのか。或いは、ずっとそこに居座る事もあるのか。長引くのに備え、静かに身構えては居る。目の前の小さく細長い壁だが、反撃のための武器を隠してはある。未だそれを仕舞ったままの壁を真っ直ぐに見据えていれば、気は幾らかは安まる。もう迂闊に動けない程に、ここは狭い。追い詰められたからではあるが、最も必要なのはその狭さであって、そのためにここを選んだ。狭さに申し分はない。そのじっと動かない真っ直ぐな姿勢のまま、直

ぐ右から聞こえる、勇気を奮い立たせる暖かい風の音を、耳に仕込んで行く。直ぐ左には柔らかい襞が、その風の音で微かに揺れているが、その見掛けとは裏腹に、敵は決してそこを突破出来ない。襞こそ最高の防備。そして後ろは抜け穴だが、ここよりもっと狭く入り組んで、何ものも通さない。ここに留まって居られるなら、何の不足もない。彫像のように身を保っていれば、子宮に戻って羊水に浮かぶようではないか。それならあの凶器の匂いは、却って僥倖だったのか。いや、ここは子宮の中ではないし、子宮の中と雖も、膜一枚隔てた所からの、無数の脅威に晒されているのだ。ましてただ狭いだけでのここで、身を守るものは何一つ身に着けておらず、水も飲めず、どうやって生き長らえよう。いやここには未だ、守られて来た安らかな匂いが不断にあって、（二〇一一年三月三十日）

（少し汚れた…）

少し汚れた使い古した、しかし少し前に新しい場所に置かれてもう汚れも余り気にならない、その小さな四角形の中にだけは、確実な未来がある。そこに小さく囲われた蜜のような時。そうであっても、そこまで行って、蜜は一舐め

で尽き、その未来をあっさり使い果たせば、もう次の未来は見付からないのかも知れない。いや、未来を使い果たして何もない所にこそ、次の未来が見て取れるようでもある。何もない所からなら、どちらを眺めても、少なくとも、似たような何もない所くらいは、何か目に出来そうだ。しかし全くそうでないのかも知れない。何もない所には常に、そのずっと何もないまま、それきりそこで、どんな未来をも拒んでしまう恐ろしさがある。その恐ろしさはずっと必ず付いて回っていたのだ。それまでは、己の力だけを恃み、そんな危険など顧みるまでもなく、そこを乗り越えて来られたが、今回ばかりは、それに気付かずには居られない。であっても、周りを見回して、その四角の中にしか確実な未来が見付からないのであれば、先ずはそれに向かって身を乗り出すしかない。他の事はもう、遣り尽くされて闇に溶けたかのよう。そうして己の力の溢れて、骨と肉にその伝わるのを確かめられれば、その四角の先に何もないのは、もう怖い事ではない。その一歩一歩に表された、未だ体に蓄えられたままの力こそ、自ら切り開いた未来であると、ただその時だけでも、そう思い込めれば。或いは、そこにある馴染みの四角形は、ただそう思い込めるだけの小さな未来を、ここに届けたようでもあり、（二〇一一年三月三十一日）

（小さな空白…）

　小さな空白。たとえ小さくても空白など決してあってはならない。それは目に見えず触れもせず感じられているかも覚束ない。況してやそれが、外から持ち込まれたものが埋め込まれたようにして、喉の下に隠されているとは。いや恐らくただ隠されていると言う理由で、それを空白と見做すしかないのだ。実際には空白である筈はない。この世にある全ては、中は必ず何かで充ちていて、空白などあり得ないのだから。ただ隠されているだけで、そのあり得ないものを、何処かから体の中に持ち込まれてしまった。誰が何時そうしたのかも分からず、だからもうどうにも出来ない。その空白によって、目の前の殆どのものは、砂になってしまった。口にするものまでも。それが元々毎日口にしていたものだとは分かる。だから他の砂とは区別は出来る。そうしてそれまで通り、空腹に導かれてそこへ辿り着けて、その前に立つ事も出来る。しかしそこに、隠れている筈の空白が、隠れたまま、鋼のように立つ。それで、もうこれ以上ない真っ直ぐな姿勢を取るしかなく、口とその砂との隔たりは隔たりのまま。その真っ直ぐな姿勢が、全てを明るみに出してはいる。そうさせるのが、隠された空白であるのは明白ではないか。しかしその隠されたまま明白であっては、それは明白に隠されたままでもあるらしい。そんな空白をしか相手に出来ない

身では、全て明るみに出された中に晒されて、身動きも叶わない。或いは毎日ずっと、空白を口にして来たのかも知れない。それに食べ物やら水やらの味を勝手に付け加えて、空腹を紛らせて来ただけかも知れない。何故なら、毎日毎日食べて飲んで、その果てに喉の下に、どうにも出来ない空白を拵えただけであれば。砂を無理に口に入れなければならずに済んだだけも増しか。しかし今は、それがただ隠されてあるままで、ただ空白であるだけで、それをどうにも扱いようがなく、独りそこから一歩も進めも退けも出来ず、（二〇一一年四月一日）

（擦り抜けても…）

擦り抜けても擦り抜けても、何処へも行かない。何処へも行かないために擦り抜けている。つまりもう行き着くべき所に行き着いていて、その、もう行き着いている所へ向かって、また擦り抜けて行く。それは、行き着いたそこに居続けるためで、何度でもそうする。行き着いたのなら、そこにじっとしていれば良いではないか。そうしていられないのは、その行き着いた所が、何となく延びたり縮んだり傾いたり重心が移動したりしているようだからで、その度に、

その行き着いた所からほんの僅か遠ざけられたと感じられれば、その隔たりを埋めるべく、もう擦り抜けるしかない。そうして改めて、行き着くべき所に行き着けて、何時でもそれを繰り返していられるので、行き着いたそこは決して見失われず、擦り抜けても擦り抜けても、何処へも行かずに居られる。しかし別の見方もある。実は行き着いていないのだ。行き着くべき所すら、それがどんな所なのか分かっていないかも知れない。しかしもう他に行き場はない。だから、その何処へも行けない中に、擦り抜けられそうな隙間や穴を見付けては、ひょっとしてその先が行き着くべき所であればと、せっせとそこを擦り抜けて、必ず何時かそこへ行き着かなければならないのを、体に忘れさせずに置く。そうかも知れない。ただこの見方を採っても、やはり擦り抜けるのをせっせと繰り返すばかりで、（二〇一一年四月二日）

（ここを新しいと…）

　ここを新しいと感じたなら、そんな新しいものを求めていたのか。それともここは、初めてなのにもう馴染んでいたのか。確かにここからの景色の幾らかは目新しい。しかしここにここがあるのは、今まで確かめられはしなかったが、

ずっと前から知れていた。ここに来たかった訳ではない。それでも、もしここに立ち入れたなら、どんなものが見えて居心地はどんなだろうかと、知らず知らず思い巡らしてはいた。それで初めてなのに、馴染んだ感じもしてしまうのだが、初めてなのに馴染む感じ、というのは初めてで、その感じは馴染めない。試しに馴れた動きをしてみても、どことなくぎこちない。その何ともはっきりしない感じは、一度も味わった事はなく、全く新しい。そして今それを味わってしまったので、次にまた同じような事になっても、それをもう新しいとは感じられないで、馴染んだ感じの内の一つとなってしまっているだろうか。そのようにして、初めてここに居る新しさは、僅かの間だけここに留まって、直に色褪せて過去の方へ去った。そんな事もまた初めてで、しかしそれもまた、過去へと去った。新しい事がそのように纏めて押し寄せ、直ぐさま、また纏まって去って行くのも初めてで、それもまた一瞬にして去った。そうして何がここに残っているだろう。また何時か、別の場所、別の遣り方で、こんな新しい感じを味わえるだろうか、それとももう、それは二度とないのか。そんな風な事を思う事だけが残ったのだが、暫く経てば、初めてのここで何を思ったかを、それはほんの短い間のふとした弾みに現れたような事柄で、すっかり忘れてしまっても仕方ないだろうし、それを別段惜しいと感じる理由もないのだが、何故か、その前後を一切忘れても、それだけが忘れられずに残るようでもあり、

（二〇一一年四月四日）

（危険の中では…）

　危険の中では、少しでも端に居る方が安全。そこを抜け出し、危険を端に追い遣れば、当然、真ん中が安全。その端から真ん中までは、短い一本の線で結ばれている。その線が短過ぎるためか、真ん中の安全が、気が付かない内に危険で埋め尽くされるのも時間の問題。では一体何のために、危険と安全を区別したのか。ただ一本の短い線を引くためだけ。終始危険の中に居て、絶えず何処がより端であるか目を光らせていたら、線を引くだけに終わるにしろ、もっと長く入り組んだ線になっていただろう。尤も、その長い線と短い線は、比べようもない。必ず線は引かれ始め、何処かで終わる。途中がどうであろうと、線の中は、それが一度も途切れなかったからには、紛れもなくそこは安全だったのであり、線より外は、そこで線が途切れたからには、その安全は決定的に失われた。それを踏まえれば、線の違いなど取るに足らない。線に違いを見出すなら、未だ引かれ続けている線と、引かれ終わった線だが、これはこれで、違い過ぎて比べようもない。どちらも線ではあるが、恐らくは全く別のものだ

ろう。どちらをも同じ、線という名で呼ぶのが既に誤りであるに違いない。では、線とは何か。何の事を線であると言っているのか。目に見えるのでも計測出来るのでもなく、何かの比喩であるにしても、それを知る手掛かりが、それがどの様にか様々に線であるというのだけでは、手掛かりなどないと同じ。いやそれなら、危険と安全にしても、それが何の事なのか確とは知れていない。それが何かの比喩だとしたら、愈愈漠として知れない。危険も安全も実は全く同じ事なのに、呼び名が二つあるだけではないか。そうであるならそれは、存在する、或いは存在しないものさえ含む、全ての事柄を表す比喩に違いない。どんなものでも、二つ以上の呼び名を持つだろうし、呼び名ばかりで収まる筈もなく、その一つでありながら二つ以上の全く別のものであり、でありながらそれは、同じ一つの事でもあれば、（二〇二一年四月五日）

（高みを見上げれば…）

高みを見上げればもう、足元を固めている。足元を固めたいなら、ただ高みを見上げれば済む。その高みだが、翼が生えなければ届かない所を指すのでは、決してない。足元を固めさえすれば、次の瞬間には、そこへ飛び移れる所が高

みである。そこには、そこより高い所はない。水に飛び込むのに似ているだろうか、水底の深さがどうであろうと高さは足元から水面までの距離で計る。いや少しも似ていない。見下ろそうが見上げようが水面は不動だが、高みは、現れては消えまた何処かに現れる。水面はそこに水面がなければ見下ろせないが、高みは、足元を固めさえすれば見上げられる。逆を言えば、足元を固める力が失せれば、高みももう何処にもない。しかしその力が失せる時は、高みにも用がなくなる時で、高みが見上げられなくなるのを惜しむ事はない。態々足元を固める動作をしなくても、足元はそのままで固まっていて、見上げる高みが見付からないなら、そこが高みなのかも知れない。いやそんな、高みについて考える事も要らず、（二〇二一年四月六日）

（そこは境目で…）

そこは境目で、そこに居れば、背中は冷たく明るく広く高い。腹は温かく暗く狭く低い。全身で世界をがっしり掴んでいる。何が来ても怖くない。いやそうしてそこに居れば、他のものは何も遣って来ない、世界が死に絶えたかのように。境目のただ一つの小さな呼吸が、景色を覆う死に絶えたような静けさを

全て引き受けて、それを甘い息に変えている。その小さな息が、死臭を運んで来る大きな風も悉く吹き払えば、背中も腹もなくなって、そこに居ながら透き通ったような体は、冷たく温かく明るく暗く広く狭く高く低い。これ以上の何があるのか。これが夢であれば、その夢の中へ、眠りを従えて消えて行けるだろうに。そうならない事だけが惜しまれる。夢であるには、どうやら静か過ぎるらしい。その静けさが小さな錘のように体をそこに留め置き、眠りは飽くまでも退けられ、夢の外に覚めたまま、じっとして居るしかない。境目でありながら境目は見失われた。全ての輪郭の明快な揺るぎない景色がずっと続いて行くのに、自分だけがそこから切り離された。そうして何時終わってもおかしくない姿を晒しながら、却ってその姿が、世界の明快さに引けを取らないくっきりした輪郭を纏えば、目に映るのは、景色の中の全ての死臭を吹き払った大きな風が、狭く低い方へ細々と流れて行くだけで、その遠く小さく見下ろされる辺りが、この世界の全てであると感じられて、そこから切り離されて良かったに違いないと、ほんの僅かだけ嬉しいような、（二〇一一年四月七日）

（穴が塞がって…）

　穴が塞がって以来、却って色々なものが入って来る。それまでは、何であれ穴からしか入らなかった。それが今では、何処からでも入って来る、固い石の地面からさえ。では一体何が入って来たのか、と思い巡らしても何も浮かばない。じっと石の表面を見詰めて、一つだけ分かるのは、その石の地面に絶えず気を配らなければならない、と言う事だ。穴が塞がる前は、地面の事など殆ど眼中にならなかった。それが石で出来ているのさえ、どうでも良かった。ざらざらした土の壁も、埃塗れの天井にしてもそうだ。それが今は、地面も壁も天井も、のべつ幕なしに細かく揺れていて、またそこを通して外の何だか知れない様々な音が飛び込んで来て、気が気でない。更にそれらの揺れや音が、重なり合い入り組んで、それでまた何やら歪な揺れや音になって、中中消えないでいる。それがまた塵芥を厄介な具合に舞い上がらせたりもして、それから身を躱したり、息を止めたりもしなければならなくなる。そうした事に始終煩わされて、どうにも逃げようはない。それに係り切りでクタクタ。うっかり眠ろうものなら、目を覚ました時には、雁字搦めにされたかのように全身が痛い。勿論、毎日そこから助け出される。そうでなければもう、疾っくにどうかなっている。しかしまた毎日そこへ戻らなければならない。尤も、穴が塞がる前も、毎日同じように戻ってはいた。しかしその穴一つ開いているだけで、ここは、ただ暫く身を置ければ良いだけの、殆ど何もない空間で、稀にその穴を通して何か入

って来ても、却って退屈凌ぎに持って来いなくらいで、（二〇一一年四月八日）

（透ける壁の…）

透ける壁の手前で、火は、その決まった所で何時ものように僅かに燃える音を立てている。水は未だその決まった所に幾らか溜まっているが、流れる音はしない。二つは並んで見える、火は右、水が左。その違いによって、どちらかがどちらかへ傾いているに違いない。透ける壁と見えたが、そこには、その火と水の力関係が映っているか。それが透けて見えるなら、やはり透ける壁ではある。火と水の関係に従うように、体は反時計回りに動こうとする。一回転半でそれを踏ん張って止めると、火と水は背後に去って、体はその回った円の中心へ吸い寄せられるような姿勢を取った。中心がそこに深く突き刺さって動き行き、体もその姿勢のまま縛り付けられるように固まる。もっと誰か居て動き回っていた筈だが、示し合わせたように皆何処かへ帰って行ったらしい。彼らの少し気味の悪い声は耳の底に残っている。僅かでもそれを聞き漏らさないよう耳を欹てたが、耳に届くのは、体で守るようにしている深い中心の、その奥底から聞こえてくる沈黙そっくりの音だけ。その音が体を吸い寄せているのだ

と分かると、姿勢ばかりか五感もが、音の方に垂直に落ちて行く。その音は五感の届くよりずっと奥深く、体はその底知れない音の垂直の一本の線の上に危うく乗っているようだが、それは、それに気付かずにいた時よりずっと、体を安定させた。その頭越しに、火と水を並べて眺める者が居る。彼は、その二つの違いによる傾きを、目の奥底に少しずつしかし切れ目なく映し取って、それをそこに沈めて保存して行くようだ。しかしそれは、目の奥底過ぎて、彼には何も感じられない。しかしそれを、垂直の音の上で丸まって均衡を取る体は、その僅かな震えを火のように水のように絶やさない事によって、自らの身に起こる事のように感じ取り、（二〇一一年四月九日）

（聞こえる限りの…）

　聞こえる限りの最も遠い音に耳を澄ます。はっきりした近くの音は脇へ退けられる。しかし段々と遠くへ向かうに連れ、音はぼやけ、それだけ扱い難くなる。だから実際に聞き取れるのは、聞き取れる筈の最も遠い音を妨げる、その僅か手前の音でしかない。しかしそれで良い。もしその僅か手前の音を退けて、最後の音にまで耳が届いてしまったなら、壁を突き破ってでも、真っ直ぐそこ

へ走って行くしかなくなるだろう。そして走り出せば、その更に先の最も遠い音に耳を澄まし、たとえ体が突き破れない壁の前で立ち往生しようとも、より遠い音を求めようとする耳はもう抑えられず、先へ先へと際限がなくなる。そんな事を考え始めた分、耳は疎かにされて、聞こえていた遠くの音もどんどんぼやけ、もう目に見える範囲の音しか聞きたくもない。そうして実際聞こえるのは、部屋の中を動いているものの音だけだが、それで良い。その特に耳を澄まさなくても聞こえてしまう音だけに囲まれ、そこにそのまま居座って目を閉じるだけで、聞こえる限りの最も遠い音の更に先にある無数の音が、その遠過ぎて行き着ける筈のない所で音もなく柔らかく溶け合って、その、ここで考えられる限りの最も遠い辺りで環になって、そこから、その環の丁度中心であるこれを、どんな邪悪も取り除いて守っているようであれば。いや、確かにここは、そうして守られているかも知れない。しかし、ここに居る者を守っているのではない。寧ろここが守られる程、ここにじっとして居るだけで傷を負わされ、その傷は知らない間にも深くなり、その解決を、遠過ぎる音の環より更に遠くに求めるしかなく、或いは、抑もその必ず遠過ぎるばかりのせいで、傷を負わされてしまっているようであれば、（二〇一一年四月十日）

（ここが外なら…）

　ここが外なら中に入りたい。しかしここは中なので、ここより入る所はない。ここが外であって欲しくはないが、ここが外で中に入れるなら、そうあって欲しい。しかしもうここには中も外もなさそうで、ここから出られる所も入れる所もなく、ここに居られる限りは何処へでも行けるようだが、ここに居られなくなれば、何処にも行き場はない。そうして行き場をなくしたかのように、じっとして、何か見えない膜にでも動きを塞がれているようなら、それに真っ直ぐ触れてみる。そっと圧すと温かい。いや、何も温かくはないし、温かいと感じられるのでもない。ただその温かさを覚えていて、その温かかった時の感じが、膜の向こうに甦ったに違いない。そしてその知れるだけの温かさを、出来れば直に感じたくて僅かにまた圧すと、その温かさはもう、失われていると知れた。知れたと言っても、その失われた時から片時も、その失われたのを忘れた事はなく、知れるだけの温かさが思い掛けず甦って、その失われたのをつい忘れられそうに思えて、しかしやはり、忘れられる筈がないのだと改めて知れただけ。そう知れてしまうと、圧している方の未だ決して失われていない直に感じられる温かさが、もう暫くすれば失われるらしい気配を、知らずに済ます事は叶わない。いやそれが身に迫っているのも、もう疾っくに知れているのだ

が、ただそれを、温かさをふと知らせてくれた見えない膜が、忘れさせてくれそうにも思えたので、（二〇一一年四月十一日）

（行き止まりかも…）

行き止まりかも知れないなら行くしかない。行き止まりと分かったら戻るが、もし戻れなくなっても、行き止まったままそこでどうにかする。そう決まっている。だから、その先が行き止まりであると分かっていない限り、行くしかない。そしてほんの二三歩で、行き止まりだと分かったので早速引き返そうと思う。しかし足場の幅が狭過ぎて踵を返せず、後退りするしかない。意外とそれが厄介なのは、目線を何処に向けて良いか分からないからで、後ろを向けば、重心が取り難く足を踏み外しそうになるし、前を向いて行き止まりの景色を見詰めるままでは、方向感覚がおかしくなって、足を伸ばす先も覚束なくなる。それは下半身を宙に浮かせてしまう感じで、体の重心をふらつかせるよりもっと酷い事のようでも、いきなり足を踏み外すよりは増しと、前を向いたまま、恐る恐る片足ずつ後ろに伸ばしている。それもただ、狭い所にじっと立ち止まったままで居る苦しみから逃れたい一心で、中でも苦痛なのは、そうしている

間に後ろも行き止まりになってしまうのではと、心配しなければならない事だ。そうなる前に一刻も早く切り抜けなければならない。そう思うと却って体の動きは、ふわふわと柔らかく限りなくゆっくりになって、全身がふわふわと宙に浮くような、うっとりした気分に満たされてしまえば、（二〇一一年四月十二日）

（殻に覆われる…）

殻に覆われる夢。殻の内側には傷も歪みもない。その硬さにも隙や弛みはなく、却って柔らかい。何故ならその硬さによって、殻に守られる自らの柔らかさを隅々まで体は楽しめるから。だからただ夢を見ているのではなく、その夢が殻で、その夢に覆われる殻の中で殻が夢を覆っているような。そうして体は透き通るように芯まで柔らかくなって、ただ空っぽな硬い殻だけが、そこに浮いているような。それから殻は、突然波が来て攫われてしまうが、夢から覚めた身に柔らかさが満ちていれば、体はしなやかに波に乗る。それが何時からか、その様ではなくなった。殻の中で夢は見ている。それは確かで恐らくこれからも変わりはない。夢は必ず見なければならないし、それは殻の中でしか叶わな

い。しかし古びて歪んだ殻と色褪せた夢が、お座なりに別々に据えられただけのようでは、柔らかさやしなやかさは影もない。それで一体どんな夢が見られるのか、ただ眠るためだけの、灰色の砂をぎっしり詰め込んだような夢。それでもそんな夢ばかり見ている内に、何故そうなってしまったかが分かって来る。分かってしまえば何の事はない、灰色の砂が胸に溜まって塊になっている。いや、実際はそんな事は全くないのかも知れない。しかし繰り返される色褪せた夢が、砂の塊と言い表して当たらずと雖も遠くないものを、胸の中に突き止めたのは確かで、そうと分かればそれなりにそれとの付き合い方も考え、徐々にそれから身を躱す術も心得て、硬い殻に柔らかく覆われる夢に、またそろりと近付ける位にはなっただろうか。少し窮屈であるのは仕方ないとしても。それとてもその嘗ての夢を何とか思い出し、その夢を執拗に思い出し続けてやっと、灰色の砂の夢を一時凌ぎに遠ざけているだけか。夢から覚めた身に、もう少しなやかさは望むべくもない。そうであってもそれでも何かをほんの少し取り戻せたのが確かなら。ただ、殻が無傷で波に攫われるのではなく、いきなり殻ごと打ち破られ、それで灰色の砂の塊が胸を突き上げては、折角の恢復への望みも砕かれ、(二〇二一年四月十四日)

（障壁しかない…）

　障壁しかない、至る所。そう思えばどの障壁も、狭かったり小さかったり傾いていたり凹んでいたりで、障壁の用を為さない。なのに何故それらは障壁なのか。頭に障壁しかないからだ。見付けなければならない障壁を探している。それで周りの見て取れる限りのものを見て、それが見付からないので何でもかんでも障壁にして、そこを乗り越えようと慌てて身構えただけ。そんな風に焦ってしまうのは、居場所を失ったからで、どちらを向けば良いのかも分からない。だからどちらを向いても、目に入るものは全て障壁に見えてしまう。求めているのは、ここと居場所とを隔てる障壁で、それさえ見付かれば、もう何処が居場所か分かったようなもの。後はその障壁を乗り越える事を考えるだけ。そしてやっと飛び切り高い障壁を見付けた。これがその障壁かどうかは分からない。つるつるしていて駆け上ろうにも足掛かりがない。この向こうに居場所が隠されているかどうかは分からない。しかしこれが何かの障壁でなくて何なのか。しかも居場所の手掛かりは何もないまま。するとまた、障壁の用を為さなかった筈のものが全て障壁になった。次々にそれらを飛び越え押し倒し穴を開け、その越えられない障壁を迂回する途を探った。そうして進む程、障壁でなかった些細なものまでが、溢れ返るように次々に新たな障壁となって行く手

を阻む。それこそ望むところ。何時か突然それらが断ち切られ、真っ先に目に飛び込んで来るものへと一散に駆け込めば、もう居場所に行き着いているに違いなく、（二〇一一年四月十五日）

（軽く一歩…）

軽く一歩そこを踏み越えるだけで、捨てられなかったものを全て捨てられて、匂いの着いていない冷たい風に晒されながら、当てもなく彷徨って行けるなら、躊躇いなく踏み越える。捨てられなかったものは、何時かそれを捨てたいと願っていたか、そんな冷たい風に晒されてみたいと何時も願っていたか。それは分からない。分かる術もない。ただの一歩のような軽い気持ちで、がらりと周りの様子が変わり、当然、感じ方や振る舞いも一気に新しくなって、その新しさがまた別の新しさを呼び込むようなら、軽い気持ちで必ずそうするだろう。いや寧ろ重い気持ちで熟慮を要するなら、そんな一歩は恐くて踏み出せない。何かの生まれてこの方、熟慮などした事はない。ただ軽い気持ちで居るのを、何かの弾みに許されなくなったら、必ず先ずは叫ぶ。それで事態が動かなければ、多分眠り込む。或いは叫んでから何か、生死を分ける重大な選択でもしているか

も知れないが、それから暫くして眠ってしまうので憶えていない。その暫くの間だけ、ひょっとしたら熟慮のような事が、頭を占めているだろうか。いやや、色々な事を考えようとして却って頭が真っ白になっているだけか。しかしその時の事は殆ど忘れてしまうし思い出す用もない。この頃は何をするにも、ずっと軽い気持ちでこなせるし、それに、軽く一歩で新天地へと踏み越えて行ける機会もない。もうそれを求める気も起きないが、仮に今そんな機会が訪れたら、勿論軽い気持ちで踏み越えるに決まっているが、何気なくそんな自らの姿を、少し遠くに思い描いてしまうと、それで本当に良いのかどうか分からなくなって、頭の中は真っ白なようでもある。勿論そんな真っ白な頭に用はなく、何処へ踏み越えるまでもない所で、何も捨てずに済んでいる中に潜り込んで、（二〇一一年四月十六日）

（何処へでも行ける…）

何処へでも行ける自由と、何処へも行かずに居られる自由。この二つを併せ持てば、そこから何処へ行こうと行くまいと、そこは常にそれ以上望めない地であり、その行く先もまた、それ以上望めない地である。それなのに、今そこ

に立っているにも拘わらず、その地は何時失われるか知れない。そこに居てもそこから何処かに向かっても、それ以上望めない地であるなら、どうしてそこが失われるだろう。不思議と言えば不思議だが、そう感じずにはいられないのだから仕方ない。或いは、その何時失われるか知れないので、それによってそこが、それ以上望めない地になるのかも知れない。その地が決して失われないなら、却って、そこでの二つの自由も色褪せ、要らないものにさえなってしまわないか。その望まれて見出された地の、何故かも知れない危うさによって、その二つの自由もまた切望されなければならなかったのなら、今立っている所が何時失われるか知れないと感じてしまう事が先ずあって、そこから、自由もその望み得る最上の地も導き出された事になりそうだ。小さな隙間に目が留まると、そこに隙間などあってはいけないと少しずつ気付く。少しずつその隙間が狭まるように。もう自由は萎み、ここが最上の地であったのは、過ぎた事になりつつあるに違いなく、急いでその隙間の奥へと逃げ込むべきではないか。そちらにはせめて、何処へも行かずに居られる自由だけは残されていなければならない。それも何時失われるか知れないが、もしそれを失っては、恐らくは何かを望む自由さえも望むべくはなさそうで、一方、何処へでも行ける自由をかなぐり捨てられるのは、その甦る機会はまた遣って来そうで、（二〇一一年四月十七日）

（どちらが前か…）

　どちらが前か分からなかったし、何故どちらが前か分かろうとしているかが、分からなかった。いや、何が前で何が後ろかも知らずにいて、果たして、どちらが前か分かろうと出来るだろうか。ただ、知らずにいる何かが側にあるようで、それをどちらだろうと探るような動きを感じ取れて、その動いて行きたい方を向けたなら、そちらを前であると認めたい気はしていた。ならばそうして向いている方は、紛れもなく前なのだが、その前には、ただそこを前と知れたと言う他に何もなく、代わりに、その前に後れを取ったかのような懐の中に、僅かな重みと温かみを、持たされていると知れた。それはずっと前から、或いは、先ずそれがあって、その後にそれを懐に収める自分の体が付け足されたようでさえあって、それが他の何にも先んじて、動いて行きたい方を向こうとしたに違いなかった。思いも寄らず、それが、失われたのだった。それなのに、その付け足しの空っぽな懐を抱えた体だけは、そこに在って、くるくると動いている。もう前も後ろもないらしい。それでも動き続けるのは、その失われたものを、その奪って行ったものから取り返したい一心で、（二〇一一年四月十

八日

（取り返せないまま…）

　取り返せないまま忘れてしまった。そうして忘れて、取り返せたのかも知れない。なくしたものが何なのか、それをなくしてどうなったのか、そんな事を考えなくても済むのだから。いや、考えなくても済んでいるように思える程に、絶えずそれを考えられていられるのだから。そうしているとも知らずに。いや、知らずにいる事など一つもない。一つもないから、忘れてしまえる。しかし、そうして忘れてしまえているのだと気付くと、何一つ取り返せてなどいないとも気付く。何をなくしたのか。少なくとも、そのなくした際に係わったものの直ぐ側にずっと居て、それが戻って来る時の事を思い描いている。いや、思い描いてなどいない。その思い描けていないのを、忘れようとしているだけだ。そうして、忘れようとはしていられるなら、思い描けない替わりに、その時が直ぐ近くまで来ていると思えるので。いや、何をなくしたのか。それはもう、取り返すまでもないまでに直ぐ側まで迫っている。そしてそれが一線を越えてしまえば、当然その側にはもう居られず、取り返されたそれだけがあって、そ

れをなくした者は消えるしかなく、それなら寧ろそれを遠ざける手立てを講じなければならないが、出来るのは、ただそれを取り返そうとするのを已め、じっと息を殺す事だけで、（二〇一一年四月十九日）

（目の前にある…）

目の前にあるものが目の前にあって生きて動くのは、遥か遠くにあるものが遥か遠くにあって死んだまま動かないから。だから多分、目の前にあるものをもっと目の前に捉えて、その生きて動くのに触れてもっと生かして動かせば、その間は、死んで動かない遥か遠くに行ってしまったものとも係わっていられる。少なくともそう感じられるし、その他に何も感じられないなら、何もない中に居て、ひたらす目の前にあるものを追い掛けるしかない。何かを感じていたいなら、他にない。それで新しい何かを生み出す事はないと分かってはいる。しかしそんな事は何でもない。目の前にあって生きて動くものとの隔たりを、少しでも縮める事に心を砕き、それによって、遥か遠くにあるものを何時も忘れずに居られるなら。そして、その遥か遠くにあるものが、目の前にあって触れられるものよりも、ずっと近くにあったのを、時々でも思い出せれば、（二

〇一一年四月二十日)

(土がない…)

土がない。至る所、通路しかなく、何処もつるつるしていて匂いもなく、何で出来ているか、さっぱり分からない。堅固でずっとそのままかも知れないが、脆くて直ぐに崩れ去るかも知れない。そんな所ばかりを行き来していては、気の休まる時はない。絶えず走り回っていなければならない。もし急に足場を失っても、その先に飛び移れるように。一箇所だけ凸凹した所があった筈だ。直ぐにそこへ向かう。しかしそこは、凸凹しているので他と違うのではなかった。初めてではないのに、足を踏み入れてみて、そう分かる。そこは凄い急斜面で、まるで落とし穴の側面を、転げ落ちないよう体勢を保って駆け下りて行く感じだ。最後まで駆け抜けると、土ではないが、土の匂いとざらざらした感触の、狭い場所に辿り着ける。振り返ると来た道は、下りの斜面であるのは確かだが、それよりも酷く凸凹しているのばかりが目に付いて、何故あんな凸凹した所を一気に駆け下りる事が出来たか不思議になって、それればかりが頭に残る。しかしそんな事より、今居る場所だ。土ではないが、他の場所と違って、土に由来

する材質で出来ているに違いなく、そうであれば、いずれ朽ちるにしても今直ぐではなさそうで、心と体を休めるには、ここしかない。片方には高い壁を見上げ、もう片方には高い崖を見下ろし、手前は下りて来た凸凹道と繋がる。しかし奥は、壁とも崖とも道とも見えず、ただ行き止まりではあるらしく、何もない所に何かの色と形が映っているだけのようで、係わらないに越した事はないと背を向けると、その背を向けられた事によって心底安らかな気分になれるのかも知れず、暫くしてそちらを向いて平気で眠れる程で、（二〇一一年四月二十一日）

（初めての場所…）

初めての場所となると、後先も顧みずそこへ駆け込んで行けるのは、一歩一歩、古いものに向かって進んでいると分かるから。ただ古いものを探すためにずっと歩き回って来た。探せる所は大方探した筈だが、何が見付からないのか分からなくなる程、滅多に見付からない。或いは、何処へでも構わない、ただ何も考えず行く先を決めず出鱈目に歩き回れば、それは幾らでも見付かっているようでもある。実際、初めての場所とそうでない場所とで何が違うのか。何

度同じ所を行き来しても、その度にそこには何か初めてのものが加わっている筈だ。だとしたら、何処へ行こうと常に古いものに向かって進んでいるのではないか。中中そうとは分からないだけで。別に分からなくて良いのかも知れない。分かった方が少しばかり張り合いがあるという程度で。それとも分からないでいては、古いものに出会っても気付かずに通り過ぎてしまうばかりか。しかし初めての場所を見付けて、喜び勇んで、目指すものに向かって進んでいるのだと分かったところで、結局はやはり、何かが見付かりそうではあっても、そこを通り過ぎるばかりではなかったか。行く所行く所、新しいものばかりに出会して、その繰り返しにうんざりさせられるだけで、決して古いものには届かないのか。その繰り返しの中に見えて来る古いものは、常に新しいものを、ただ見慣れただけで、（二〇一一年四月二十二日）

（ここはただ…）

ここはただ、ここがここでなくなるのを待つための場所で、ここでそれを待っていられるなら、他に何も望まない。それとも何か見逃してはならないものを見逃しているので、待つ他に何も思い浮かばないのか。しかしここで何かが

見付かる筈はない。見えるのは、ここで待つ身のじっと止まっているぼんやりした灰色の影だけだ。その影を映す狭い壁が取り払われない限り、何一つ先へ進まない。誰かの命令か依頼があった訳ではなく、かと言って、自らの意志でここに居るようでもない。多分その両方が混ざり合って、どちらもぼやけてしまったに違いない。それらをはっきりさせる事など勿論望まない。しかしこうして時だけが費やされるなら、段々と重い空気に囲まれて、窮地に陥っているのと同じではないか。いや待ち始めた当初から窮地に陥っている。得体の知れないものに不意打ちを食らう心配はないが、それは得体の知れないものさえ立ち入れそうにないからで、思い掛けない幸運も援助も来ない。高い方から風の音が聞こえれば、ベコベコと音を立てる程、壁は薄い。体当たりすれば突き破れるかも知れないが、直ぐ後ろは急な階段が迫っていて助走を付ける引きがない。それで良いのだろう。そんな始末に負えない窮地だから却って何も望まずに居られる。別に安全を脅かされている訳ではない。急な階段を駆け下りている間などは、そこを窮地だとは思わなかったが、その下りた先に何があるか定かでなく、途中で転落していたかも知れないなら、そこは窮地より危険だったに違いない。恐らく何処も彼処も窮地で逃れようはないが、待つ事から解き放たれる瞬間、そしてそこから一気に飛び出して行く動きの中では、窮地に陥っている己の姿を振り払えてはいる。しかしそれもほんの一時の事で、更に何処

かへ逃げて行ける訳でもなければ、そこもまた窮地と言うしかない。何か見逃してならないものを見逃しているとしたら、その何処へ行っても常に窮地に陥ってばかり居られる事かも知れず、（二〇一一年四月二十四日）

（窮地に陥って…）

窮地に陥って待つしかなく、何を待つか知りたいとも思わず、望む事もない。いやそこを窮地と思うならそこを脱したいとも思っている。なのに何も望まないのは、窮地の外に、窮地より増しな何かを当てにしていないからである。或いは何処も彼処も窮地で、何処に居ようとそこを脱したいのだが、それに馴れてそれを忘れてしまっていて、それを思い出させてくれる所に辿り着けたなら、窮地に陥ったと言っても特にそこが危いのでもなく、己を顧みる機会を得られて寧ろ有り難い。そこにそうしてじっとして居れば居る程、何故何処も彼処もが窮地なのか、どの様な己であったなら窮地の事など知らずに済んだのか、などと考えは巡る。それともただ窮地を揺り籠にして心地良く微睡んでいるだけか。いやもしそうなら、その微睡みの中にこそ分け入れば、窮地の向こうへと抜けられそうな。そうしてじっとしたままで心身の衰弱が気に掛かっても、その微

睡みの中で何かを待つ他に何も望まないで居られるなら、これ以上望むべくもない喜びに全身は貫かれ、苦しみは一切洗い流される。じっとして居れば居る程、嬉しさは溢れ、息をするのも面倒になってくる。もう微睡みだけでは不足で、半分は深く眠って、息はその眠りに任せてしまおう。もう半分の僅かに醒めて微睡む方は、ただこの喜びを見守り、その続いて行くのを願うばかり。待たれたものが遣って来て、その窮地を脱するしかなくなっても、深い眠りから覚めた方はそのまま息をし、微睡みを振り払った方は、その得た喜びを抱くまま、（二〇二一年四月二十五日）

（窮地を脱したら…）

窮地を脱したら、背を向けて走り出さなければならない。走り続けるためではなく、走るのを已めるために。走るのを已めて、何に背を向けたかが知れる。それは体の向きで知れるのだ。ずっと喉が渇いていたのを思い出す。口の中の血の味で紛らして来た。水の匂いは、口の中の血を蒸発させる。血に替わって骨が来る。全身の骨が水を求めて軋んでいる。その音に従うように身を低くして進めば、風は益々冷たく乾いて、その先に水は見付かる。骨の周りをまた血

が巡るのが分かれば、もう走ろうが止まろうが何処も同じで水は後でも良い。渇いているのは喉ばかりではない。そちらを先に潤すべきだ。見回すだけ、潤いの素が増えて面白い。その面白さに導かれて、それは潤って行く。心臓が温まり、鼓動を受け持つ筋肉の動きを、機械のようにはっきりと感じる。その浮き立つような感じの中に、何時か必ず解かなければならない謎がある。先延ばしに出来るなら幾らでも先延ばしに出来て、だから何時までも解かれずに残る謎。しかしそれを謎と言うなら、見回せば見回すだけ謎は増えて謎だらけ。そんな軽い謎の数々は、ものの表面に貼り付けられた吹けば飛ぶ飾りのようなものか。恐らく全くそんなものではないのだろうが、それらもまた幾らでも先延ばしが利く。そんなもの等に囲まれれば、もう何の用心も要らない。謎とは無縁の光りが差す、水の匂いも届かない狭く奥まった所へと、身を隠す時。その時の中でなら、幾ら遠回りしようと道草を食おうと、窮地に陥る事はない。勿論その時の長さ短さなど知った事ではない。どの道、光りは直ぐに褪せるだろう。水の匂いばかりか、もっと生臭い血や肉の匂いが染み込んで来るだろう。心臓の鼓動が、それを囲んで溢れる謎を決して振り払えないように。目を閉じて、必ず間違っているに違いない謎の形を、浮かべては消し、浮かべては消し、

（二〇一一年四月二十六日）

（少しずつゆっくり…）

少しずつゆっくりと食べる。じっくり味わうためではない。味の分からないような僅かな量を口に入れ、二度三度嚼めば、静かに飲み込む。それから暫くじっと皿に目を落とし、思い出したように弱々しく口を開いて、また僅かな量を口に含む。味も、ただ湿気ていると分かる他、何もない。薄暗い空っぽな狭い部屋の中で、その繰り返し。部屋と言っても、恐らく何処か知れない所へ運ばれる途中の四角い箱の中。狭いがぎっしり詰め込めば、それ相当のものは入る筐。それが空っぽなのは、その空っぽに相応しいものを入れているからに違いない。食べるのは、他にする事もなく、空っぽに飽きた気を紛らすため。それも、部屋が空っぽなのに飽きたのか、自らの空っぽであるのに飽きたのか。行く先などないのかも知れない。行く先もまた空っぽではないか。或いは、運ばれているようで、実は箱はそこに置かれたままではないか。いや、箱は置かれてはいない。箱はそれだけが切り離され、他の何とも繋がっていない。それだけは確かだ。だから、止まっているとも動いているとも見定めようがない。空っぽと言うのも、実は色々と中に入っていても他との繋がりから切り離されたものばかりで、それを何かであると見定めようがなく、空っぽに見えるしか

ないからではないか。ではそんな自らに飽きて、味気ない食事を摂るしかないお前は誰か、などと誰が誰に問えるだろう。皿はまだ片付いていないが、空っぽに飽きた気を紛らすにも飽きたので、部屋の隅の一番暗い辺りに身を擦り寄せて、そこに何より相応しい空っぽである自らを守っていよう。その空っぽが何処から来たかは知っている。知ってはいるが忘れてしまった。忘れてしまったので、それは空っぽなのだが、何処へ連れて行かれようと、空っぽであれば初めから根刮ぎにされているようなもので、もう空っぽのまま変わりようはない。誰かが箱を開けて覗くと、薄暗くじめじめした何もない部屋の隅に、空っぽな影のようなものがこびり付いていて、その姿が消えたかと思うと、皿の残りをのろのろと食べ始めるのは、その空っぽな（二〇一一年四月二十七日）

（遠くでは…）

遠くでは、物凄い勢いで時が動いている。見えないようで全て見えている。ただそれは体に伝わっては来ない。体は、体が空っぽだとしか感じない。背筋を真っ直ぐに保つ骨組みの他に、何もない。そんな体をどう動かしてみても、何かに近付ける筈はない。寧ろじっと動かずに居て、体の中から失われたもの

の微かな名残でも探してみる。勿論それで忘れられた何かが見付かる訳でもないが、空っぽがその隅々まで空っぽであるのは感じられて、そのままで居れば、その空っぽと係わりのあるものが近付いて来るのも直ぐに分かりそうだ。その期待だけが空っぽを満たせば、遠い時の動きは見えるようで見えなくなり、替わりに、その近付いて来るものの姿をくっきりと捉えられる。他でもないそれが、体を空っぽにしてしまったに違いない、もう決して取り返しようもなく。その失われたものまでは思い出せないが、それが係わったのだけは確かだ。それだけでも戻って来るかどうかで大違い。その意思如何に拘わらず、それは空っぽを空っぽのまま繋ぎ止めてくれるだろう。空っぽまでなくしたら、背筋を伸ばす骨組みさえ見失って姿勢を保つのもままならない。せめて空っぽな体で、その失われたものを忘れてしまってもう取り戻せないとだけ分かっていれば、見えなくなった遠い時の動きが、ほんの僅かでもこっそり空っぽの中に忍び込んでいるようでもあり、そのそうであるような感じを空っぽの真ん中に据えて、何も失われていない振りをする事も出来そうだ。外からそう見えなくても、ずっとその振りが出来ていているままで居られれば、体はまだ、その空っぽで何かを、（二〇二一年四月二十八日）

（円い窓で…）

円い窓で直ぐ奥は泥の壁だが、泥は窓を塞ぐためではなく、その泥に通じるための窓に違いない。しかし目の前にありながら、窓には届かない。触れられそうで触れられない。或いは僅かに触れているのかも知れないが、もしそうなら、その僅かに触れているせいで、窓まで行けない。その僅かに触れているせいで、何とか息が出来ているようなので。そこを僅かに進んでも退いても、瞬く間に息は止められてしまうだろう。或いは、そんな円い窓などなかった事にすれば幾らでも息は吸えるだろうか。しかし泥の匂いを嗅ぐには、その窓はなくてはならない。その泥の匂いのする息しか吸えなくなっているとしたら、窓を離れた途端に息は止まる。と言って何も危うい事はない。そこを離れずにさえ居れば、時が止まったように、泥の匂いの息を吸い続けられるし、泥の匂いの息さえ吸い続ければ、ずっとそこを離れずに居られる。そして気が付くと泥の匂いは失せているだろう。それでも何事もなく、息は止まらないだろう。そう確信出来る程に、泥の匂いは、（二〇一一年四月二十九日）

（行き止まりを…）

行き止まりを探していたかどうか。しかしその先が行き止まりらしいとなれば迷わない。ずっと探していたかのように早速入り込む。直ぐに息が詰まる。引き返さなければならないが、それが行き止まりの楽しさ。酷く窮屈で容易に体の向きを変えられないなら、楽しい時はそれだけ長引く。しかしそう思えるのは初めだけで、息が詰まり関節が決まり徒に体を捻曲げたりしている内に、何が楽しいか分からなくなる。いやその楽しみが分からなくなってからの悪足掻きにこそ、抜き差し難い楽しみが潜んでいて、それは足掻けば足掻く程、面白いように溢れて来る。その楽しみの中に身を転がしてさえいれば、必ず何時の間にか体の向きは変わっていて、そこを抜け出そうと思えば抜け出せる体勢になっている。しかしそれで直ぐにもここを抜け出しては勿体ない。静かに留まって誰かが来るのを待ってみる。誰も来ないが退屈はしない。寧ろ誰も来ない方が望ましい。誰も来ないから安穏に待てるに違いない。そうして待てば待つただけ、そこは自分独りの行き止まりになる。そしてそこが行き止まりであるのは、その独りのせいであるようにさえ思え、それならそこを立ち去る理由も見付からずに、途方に暮れているのかも知れない。勿論このままずっと腰を上げずに居なければならない理由も見付からなければ、途方に暮れるは言い過ぎで、ただ好んで行き止まっているだけの事。或いは好まずとも、ここを出た先

もまた行き止まりで、それなら何処へ行こうと行き止まりの中に留められている訳で、そうと分かりながら一々あちこち彷徨き回らされる位なら、この身がそのまま行き止まりとなっている姿が最も相応しいようであるばかりか、そうして行き止まって何処へも行かずに済めば、行き止まりの代わりに、果ての見えない道を何時か探しにも行けそうで、（二〇一一年五月四日）

（明るい方には水…）

明るい方には水、暗い方は火、その狭い間を渡って行く。後ろは、水と火の混じり合ったザラザラとした砂の塊ですっかり塞がれ、足を止める訳には行かない。息は出来るが、前方から空気の細い一筋が鼻先まで流れて来て、それを吸っているだけかも知れない。少しでも顔を逸らせば、鼻はその空気の筋を失いそうだ。いやもう顔は逸れていて、どうやってまた空気の筋を捉えられるか知れない。ただ息苦しさはない。明るい方の水は干上がっていた。暗い方はと見ると火はなく、湿気の籠もる匂いが届いた。その失せた水と火が、何処かから空気を持ち込むらしかった。そして足はもうずっと止まっていた。後ろの砂の塊がずるずると引き下がって行く。明るい方は益益乾き、暗い方は濡れて行

く。その狭い間を行かなければならないが、それはとても難しそうだ。水や火のような分かり易い目印となるものがない。ただもう後ろから脅されてはいないので急かされてはいない。足を踏み外しても、ゆっくり戻して何故駄目だったかをじっくり見極めて、遣り直せば良い。しかしそうしている内に足元が濡れて来た。あちこちに水溜りさえ出来て、その間を水路が繋がって段々と網の目のようになり、その繋ぎ目が不意に火を噴いたりして、何処をどう行けば良いか分からない。足元が濡れる分、空気は鼻の奥が痛くなる程乾いて、風が湧いて回った。こんな所は一気に駆け抜けてしまうに限る。水にも火にも目を瞑ってしまおう。胸を反らすと、鼻がまた前方からの空気の細い筋を捉えた。その空気だけは匂いが違う。水の匂いも火の匂いもしない。強いて連想を働かすなら光りの匂いか。それも空気の中を通って来る光りではなく、直ぐ側の何処かに隠されて出ては来ないが、それが近くにあって、その光りが、その照らすべきものはずっと照らしていると確かに分かる、そのような光り。その仄明るさに裏打ちされて、空気は柔らかく透き通り、目に見える光りも通って行ける。見た事も確かめようもないそんなものが、暢気にゆらゆらと頭を掠めてしまうのも、恐らくは水と火をどのようにか巧く踏み分けて、

（二〇一一年五月五日）

（上るか下るか…）

上るか下るか迂回するるか。明るい時なら上る。暗くなれば下る。どちらでもなければ迂回する。しかし迂回した果てに、ここに辿り着いた筈。そう今思い出しはしたが、ここからまた迂回して途中で別の迂回の仕方が見付かるかも知れない。勿論、全く明るくも暗くもないのだから、まだ十分に明るいし、もう十分に暗くもあって、上る方へも下る方へも行ける。その行った先で迷う事はないし、気が向けば引き返せる。ただ迂回するだけ。そこではもう引き返せない。そこからは、上ったなら下り、下ったなら上るだけ。そこではもう、迂回して戻るだけの時は失われている。では今はどうか。分からない。抑も、迂回して戻れるだけの時があるかないかは、迂回してみてどうなったかで判断するしかない。或いは、そのようにまだ分からないのであれば、時はあると考えるべきで、早速迂回する方を向く。先ずは、十分明るく十分暗いそこを、自らの足場を確かめるために、明るい所と暗い所に区分けしなければならない。便宜上で構わない。それが出来ない内は、もやもやした所をふわふわ浮いているようなもので、迂回のしようもない。或いは、そんな迂回のしようもあるだろうか。明るさも暗さも選ばなかったのだから、そんな風にしているのが迂回している事になる

のかも知れない。しかし時は待たない。明るさは減り暗さは増す。いや、それならそれで、少ない明るさを、暗さに満遍なく引き延ばすだけの事。完全な暗さなどない。僅かな明るさで暗さは補えて、明るくも暗くもない中に幾らでも留まって居られる。そうなれば一体何処へ戻る事があろう。ずっと、ふわふわ浮いたようにしていて、時など忘れられるだけ忘れてしまえば済む。時を忘れてはいられなくなる時が来るなら、迂回出来る時を使い果たしたに違いなく、そこからは、また別の事でも係わって来ない限り、上るか下るかしかない。明るい時なら上れば良いし、暗ければ下るだけ。どちらでもなければ何もしない。明るしかしその何もしない事でまた迂回し始めてしまうようなら、兎に角そこを飛び出してみて、その先が上りか下りかは、嫌でも足に伝わり、（二〇一一年五月六日）

（耳を澄まさずに…）

耳を澄まさずに居られない所にも、偶には出向いておくべきか。何が得られるのでもないと分かってはいる。何も得られなくて、耳を澄まさずには居られなくなるのだから。そしてその耳が何かを聞き取らない限り、他に何も出来な

い。動けなければ、狭い中に閉じ込められたと同じ。その狭い中で聞き取れる音は限られる。耳を幾ら研ぎ澄ましても、音を作り出せる訳もなく、寧ろ外からの音を遠ざけて極間近の微かな音ばかり探ってしまう。それでは愈愈音は入って来ず、愈愈身動きは取れないが、それだけまた耳は鋭く研がれる。もう間近な微かな音さえ耳は受け付けず、そんな耳のために耳はあるのか。体はすっかり透き通って、体の中からも聞き取れる限りの音は取り除かれ、それで尚耳が何を聞き取るかを待っている。しかし当の耳は何の音も待っていない。そうして研ぎ澄まされたままの耳のための耳であり続けたいのなら。いや何の音も待たずに耳を澄ませられる筈はない。しかしその待たれているのは、気の遠くなるような遙か彼方の大き過ぎて耳に届かない大音響でも、透き通った体の中のどうしても聞き逃してしまう微か過ぎる音でもなく、耳を澄ますまでもなく聞こえてしまい、耳を澄まさずに居られない所で動けなくなっているのを何とかしてくれる音に違いない。しかしそんな在り来たりである筈の音が何故耳に届かないのか。何故そんな音のために体を透き通らせてまで耳を澄まさなければならないのか。確かにそれは謎である。実は耳を澄ませているのは上辺の事で、その謎に面と向かうために、態々ここへ出向き動けずに居るのかも知れない。しかし在り来たりの音が耳に届かない筈はないのである。それなら耳を澄ます振りをして、その在り来たりの音に耳を塞ぎたくなったのだけかも知れず、

（二〇一一年五月七日）

（世界の果てに…）

世界の果てに辿り着いたとして、そこに留まる事でそこを世界の中心に出来たなら、そこより安全な所はない。で、そんな事を考えさせてしまうここが、世界の果てであるかどうか。しかし世界の果てかどうかを、どうすれば確かめられるだろう。その方法が見付からないなら、何処もが世界の果てであり得る。それで十分ではないか。それ以上に世界の果てを見極められないのなら、何処に居ようとそこを世界の果てと考えて構わない。いやこの世界は遍く、世界でない何かと必ず境を接する。つまり世界の何処を取っても、その直ぐ先か裏か隣か後ろか、或いはそのどれとも言いようのない紙一重の所に、この世界と別の何かがある。その境なしに世界はその姿を表せない。であれば、世界そのものが常に世界の果てに位置しているのだ。で、ここがそのような所であるとして、ここに留まる事で、どうしてここを世界の中心になど出来ようか。或いは、何処もが世界の果てであるなら、何処もが世界の中心であるとも言えようか。しかしそれでは、世界の中心から遥か隔たって世界の果てにまで至り着く途は、

塞がれてしまう。いっそ世界の果ての事など忘れ、ここは世界の中心ではないが必ずそこから幾らか外れた所ではあって、その幾らか外れている所に留まりながら、世界の中心の方を向き、そちらとの係わりを少しずつ深めては、それに応じた安全の程合いを測ると言うのはどうか。しかしそれで何をした事になるのか。大抵の者達は、そんな事で危険と安全の狭間で折り合いを付けていそうだ。やはり、どのようにか独り彼らと離れ、世界の果てに至る途を辿って、少なくとも、それより先へは進めない辺りまでは行くべきだ。何処が世界の果てか確かめようがないなら、そこで十分で、そこから、来た途へ向き直ってそのあちらからこちらまでの隔たりを眺められるなら、それまでの危うい道程に比べ、どうして今居る所を安全でないと言えよう。しかしふと脇に目を遣れば、世界はまだまだ何処までも続いているようで、それに比べて、ここに至った道程などはほんの二三歩で、実際二三歩戻れば直ぐ、果てても中心もなくなって、そこからは何処へも通じて行けそうで、ただ、その更に次の一歩が、また違った世界の果てを向いているかも知れず、（二〇一一年五月八日）

（壁が半透明なのは…）

壁が半透明なのは、光りや音が半分透けて来るからではなく、もっと別の透ける筈のないもの、その壁に寄り添わなければそれに気付く事もない何かが、半分透けて来るから。それは見る事も言い表す事も出来ない。いや、その半透明な壁にそれは見えていないか。半透明な壁と言えば、それで全て言い表せていないか。そしてそこに寄り添う者の姿も半分透けて、その壁の向こうに表されているに違いないなら、そこで叶う事は全て叶っている。では何がそこで叶わないのか。その壁を透明にする事か。その壁を擦り抜けて行く事か。そうかも知れない。しかしそんな事は何処に居ても叶わない。抑もそんな事を考え付かない。ここでそんな事を考え始めて、何が起こるかと言えば、少しばかり調子が狂うだけ。尤もその少しばかりが一筋縄では行かず、どうやってその半透明な壁から離れられるか、どうやって、何処かを透明にしてそこを擦り抜けて行けないか、などという考えを振り払えるか、中中容易ではない。そこから一歩踏み出しさえすれば済むのかも知れない。しかし、そこに身を置いた事は忘れられない。或いは一度忘れてまた甦る。そうして振り返れば、景色は全て半透明で、その前に佇む己の姿も、その景色の見えない奥へと半分だけ透けて行くに違いない。そして透けるものと透けないものが浸透し合えば、そこに、後にしたきり二度とまだ行き着けていない、しかし早晩一度は戻って置かなければならない土地が、（二〇二一年五月二十四日）

（延びた陽を…）

　延びた陽を鈍く映す泥水の拡がりに板が一枚渡されている。そこへ踏み出していて、滑るように歩くとその先の水が分かれ、そこに浮かび上がる次の板は、泥を弾いて直ぐさま乾く。若草の一面に生える、灌木に囲まれた狭い場所に辿り着いた。振り返ると、薄い空色の水面の静かな沼と、そこまで歩いて来たその向こうは全て霧。足元の抜け目なさそうな草の音に向き直ると、草の合間に、鼬が左右に身を捩って蛇を追っているのが覗く。瓢箪の様な形の濃紺の水溜まりを見付けて蛇はそこに逃げ込み、その皮と肉は透けて、灰色の骨だけになって泳いだ。水の底のその影が更に灰色を濃くして、曲がる角度によっては骨の色は光るように黒い。その黒が水の中を走るのを見て鼬は飛び退いた。辺りに草に埋もれた鼬の骨が幾らでも探り取れる。鼬よりもっと大きな骨も見付かった。叢で土を掻くような音がするが、草を掻き分けてみても、それは素速く居場所を変えて姿を見せない。一本だけ残った枯れ木の枝に蛇が絡み付いて、私を、或いは私達を、見下ろしている。恐らく高い所からは、私と草の音の主との追い駆けっこが全て見て取れて、蛇はそれを滑稽に思えたのか、猿の啼くよ

うな鋭い声を上げた。しかし声は、途切れると悲しげで、何も見えずにじっとして居るしかない身を嘆くようでもある。枝が震えて大きく折れ、枝ごと蛇は垂直に落ちた。行ってみると、それは草の下の泥水に突き刺さり、ゆるゆると沈んで行く。草原は見せ掛けで、草の下はずっと沼が続いていた。泥水は氷のように冷たかった。私は、その枝の上の端を、杖のようにしっかり掴んでいて、それを離しては一歩も動けないと思った。試しに動いてみようとも思わなかった。ただ首筋から右肩を、微かにまだ陽の当たるらしい温かみがそっと撫でて、

（二〇一一年五月二十九日）

（狭い穴が…）

狭い穴が終わり、急に前が開けて、そこには雑多なものが色々と有り過ぎて、光りはどんよりしていたが目が眩み、慌てて近い方に目を逸らすと、内に窪む高い壁が上にも下にも左右にも延びる。その壁に開いた穴を、私は抜け出たらしい。雑多なものを掻き分け進む。進む程、後ろへ遠ざかる筈の凹んだ壁は背後に迫る。それも、ただより高くより幅を拡げるばかりでなく、私の進む方へと曲がって、私の進む雑多なものを容れているこの空間を閉ざす形で、その壁

とそれに抗う雑多なものとが闘ぎ合い、あちこちで音を立てて砂煙を上げている。このままでは進めば進んだだけ世界は狭まり、遂には出口まで辿り着けずに世界諸共閉ざされる。或いは狭まり迫る壁より速く行けば、独り、雑多なものを残して逃げ切れるか。壁の圧力に、もう雑多なものは単調な灰色だけの拡がりになっていた。そこは一面細かな砂になって、その粘り気に足を取られて転んだ。一握りの砂が手の中で固まり、滑るので落とさないようにそれを捏ねている内、拳一つ位の割れた卵の殻の形になった。外からでなく内から突き破られた形に割れていた。砂が粒立って、どれもそのような卵の殻の形になっている。それが、更に足を重く滑らせる砂の粘り気になっているに違いない。進むのはままならず、前を向いてずるずると後退っていると、迫って来ていた凹んだ壁はみるみる窄み、私はやがて小さな卵の殻に閉ざされるようだった。しかしそうである程そこは、閉ざされるより却って拡がり、遠くに高い山脈が見晴るかされ、そこへ向かって踏み出せば、壁は嘘のように背後に去った。山脈の裾に砂煙が上がっている。山はみるみる霞んで、灰色の薄闇の中に大きな卵が浮かんだ。その僅かな割れ目を伝って中に入ると、中はすっかり石になっていて、狭い割れ目が奥へ続くが狭いままで、身動き取れなくなった。心臓が卵全体に搏動の震えを伝えて、卵は息を吹き返し、私はその卵から生まれたに違いなかった。直ぐ脇にその抜け殻を見付けた。そのままでは私は、自ら望んで

石になってしまいそうだったので、その私を脱ぎ捨て、小さな柔らかな姿になり、すばしこくまたその卵の殻の中に逃げ込んで、進む程体は小さくなり、空と大地まで包み取る巨大な卵形の壁に閉ざされた中を走り続けていた。しかし行ける所はどんどん狭まり、同じ所を繰り返し走り回るしかなくなり、そうする程、灰色一色の世界が、捩れた黒光りする砂煙を噴き上げては、あちこちら極彩色に染まって行く。それはやがて私の体になり、私は走るのを已め、一個の心臓の姿になって脈打つ卵を突き破ると、何処までも窪んで霞み続ける世界が開け、私は腹を切り開かれて、その腹の中の卵をその窪み続ける世界に投げ付けては、平気を装わなければならず、（二〇一一年五月三十日）

（二本並んだ木の…）

二本並んだ木の前に立つ。葉は落ち花だけが咲くが、花はどれも細かく激しく揺れて震えて、色形は見て取れない。声を掛けてみた。その声を花が聞こうとしてくれるなら、揺れるのを已めるかとも思えたので。しかし花は揺れ続ける。ただ声を掛けるだけでなく交互に歌い掛けるようにした。右の木の花が止まり、梅の花が枝にくっきり幾つも浮いた。次に左が止まり、同じように梅が

点った。二本の木は左右対称に見えた。その間を抜けて行こうとすると体が独りでに回って、四方を眺めさせられた。同じような木はどの方向にも至る所に見られたが、花も葉もない。何回転かする内、花を咲かせた二本も見失い、太いらと細い枝の木ばかりに取り囲まれた。回るのを已めた体は疲れて重い。一本の木に凭り掛かると、幹の中で声がしている。歌っていた。それに合わせて歌おうと思うが、聞き慣れない旋律で歌に入る切っ掛けが掴めず、体は強張った。やっとの事で幹から身を剥がして、体を一回転させてみれば、どの幹にも歌が詰まっているのが分かった。別にどれかの幹に合わせる事はない。ただ静けさに声を突き刺すように、自ずと思い浮かぶままを歌いたいように歌えば良いのだ。そうは思うが声が出ない。小鳥が、飛べないのか、歩いて近寄って来て、私の足に耳を寄せた。それで鳥は私の体の中の歌を聞き取っているに違いなかった。鳥はぐったりし、目もとろんとなった。私は木を真似て、腕を枝のように伸ばした。腕に風を感じると、風の中に私の歌は溶け出ていた。風は水の匂いを求めて谷を遡り、泉とその水を溜めた波立つ池で私の歌声は急に伸び上がって舞い、一気に水に落ちた。それで出来た波紋が私の歌を継ぎ、それは小川の流れに乗って私達の所に戻って来た。それでも、またその歌を聞き取ったのは鳥だけで、私は静けさの中に突っ立つだけだった。不満はない。高い方へ向けて、別の歌を独りで歌った。雲はないが、暖かい色の雲が見えている積

もりで、それへ歌い掛けた。泉の湧く音を足元に聞き取った。音だけだったが、その音と歌声を混ぜると、それは周りの木々に伝わり、枝を震わせ、時々そこに震える花の咲くのが見えた。それは私には見えなかったかも知れないが、小鳥には見えた。翼を腕のように前に伸ばし、その花を掴み取るように、枝に飛び掛かって行った。何度もそれを繰り返すのは、その花が咲いて見える仕組みを解き明かそうと励んでいるようだった。もう歌わなくても良いと思った。いやもう疾っくに歌うのを已め、私は一本の木のようにして、（二〇一一年六月十一日）

（陽を受けて…）

陽を受けて白い眩しい道のここは行き止まりで、ずっとここに居る積もりもないので、どうにかして貰えるよう誰かに頼むしかなかった。そこを戸だと思って叩くと、縦にそろりと隙間が出来て、覗くと外より更に明る過ぎて何も見えない。知らず体はもう引き返そうとしていたが、尖った耳が隙間の方を向いて動かなかった。確かに狭い所で何かが細かく震えるような音が聞き取れていた。明る過ぎて確とは知れないが、隙間は頭を突っ込める位の幅はある。しか

し眩し過ぎて目を遣られてしまいそうだ。いやもう目は大分遣られていて、隙間は見詰める程ぼやけ、明る過ぎる筈の隙間の奥が却って薄暗い。しかしそれでそこに何かの輪郭が見て取れるのでもなく、暗いなりにぼやけているだけ。ほんの少し体が揺れたか、ぼやけた隙間の両端が左右に逸れて後ろに退いた。隙間を通り抜けてしまったに違いないが、それにしては来た道は同じ陽を受けて、そこにそのままだった。ただ、ここを行き止まりとは思えなくなっていた。何故ここを行き止まりと思えたかも思い出せない。何処へでも行けるのだ。見回すと低い方ばかりが目に付き、見回す程、その低い方へしか行けない。そこは、吸盤が幾つも下を向いて並んで居て、勿論そんな所へ踏み込めば無用の混乱が起こり、私にも危害が及ばないでもない。私としては、じっとしているままだとは思うが、私の吐く息がそちらへ届いてしまうせいか、或いは私の体の僅かな揺れが伝わってしまうせいか、整然と並んで居たものがゆっくりと波打ち始めた。波は痛みを感じているかのように歪み、すっかり上を向いてしまう吸盤もちらほら見えた。その上向きの吸盤の真ん中には穴が開いていて、そこから亀の頭が突き出て、直ぐに大きく口を開けた。吸盤の形をした甲羅を背負った亀が並んでいたのか。話し掛けようと息を吸い掛けただけで「何も話し掛けるなよ」と機先を制され、「踏み込んで来てしまう者は仕方ない。しかしそいつが俺達に言葉を掛けたら、俺達は、それをそれぞれ別の意味に取って、バ

ラバラになってしまう。そうなればお前の足場もない。何で俺達がここに居るか教えてやろう。棲み処を出てここに並んで遊んでいるんだ。皆で整列する程楽しい事はない。お前はそれを邪魔した。いや邪魔が入るのは承知の上。寧ろそれで刺激になって、楽しみにはなくてはならない。だけどそれは、そいつが黙っていればだ。喋る中味じゃなくて、お前の声が光りを掻き乱し耳障りな音を唸らせ、それが俺達に目の前に餌を見せ、俺達は何時ものように餌を巡る争いを始めてしまう。それでは棲み処の側の餌場に戻ったも同じ。今日一日、ここは絶対餌場に見えてはならないし、俺達はここが餌場であるような振る舞いをしてはならない。そうなったら何が起こるか知れない。知れないなら試してみたらどうかと言うかも知れないが、とんでもない。取り返しの付かない災難が降り懸かったら後の祭り。遊んでは居られても、ここは俺達にはまるで勝手の分からない所で、バラバラになるだけで、恐ろしい天敵を誘き寄せてしまうかも知れない。で、お前がどうすべきか教えてやろう。実はお前も仲間か、仲間でなくても同類だ。少し遅れて来ただけで、俺達とは少しばかり出来が違うようではある。勿論その遅れは取り戻せない。お前はただ黙って、まだ道の方に気を取られているお前の連れと並んで遊ぶんだ。そして誰かが来たら、取り敢えず黙らせて、そいつがお前らと同類だと分からせるんだ。」連れに声を掛けるまでもなく、連れは私を擦り抜けて、先に亀の列の先頭にぴったりくっつ

いて、早速居眠りを始めた。釣られて亀達も眠り扱け、吸盤が並ぶとしか見えなくなった。私はまた遅れてしまったらしく、ただそれを眺め飽かして、彼らと同じようになるには何かをしなければならないが、それが何だか、（二〇一一年六月十二日）

（床板まで剥がされた…）

床板まで剥がされた何もない部屋の、硬い地面がゆっくりと脹らむ。その真ん中から僅かずつ波打って、波紋のように見えた。それら波の輪が一斉に内を向き、地面の真ん中だけが目立って尖った。それに応え、それを恐れるように天井の真ん中が凹んだ。地面の真ん中では、その尖った先が地面を離れ、玉になって転がった。その転がる震えで、四方の壁は出鱈目に曲がった。地面の脹らみは萎み、平らになった。壁はボロボロになった。天井の凹みはそのままで、外から見れば、その裏は尖って見えるだろうか。壁と天井の継ぎ目に開いた隙間から見上げると、天井に裏はなかった。何処までも、薄く幅のある刃のような風の吹き渡る様しか見えなかった。私は漸く壁を剥がれ、部屋の真ん中に浮いたが、昇って来る空気の流れに危うく乗っているだけだった。しかし部屋に

は、その気流とは別に凹んだ風圧が入り込んでいるのが感じられ、それに乗り換えると、私は上向きに落ちるように、天井に打ち付けられた。そのまま私は凹んだ風圧に付き纏われて、天井に擦り付けられながら、そこを転げ回らされた。初め冷たく硬かった天井が、段々と柔らかくなって、私のせいで天井は傷だらけになって行った。そうして天井に出来た模様は見覚えがあり、傷が増える程古臭く感じられた。それを尖った玉も地面の何処かから見上げていたか、その古臭さを嫌がるように、壁の裂け目から外へ逃げた。模様は、大きな水滴の一雫のように天井の真ん中から纏まって落ち、玉の後を追った。つるりとなった天井より、それを見渡す私の方がもっとつるりとしているに違いない。しかし私はその感じを捉えられなかった。それは、何処か私から滑り落ちた所で、私とは別のそれ、何かに取り付いて、それをつるりとさせ、それはそのつるりとした感じに塗れ、それに埋もれてしまう恐れに、叫びを上げていた。壁を引っ掻くようなその叫びを耳に入れれば、私はつるりとしているどころか、ざらざらしているに違いなかった。その感じもまた捉えられなかった。ただそれは、私から離れて行くようでもなかった。私はそのままで、私の周りからも、ものの動く気配が消えていた。何もない部屋も、もう部屋でもなかった。ただ動かずにいるなら、そこを、またそこにある何ものかを、名指すまでもない。或いは、名指すのが、或る動きの一つの帰結であるなら、おいそれと出来る事でもなさ

そうで、ただそこに浮かぶ塵だけが、その場でくるくると回って煌めいている。それは、塵同士で、塵の数を数え合っているようで、もう何度も何度も数え直したが数が合わず、そうしている内にも、塵と塵の間に新しい塵が浮かび出て、古い塵は僅かずつ磨り減って、突然消えてしまう。その消えた辺りに、つるりと感じられる私が、見付かったりもするが、勿論それは、ものの動く気配の遥か手前の出来事であって、（二〇一一年六月二十一日）

（行列が通って…）

行列が通って行く。頭に頭と同じ位の逆三角形のぎざぎざした飾りを乗せている。何処から来て何処へ行くのか。来た方を見ても突然行列が通りを塞いでその向こうが見えない。行く方も行列に塞がれて先を見通せない。抑も行列は進んでいるのか。ただ体を揺らして歩く振りをして見える限りの少人数が同じ方を向いて並んで、行列を真似ているだけではないか。少し暗くなって、逆三角形の飾りが浮き立った。その並ぶ飾りの中を、行列が向いている方から後ろに向かって、橙色の光りの塊が列をなして進んでいた。それもまた行列の先頭で突然現れ、末尾で突然消え、それ以上それが何処から来て何処へ行くか明か

されない。私はそれを暗くじめじめした階段の踊り場から見ていた。階段の高い方を見ると、その上り切った上の白木の小屋の戸が開けっ放しで、私はそこから降りて来たに違いなかった。そこからここまで階段には薄い緑色の小さな塊が点々と落ちていて、それは行列の飾りの中の橙の光りを微かに受けて照らされた。それは私が階段を下りる途中、何度も蹲って吐いた物だった。緑と橙の混ざり合う色が奇妙で、それにまた吐き気を催した。行列が少しずつ前へ進み始めた。先は同じ所で消え後ろは同じ所から現れて途切れない。その真横から風がこちらへ向かって吹いて、風力よりそのざわざわした音が耐え難く、蹲ると、びっくりするような量を吐いた。それは踊り場を食み出して下って行く階段を流れ落ちて行く。今直ぐでないにしろ、この先孰れ階段を降りなければならないだろうに、ゲロでドロドロでは滑って巧く下りられないだろう。直に乾くようだがそのつるつるのまま固まって輝いてさえ居て益々滑り易そうだ。踊り場もそんな状態で、じっとして居ようにも少しでもバランスを崩せば、つるつるの階段を滑り落ちないとも限らない。他に行き場がないなら、何とかして行列に加わるしかないが、踊り場との間には広く深い溝があって、腰を引きながら覗くと、虫と草花の何年も掛かって積み重なったものの腐った匂いが吹き上がって、それでまた吐くが、吐いたものは浮き上がって頭上を掠め消えた。その消えた所に穴を見付けた。その端を掴み、背伸びして獅噛み付き、

穴を押し拡げると、穴から来る土埃に目を塞がれたが、構わず穴の中を上下も確かめず進んだ。踊り場まで届かなかった行列の様々な音の混じり合った大音響に嫌でも目を見開かされ、痛過ぎて目に触れるのも恐ろしいまま、私はゆらゆら揺れる平らな箱の上に乗せられていた。箱の下に車輪が付いていて、それは青く磨かれた線路に乗って、ゆっくり進む。私は行列の中に居るには居たが、頭に被る物がなく、恐らくその頭数には入っていないだろう。箱の側面は何の覆いもなく開いていて、そこに手を突っ込んで、手探りで掴み取った物を急いで頭に乗せた。頭から嗅いだ事のない匂いが鼻に降りて来た。見物人の息遣いが直ぐ側で聞こえるので尋ねると「お前のゲロを燃やして灰にして水で溶いて固めた物だ」「それはどんな形か」とまた尋ねると「心配するな、ちゃんと役に立ってる」「橙の光りをちゃんと後ろに受け渡しているという事か」「知らない」「行列は何処へ向かうのか」「行列が終わる所だろうな」「それは何処だ」「踊り場から階段を降りて行った先に見ただろう」「見ていない」「行列だ。見ているし、お前はそこに今居る」「踊り場から階段を降りた覚えはない」「じゃ踊り場など初めからなかった。お前はただ階段の縁にゲロを吐き、そのゲロで滑って階段を底まで一気に転げ落ちて、（二〇一一年六月二十三日）

（右の道は…）

右の道は崖へ落ちているのが見える。左の道は平らな石原へ消えて行く。真っ直ぐ前へ道のない所を進むしかない。石原を掠め崖を滑り落ち掛けながら低い砂山を踏み越えると、色とりどりの植物の密生した広い庭へ出た。その先の二階建ての木造りの家を目指すなら、植物の間をくねくねと擦り抜けて行くしかない。迷路だと思って行ったり来たりしていても家には近付けない。棘のある枝に行く手を塞がれ、遂にはそれらに四方をびっしり囲まれた。足元の草を毟り地面の中から木の釘を掘り出しては、それを枝と枝の間の打ち込んだ。槌はないので平手を使って。右手は血塗れになって痣で青黒く腫れた。左手は真っ白で、傷付けないでおこうと決めた。そうして隙を作っては踏み込んだが、釘はどれも樹液に塗れて直に枝から抜け、戻ろうにも戻れないばかりか、ささくれた枝もが次々に槍のように突き出され、それに急かされて進み続けるしかない。木の釘が地面から出て来なくなった。腕を突き出し力尽くで枝を押し退け、棘に傷付けられながら、植物を踏み越えて行く。進む程、地面を濃く覆う草は硬さを増し、枝を張る植物の背も高くなり、体は地面を離れて行く。もう二階の屋根より高い。屋根に飛び降りる算段を付けなければならない。一際硬い枝に生る刃のような果実を捥いで、それで柔らかい枝を切り繋いでふわりと

した塊にした。それを抱いて屋根に頭を向けると、その中に体がすっぽり収まって、体ごと橇になって屋根の上まで滑り落ちた。体は無事だったが衝撃で屋根が裂けた。中は真っ赤な土で、同じ色の血塗れの右手で赤土を掻いて一握りを掴み出すと、それは急に乾いて黒くなって殆どが土埃になって舞い、私は目を潰された。その私を庭に立って見上げるらしい者が「ここは眼医者だが、そんな所から落ちて来てまで診て欲しいとは、そんなに目が悪いのか」と声を掛けて来る。返事はしたくないので慌てて左手の真っ白な柔らかい指で土埃を掻き出すと目は開いた。見下ろしても誰も居ない。右手は血が止まっていたが真っ黒だった。唾を掛け腿に擦り付けたが黒は落ちない。そうして腿を圧したからか、腰から下が屋根の裂け目に埋まって右手がズキズキする。その腕を真上に突き上げた時だけ血が引いて痛みが止まる。微かな風が右手を撫でただけで、指は五本共落ちて屋根を転がり、庭へふわりと舞い落ちて行った。もうここから何処へ行くまでもなく何をするまでもない。屋根越しに庭の向こうの道が見えた。汚れた二本の道が綺麗な一本になって、その先へ進めば崖で、大小の獣達が、知らずに落ちて行く。その落ちて行く時の哀れっぽい鳴き声が微かに届く度に、腰から下が揺れ、刺すような痛みがうっすらと走る。崖の下からぐるりと遠回りした獣達が足を引き摺りながら二階屋の下の階に寄り集まって来た。直に中は一杯になり彼らの密な息遣いで屋根まで大きく揺れた。その揺れで下

の階は黒い土埃で満ちた。獣達は脚の治り掛けたところで目を遣られた。彼らは気乗りしないようにのろのろと庭へ出て、ねばねばと植物に絡まりながら屋根の私を見上げ、口々に目を治して欲しいと低く呟くように訴えた。私に何が出来るか知れないので黙っていたが、彼らの声に何時までも取り巻かれているのが段々と耐えられなくなって、脚がすっかり治るまでは、目が見えないでじっと大人しくして居られるので、そのほうが良い、と言った。それを聞いた獣達はあからさまに顔を怒りで強張らせ、震える体を反らせ捻らせた。それで愈々枝に四肢は絡まり、身動き取れなくなった。私は彼らに、足元を掻けば木の釘が見付かるからそれを使えと言った。彼らはそれで目を突き、目からどろりとした黒い土を掻き出した。目はもう目の形を失って、色とりどりの花を咲かせているように見えた。黒が掻き出される程、色は澄んだ。私はもう眼医者ではいられないと思い、左手で、突き上がるまま硬くなった右腕を根元から折った。左手はそのまま白い花になって、獣達の息を受けて萎れ、（二〇一一年六月二十五日）

（見上げると思いの外…）

見上げると思いの外暗い空も、目を凝らすと思いの外鋭い波の向きも高さも、何時も通りで、遠い対岸は珍しく霞んでいた。その水の広い方から、黄色い高い風が吹いて、対岸をすっかり消した。入り江なのか湖なのか広い河なのか、もう分からない。小舟が一艘岸に着いてすばしこい身の熟しで降りたのは仲間に違いなかった。何故なら他の舟は波任せに漂って風に押されて遠ざかり、互いに声を掛け合って水に飛び込んで消えてしまうので。独り陸に上がったそいつは、赤を纏っていた。少なくとも身を隠すための色ではなく居心地が悪そうだった。或いはただ指の爪の先だけが赤かったか。その指差す方は起伏のずっと続く丘で、その行き着く先だけが明るい青い空が横に薄く口を開けるようだった。その空の手前までくねくねと一本の塀が延びている。そいつと連れ添って塀に沿って進んだ。何処か穴があればそこを潜り抜けようと塀の方ばかりを向いて。しかし穴も少しの綻びも塀は見せない。初めから塀だったものが石造りに変わっている。初めから石造りで、絵の具を塗って木に見せ掛けていたものが、段々と絵の具が剥げたか。風は熱く湿った。いきなり塀が見失われ、ずるずると砂地を滑り窪みに落ちて行く。その底の空気は酷く乾いていて喉も焼けるように渇いた。そいつの赤はすっかり色褪せていた。全身砂と同じに白っぽく、影もないので、目を離してしまうと見付けるのに時が要る。暫くそいつを見失ったままでも、水を探した。見付からないなら掘るしかない。そうして

地面に目を落として居てめぼしい所を探していて、そいつの声の目を上げると奴は塀の上に座って居て、私が顔を上げるのを待ったか、塀の向こうへ体を向けた。その向きを変えしなの瞳に水が映ったように見えて、私はそいつに、その自ら目を離すなと言おうとしたが喉が掠れて声が出ないので身振りで伝えようとした。それを奴は、何か別の意味に取ったのか、塀の向こうに飛び降りて姿を消した。白い砂の一粒一粒に赤が差し、窪地全体が溶けるように赤く染まって行く。口の中に唾が湧いた。それを飲み込んで喉を潤し、そいつの名を呼んだ。赤にちなんだ名で、それを精確に口にはしていたが耳には届かないので、その名を頭に浮かべる事は出来なかった。しかしその名は私の体を塀の直ぐ下まで引き上げた。見上げると塀はびっくりする程高く、つるつるしていて、飛び乗るのもよじ登るのも叶わない。踏ん張って塀を引っ掻くしかなかった。そうして居る内に、柔らかい地面の中の塊に足を取られて転んだ。掘り出すと、奴そっくりの少し濡れた赤い死体だった。しかし決してそれは奴ではない。何処を見ても、ほんの少しずつ、何処となく奴の体との違いが見付かった。それを脇に退けてまた、当て所なく、塀を引っ掻き続けるしかない。何度か風が吹いたり已んだりし、その度に風は透き通るのと黄色く濁るのを繰り返した。死体は形は留めるが、もうかなり土に還っていた。指で軽く押せば表面の直ぐ下はすっかり土かも知れない。風が運ぶ砂が足元に積もるのか、塀は少しずつ低くな

って行く。そうと分かると、塀を登りたい気は失せ、死体を置き去りにして、塀に沿ってまた同じ青い空を向いて進むと、地面はみるみる盛り上がり、塀はすっかり埋もれ、その向こうに塀に隠されていた大河が見えたが、殆ど水の流れた痕ばかりで、真ん中に申し訳程度に細い一筋が流れるだけだった。その水は透き通っていた。対岸は霞なくくっきりと隅々まで見えた。河の出口に岬が突き出し、その向こうの盛り上がるような海も覗いた。赤く濁る海だった。細い流れに降りるまで思いの外時が要った。ごつごつした石が転がって歩き難かった。側まで来てみると、思いの外幅があり流れも速くとても渡れそうになかった。触れると氷のように冷たく、直に凍った。足元の微かな水音を頼りに掘ると、穴の奥に地下の水の流れを覗き込めた。そこへ潜って流れを下って行く。何度も奴の透き通った体が見て取れ、また水の奥に隠れたりした。先で水が二手に分かれるのが見えた。私は奴の体を掴んだ。奴も私の腕を掴み返した。流れは速い。それでもどちらを選んでも決して間違いではないと分かったので、私達は目を閉じて態と体を浮かせ、（二〇一一年六月二十九日）

（喉が渇いていた…）

　喉が渇いていた事は憶えている。しかし喉の渇きとはどのような事だったかは、忘れてしまった。飲み水は必ず側にあって、尽きないので。また喉に渇きを覚えてみたいと時には思っても、どちらを向いても、行けども行けども水の豊かな土地の景色では、何時かその先へ行きたいという気持ちも、長続きしない。それなら例えば高い真っ直ぐな枯れ木を見付けて登り、喉が渇くまでそこから降りずに居るのはどうか。そうしてみるが、一向に喉は渇かない。幹の表面はもう樹皮も剥がれ白くつるつるした枯れ木と雖も、全く朽ちた訳ではない。幹の奥ではまだ水は吸い上げられ、その管と繋がる体に水は巡って、水を飲まなくても、喉は内から潤されていた。それなら私は、その枯れたと見えた木の、残り僅かな一葉なのか。或いは木の葉の代わりをする事の出来る小さな獣のようなものか。喉の渇きどころか、暫くすると、その全身からうっすらと水が滲み出し、雫が出来ると、すかさず羽虫がそれを飲みに来た。それでも雫が溢れると小鳥までが水を飲みに来た。同じような葉か葉の代わりのものは増えて、もう枯れ木にも見えない。それらが一斉に水を滴らせるので、根元は水溜まりだらけになり、風が吹いて辺りの地面の凹凸を均すと、そこに薄い膜のような広い円い池が出来た。空を映すので地面の色でも水そのものの色でもないのに、池の色は何処も濃い青で、獣も鳥も小さな虫さえ近寄らないし、その水中に棲むものの姿もなく、ただ微かな風だけが静かに水面に綾を織って戯れた。

池はじわじわと、ただ単調に拡がり続けて、それで、水は殆ど地面に染み込んでいないし、蒸発も極僅かであると知れた。私の周りの、葉か葉の代わりのものが、僅かな風の止まる瞬間を見計らっては、自らポトリポトリと落ちて行く。それらは、慌ててその後を追う微かな風に巧く乗ってひらひらと舞い、水に触れそうになっても、軽く身を翻せば決して池には落ちず、その外まで飛んで行った所で消えた。私は、そうもしたかったが、どう遣ったら彼らのように、木から身を切り離せるのか分からず、そうなった時に巧く遣れるようにと、ただそれらを眺めた。遂にまた、私だけになり、その私の体からも水は滲まなくなっていた。風が已み、何一つ動かず音もない。それでも喉の渇きは来なかった。ただじっと黙ってそれを待つしかなかった。しかしそれに拘っていないのは自分で直ぐに分かった。何故また喉の渇きを求めたのかも分からなかった。他に求めるものが見当たらなかったからか。或いはそうではなく、実際に喉が渇く感覚の中に、私を惹き付けて已まない何かが潜んでいるのか。池は、ただ円く平板な青の拡がりで、それを池とも見えなくなった。少しずつでも水は蒸発して、もう水の膜ではなく、もっと硬い膜が地面の上に置かれているようにも見えた。本当のところは手に触れて確かめるしかない。枯れ木が風もないのに揺れた。私に、もう倒れても良いかと尋ねているかのようだった。気付くと青い膜はもう相当縮んでいて、根元に小さく円く残るだけで、水の退いた跡は、硝

子のように透き通る土が剥き出しになり、地下の水の流れまで透けて見せた。しかし目を凝らすと、そこを砂漠の生き物達が往来していて、殆どが水の流れた痕であると知れた。やっと一つ見付けた水流はくねくねと曲がって、枯れ木の真下にまで辿り着いていた。その流れが涸れれば、私は、この木と共に終わるに違いなかった。僅かに風が来た。その中に草の匂いを嗅ぎ分けて、その方を見上げると、高い空の中を細い水の流れがくねくねと伸びて、何処かで途切れている。その途切れた所だけが時々弾けるように輝いて、（二〇一一年七月二日）

（箱船で川を…）

箱船で川を下っていた。壁は凸凹していたが、狭い船内は空っぽだった。楽器が積み込まれる筈だったが、川の流れが急に速くなって、舟を繋いで置けなくなった。態とのろい作業で、積むのを遅らせたのかも知れない。その人夫の一人に過ぎない私だけが、船に乗っている。人夫に紛れていたのは、ここから逃げる機会を窺うためだが、偶々私だけが船の中で作業をしている時に船が流されて、図らずも逃げられる事になった。箱形の船内は舳先の方だけが僅かに流

尖っていて、焼け焦げた臭いがする。奥に水に濡れないように燠火が守られていて、今も少しずつ船を焼いていると分かった。楽器の一つでもあれば、火を鎮められたのに。歯で熱い木の壁を囓り、そのまま歯と壁の傷に強い息を当てて音を出した。直ぐ脇の壁から炎が上がり、川の流れは益々急になった。逆効果のようでもあるが本当のところは分からない。まだ何も変わっていない。続けた。炎は大きくなり、息を吹く頬は火傷しそうに火照った。火は回り、とうとう船の側面に穴が開いて、外の水の流れが覗いたが、炎の勢いに圧されて浸水は気配もない。壁の熱さに、歯を立てていられなくなった。口を離すと、口の中は殆ど溶けていて、歯だけが壁に残った。そこへ息を吹けば演奏は続けられたが、調子がまるで違い、それは炎の向きを変えた。炎は川の流れに真っ向から逆らい船を止めた。天井を破ると土色の雨が濃かった。岩場に飛び降り、船が全て燃えて行くのを眺めているしかなかった。他に目に入るものもなく、動けば急流に流されるだろう。燃え尽きた船は、雨に打たれ続けて、黒くねばねばした灰の塊になった。その表面を刮げては胸に抱えられるだけ抱え、岩か水かも分からない所へ踏み出した。踏み出しても分からない。雨の中の土が目を痛めた。流されているようではない。水の中を、絶えず向きを変える渦に身を傾かせながら、何とか立って歩いているような。胸は痩せて肋が浮き出、灰は硬く固まり、その隙間に息を吹き付けると、音が鳴って、音色は目の痛みを

除いた。目を開けると、薄明るく透き通っているようでもあったが、その先に何かの形が見て取れる訳でもないので、透き通っているとも確とは知れない。それでもそちらへ向かう足だけは止めなかった。そこで足を止めれば、一瞬で闇に閉ざされ耐え難い痛みが全身を襲うと、何時か何処かで教わったような気がして仕方なかったから。その他にも貴重な教えを聞かされていて、それらを書き留めた帳面を探して歩いているのではないか。丁度見えるか見えないかの辺りで、誰かが溺れているらしかった。微かに声を聞けたが、その方を向くと必ずその方に声はなく、方向を聞き分けるようとする耳が、その声に弄ばれているのだと思い知らされる。胸の演奏を已めて、その声に耳を澄ますだけにした。足が止まり、体は一瞬で急流に攫われた。溺れる者の声が耳元でそっと囁く。こっちを向くようにと盛んに促して来るが、姿は捉えられない。どちらかを向こうとするからいけない。ただ近くにだけ居ると思って、流れに身を任せると、その姿が水の間に見えた気がした。それは絶えず忙しく姿形を変え続ける事で、そこから消えずに居られるに違いなかった。その見立てを身振りで伝えてみた。すると、それはこちらが伝えたかった事だと、声は答えた。つまりそちらからは、私の方こそが絶えず形を変えながらここに居て、そちらの声に聞き耳を立てる者に見えるらしく、そんな私の姿の危うさから目を離せないと言う。では灰の塊はどうか、と問うと、ただその灰の塊だけが残って私は消え

た。それは壺に収められ石を積んだ上に乗せられた。絶えず姿形を変えられるものだけが、そこへ近付けた。それが壺に耳を当てると、一瞬音色を聞き取れたが、耳は耳でないものに形を変えて、音はそれきり聞き逃された。灰を壺に収めたもの達が死に絶え、独り残された赤子がやっと歩けるようになって壺の中を覗くと、灰は透けていて、息を掛けると、白くなった息は形を変え続けた。子供はその中へ溺れた。それを助け出す目の、長大な水路と無数の船の建造が始まっていて、しかし段々とその労働に辛苦だけが彼らの頭を占めて、何のための水路かも忘れられ、(二〇二一年七月五日)

(草の匂いのする…)

草の匂いのする泥濘に膝まで浸かって真っ直ぐ前を見ていた。草の匂いさえあればずっとそうして居られたし、まだそうして居られる。右側の高い方から、少なくとも高中低三種の鳥達の鳴き声が絡まり合って互いを細切れにしながら一斉に落ちてくる。泥濘はそのままに、草の匂いだけが吹き払われた。泥は木と石の焦げるような匂いになった。足を抜かなければならない。何処をどう行けば良いか分からない。泥濘は何処までも拡がるようで、しかし目を凝らせば

小さな水溜まりにも見えた。周りを見回せば見回す程、何も見えない。壁で囲まれているのでもないし、空が拡がっているのでもない。それなら目を開けていても仕方ないと目を瞑ると、底が抜けて、全身が泥水の中に落ちた。立ち泳ぎをしようと身構えただけで、泥水は澄んだ。そこでまた見回すが、何も見えなかった。水の中であるには違いないが、水の中であるようには何も見えて来なかった。息も出来たので、水の上に居るのと違うのは立ち泳ぎをしている事だけだった。低い方から微かに鳥の鳴き声が聞こえる。それを頼りに斜面を滑るように下って行った。段々と体が重くなって、体は泥のように感じられた。の体も見て取れない。本当に泥になってしまったかも知れない。下る感覚もなく、鳥の鳴き声の環に囲まれていた。見上げると、初めて居た所に首から下だけの姿があった。首だけは水の上に出ているらしい。その体は白くて柔らかそうで動かなかった。立ち泳ぎをしなくて居られるのが不思議だった。私は指笛を鋭く鳴らしそいつを呼んだ。そいつはそのまま地面のない所を地面があるようにしてこちらへ歩き出した。水面が首を掴んで体を支えているのか。私達の距離は確かに近付いているのに、そいつの姿は大きくならなかった。距離が縮まるに連れて私達の体も縮んでいるのではないか。もうそいつは直ぐ目の前に来ていた。「これ以上近付けば私達の体は小さくなって見えなくなってしまうのではないか」と尋ねると、私の体だけが消えていて、そいつは胸が消え腹が消え、

膝から下だけになった。指笛を吹こうにも指も口もない。そこは小さな水溜まりで、その中に鳥の鳴き声が溶け込んでいて、それが私かも知れなかった。それは水の中に小さな気泡になって水を僅かに濁らせていたが、少しずつ水は澄んで、私は消えてなくなるのだろう。水の上で濡れた服を脱いでいるのが見えた。着替えが見当たらない。その着替えがない事は、余程差し迫った事らしく、そいつはぶるぶる震え、足踏みが止まらなくなった。水溜まりに泥が混じりあっという間に濁った。鳥の鳴き声が何処に溶けているのか見えなくなった。私は水から出て、そいつの硬い体を掴んで、木と石の戸口へ叩き付けた。戸は破れ、私達は中へ倒れ込んだ。上りの斜面を直ぐに登らなければならなかった。外は焼けるように熱かった。水が欲しかったが、登る程水から遠ざかるのも分かってはいても、どう仕様もない。私達の体はそれでもびっしょり濡れていて、それが二人を離さず、離れずにいれば、びしょ濡れのままでいられるに違いなかった。水が滴り斜面を流れる音も聞こえたが、それが斜面の下で音を立てて蒸気になってしまう音も届いた。斜面ももう先がないのが見えた。私達はただ登るのを已めて輪を描いて踊った。それでも斜面の一番上の端に足が掛かって、その向こうへ落ちそうになっては踏ん張った。一滴でも斜面の向こうに水が零れれば、斜面が崩れるのは分かっていた。「私達の体はもう二人合わせてやっと露の一滴ではないか」と私は尋ねた。しかし誰に尋ねているのか。私は見え

ない斜面を下る見えない露の一滴か、或いは、ただの蒸気の一粒かも知れなかった。いや目に見えない水の粒子であるなら、そのまま鳥の鳴き声の中に溶け入って斜面の縁から解き放たれるだろう。しかし微かにも鳥の鳴き声は届かなかった。それは私が鳥の鳴き声など待っていないからだった。遠い雷鳴か何かを待っているに違いなかった。突然の大雨が泥濘を押し流し、（二〇一一年七月七日）

（見晴らしだけは良く…）

見晴らしだけは良く、その何処へでも行けた。そこに壁があるのも初めからずっと見えていて、己の足で長い時を掛け、遠い道程を歩き通した。そうして壁を直ぐ目の前にして、何故そこに壁があるのか、壁はなければならないのか、壁など何処にもないのではないか、などと思い巡らしてしまうのは、行く手を自ら壁で塞いでしまった己の行いが、腑に落ちないままであるからか。しかしその壁は、私をその先へ行かせないためにあるのではない。その先へ行けてしまうものを行かせ、二度と戻って来られなくするためにある。私がその先へ行けるか行けないかは、私の一存で決められはする。しかしそれでも、その先へ

行けると決められないのも分かっていた。そんな壁が入り用かどうかも分からないまま、私は自ら進んでその壁の前に立った訳で、それなら壁についてより先ず、壁の先へ行けてしまうものとは何なのか、また、私がその先へ行かない、或いは行けないのに、先へ行けてしまうものだけを行かせるのは、私がそれらを壁の向こうへ追い払っているのではないか、そのような事をしてしまっている私とは何か、そんな事について考えるべきではないか。或いは、私が何であろうと、私にそうさせるのは、壁がそこにあるからではないか。見晴らしの良さは、壁が私に壁を見せ、私がそこへ行かなければならない事を知らせるためで、幾ら見晴らしが良くても、ただ俯いて足元だけを見詰めていれば、私は何一つも壁の向こうへなど行かせないで済んだろう。しかし壁を見付けたのは私だし、私は壁を見付けようとしていたかも知れないし、見付けた壁を一度も目を離さずに見詰めるままでいる。そして私以外の誰もが、それを壁とも分からず通り過ぎていないか。或いは、それが壁になるとは分かっても、ただ一瞥を呉れるだけで、それを壁として利用しようともしない。確かに壁は目に付き難い所にはあるし、簡単に踏み倒せそうでもあり、その先へ行けるか行けないかを考えない者には、それを壁と気付く事も滅多になさそうだ。或いは、その先へ行けるか行けないかを考えたにしても、その壁が何を目論んで、そのような事を考えさせるかにまで思い及ぶのは、恐らく私だけだ。何故なら、壁の向こ

うは、ただ私の目によって拡げられたのだから。勿論そこは誰の目にも触れられるし、壁と壁の向こうとをはっきり区別し、その違いに心を配る事も出来る。しかしそこまでだろう。壁の先へ行けてしまうものを戻って来られなくするのは、私独りの仕事だ。その先へ行けるように、その体に工夫を凝らすのも私だ。そうして向こうへ行かされたものは、その私の遣り口を初めから見通していたに違いない。それを黙って具に観察するのに専念しているのだから。そして壁の奥で、壁の前でこうして私が為す術なく考え倦ねているのも見通している。それは私には分かっているが、向こうを何も見せない壁によって私にはそれは分からないのだ、と自らに言い聞かせている、或いは壁によって隔てられて見えないものは、見えないのだから見えなくて良い、とそう思いたいための壁なのか。であるなら、態とそれを壁と見誤っているだけで、そこは何時でも誰でも通り抜けられる通路に決まっていて、私に出来るのは精々、直ぐに外せる仕切りか何かを立てる事位で、私もまたその先を全て見通せているのだ。そう見通すために壁は必要だったし、見通せたもの全ては詰まるところ、一枚の欠ける所のない壁の姿となって私を立ち尽くさせている。その壁があって初めて見通せる、そのような壁がなければ、私は何一つ見通せないままだった。しかし何故見通さなければならないか。見通して得られるのが、他に用を為さない壁一枚であるなら、そんなものに骨を折って何の甲斐があろう。そちらへ行けて

しまって戻って来られないものの姿を、はっきり私の目に見て取れるようにし、そのものに、私の姿を見通させるのを確かめるため。つまり私とそれとは、壁で隔てられても二人のままで居られるのを確かめるため。しかし壁で隔てられなければならない程に別々な二人、あれとこれとに隔てられなければ仕様のないもの、であると明らかにし、それを確かめてもしまうしかない。或いは、それこそ手に入れたかった事か。絆には距離が必要で、隔てられるのを意識しなければ絆は手に入らない、と言うような事。しかし隔てられているのは、壁などなくても初めから見えていた。それなら壁など全く要らなかったのだ、私には。では、あいつが私に壁を造らせた。心底あいつはそれを嫌がったし、その嫌がる姿をここで私に見せるのか。それは、私にもあいつと同じ見通す力を与えるため、態とそうして、（二〇二一年七月十一日）

（真っ直ぐな通路…）

真っ直ぐな通路なので、その終わりが行き止まりなのはずっと見えていた。それでも何故歩みを止めないのか。そこまではかなりの距離があり、何度も痛い足と相談しながら引き返すべきかどうか考えた。しかし引き返すのは、行き

止まりの方へ向かうよりもっと徒労に思えた。ただ向きを変える時に襲われるであろう疲れを、恐れるだけかも知れないと自問しながらも。通路は窓がないのに明るく、凹凸も障害物もなく、だから影もない。初めから明るいので窓は要らないのかも知れない。天井は壁と同じ明るい色だが、実は天井に見えているのは、壁との境界を隠す程壁と同じ色の空ではないか。そうでなければ、この明るさが得られる訳はない。壁は装飾どころか染み一つないが、行き止まりとの距離を常に測りながら進むので、単調さは感じなかった。行き止まりに行き着くまでの何処かで、その測られた距離が突然大きな意味を持ち、そこで思い掛けない変化が訪れるのではないかという気構えで、気は張り詰めていたから。その見覚えのある距離が測られた。ここなら私は行き止まりから初めて目を背け壁にぶつかって壁の中の絵に成れそうな気がした。しかし足は止まらずそのまま先へ通り過ぎ足は速くなる。もう猛スピードで行き止まりに激突するしかないのか。そうなる直前、そこは行き止まりではなく、そこから左右に日本の通路が分かれて行くのが分かった。それでも足は止まらず体は行き止まりに激しく叩き付けられ、三つに裂けた。行き止まりの壁画、右へ行く体、左へ行く体。当然左右の体は背を向けるままだが、足の感触から互いとの距離を測り合ったので、分かれて遠ざかっているのに、二つは一つで、離れて行く気もしない。それでも疎ぞれぞれの体の形は、どんどん違ったものになって行くの

が分かった。通路の幅や高さにも違いが現れていた。それは体の変化のせいで測れないが、その変わって行くのだけは分かった。それは命の長さに直に係わるに違いなかった。もう右の通路へ行った者に死期が迫るのが分かった。勿論それでも左は先へ進むしかない。見えない先へ目を凝らし。行き止まりは少しも見えて来ない。足に、右へ行く者の足取りの感触が届かなくなっていた。斃れたのだ。引き返せない代わりに、突き止まりの壁に激突した姿を思い描いた。勿論今となってはそれは、左が、動かなくなった右を優しく胸に抱いている図でなければならなかったが、どうしてもそれが頭に浮かばない。無理に二つの体を同じ画面に収めようとすると、左が右を刺し殺す絵が浮かんでしまう。（二〇一一年七月十三日）

（形を選んだ…）

形を選んだ筈なのに石を積むと隙間が出来て向こうが見える。その上に隙間が出来ないように注意した筈なのにまた隙間が出来る。石はどんどん積まれ、その隙間のせいで倒れない。隙間に粘り気があるかのように。石塔を造る積もりはなかったが石塔が出来てしまうともう動かせず、それで本当に良かったか。

その下に何が埋もれているか調べようにも、もう手遅れ。隙間から向こうに何が見えるかだけが頼りだが、一つ一つの隙間からの景色は、一つ一つ空の色からして違い、目移りがする。やっと赤く暗い空で目が止まると、その隙間は、向こうからこちらを覗き込む目に違いなく、それで他の隙間の粘り気がなくなって、石塔は今にも崩れ落ちないのが不思議なように揺れる。腕だけでは巧く支えられそうにないので、胸で抱いた。それで体に伝わる揺れで、石塔の下に何が埋まっているかが分かった。そこには一個の黒く丸い石が埋まっていた。物心付いた私が初めて拾った石。とうの昔に何処かへ行ってしまった石。石を斜めに一本走る赤黒い筋が目に止まって、それで拾った石。拾って直ぐどうしたかは思い出せないが、ずっと懐に入れて温めて持ち歩いていて、それが石であるのを忘れ、すっかり体の一部に感じていた石。そして偶々山から月が出るのに出会すと、石は振動し、ぐるぐると音を立てる。音を聞き付け、月の方から近寄って来る。私は厚い葉の濃く茂る大木の間の崖の中に掘られた小部屋に走り込んで、月を誘き寄せる。石は必ずそこで懐から転げ出て、月の背後に風に流される煙のように消える。私は息苦しくなって一晩中空っぽの胸に拳を擦り付けて小部屋で寝込む。汗だくで目を覚ますと、部屋に陽が強く差し、石は懐に戻っている。ゆっくり撫でさすると、前日より少しだけ石は年老いたのが分かる。特に赤黒い筋の表面が微妙に歪み、それはそこに疲れが溜まったせい

だ。そうして月に何度か、月との絡みを繰り返す度、石は段々と果実が萎びるように小さくなって行った。或る日、昇る筈の月が、昇って来ない。石はそれに恐れを成したかのように、私の胸の中へ食い込み、夜空に月の在処を探す一個の目になって、私はそれに付き合って一晩中仰向けに横たわって、眠らずに居た。夜が明けると、石は私の胸にすっかり埋もれ、そのまま何の痕も残さず消えていた。それ以来、月が山に係って姿を見せる度に、私の胸は穴が開く程じりじりと焦げる様だったが、それも何回かする内に段々と収まり、何時か石の事は忘れたままになった。その石が埋もれているに違いなかった。埋もれたままでその石は一個の目になって、突き上げるようにして、私の胸の内を激しく覗き込んでいた。その目に胸の内は全て晒されただろう。目は私の胸を突き抜け、更にその向こうまで見通した。そこはただ真っ赤な石とただ真っ黒な石とが入り交じる果てのない河原で、その先端が雲に隠れる高過ぎる石塔が、一棟だけ突き立っていたが、塵のように風に吹き飛ばされ、その風に舞う石の塵の一欠片一欠片が、どれも月を探す目になっていた。しかしそれらは全て何処かに吹き払われ、石塔の跡の小さな窪みに赤い水が溜まって、黒っぽく光り、その窪みを埋めるための石を探したが見付からず、それでも探し続ける内にずっと遠くまで来てしまい、もう戻れない。暗い地面は赤く、明るい空は真っ黒で、月の上を歩いているのかも、などと笑おうにも、

（二〇一一年七月十五日）

（身を隠していると…）

　身を隠していると、独りでに食べ物は何処からか口の中に転がり込んで来るらしい。ここに居れば空腹を覚えない。ただ食べ物が目に見える訳ではないので、ものを食べられているかは知りようがない。それぞれ酷く違った形の高い木の一列に並ぶ見晴らしの良い細長い丘の上で、その一番端の木の根元の草むらから顔を出して景色を眺め回して居れば、風が吹く他には何も起こりそうにならく、それで身を隠していると思えてしまうのかも知れない。その自らの姿をずっと高い所から見下ろしているのは、丘の端が崩れて今はないが、嘗ては一番端で風を何時も真っ先に受けていた木で、その木は根の土を失い風にもがれ枯れて土に還って、それから小さな獣の姿になってそこに戻って来て、それでも体の感覚は木のままで、だから獣の腹の空く感じが分からないだけで、本当は飢えて体が動かなくなっているようでもある。獣は丘の削られた方を向いて、動こうとしない。動かずに居るしか、生き延びる途はないかのように。草が風に靡いて波打つと、獣の形の影が次々に走って、獣はその影の中へ紛れて行けば、身を隠したまま動けた。それでその影のどれかに溶け込んで、向きを変え、

木々の間を縫って走って、草の中へ消えた。それを追っていた今はない木だけが、高い所に取り残されたが、みるみる低い方へ下りて、丘の端へ降り立った。勿論姿は自らにも見えないが、見えるなら、それは木の種の姿に違いなかった。丘の端の風に吹き付けられて草も生えない所で、少しずつ土を被って芽を出すと、やっとその姿が見えた。見上げても草と空ばかりで、草が激しく靡いた時だけ辛うじて、隣の木の天辺が見えた。気の遠くなる高さで、自分がそれと並び立つまで成長出来るには余程の幸運が重なり続けない限り無理に違いなかった。そう思うとそれはもう木の芽であるのをやめていて、獣の二つの小さな目になって、すばしこく動いて瞳孔を開け閉じし、盛んに辺りを探っていた。そして風と草が作る獣の形の影の一つに飛び込んで、その動きに従った。動きが速く薄暗いので視野はずっと悪く、何処をどう行っているか見当もつかない。木々の間を縫って行けていると期待したが、足が止まり急に視界が開けて、風の音の方を振り仰ぐと、丘を離れた所から見上げる事になっていて、しかもそれは目に見えて縮み、風が草をねこそぎにして、木の根もむき出しになり、木々がこそがれて、風に転がされて行くのも直ぐだろう。それはそれで仕方ないと思うが、その中へ消えていった獣の事が気懸かりでならず、来た途を引き返した。それでも丘は大きくならない。近付くより、風に土を吹き払われる方が速いのだろう。辿り着くと一本のくねくねした紐のような痕しかない。その周

りをぐるぐる回り続ける内、やっと己の獣の姿が見て取れた。もう木ではない。行く末は決まった。と思うと紐のような痕が、紐になって足下を這い回り、足に絡みそうになる。何時しかそれと組み合っていたが一向に決着が付かず、疲れて飽きて体を投げ出すと、その体が丘になって、背中から脇腹にかけて、木が一列に生えて来そうな気がする。そんなわけはない。しかし眠気が襲って、そのまま眠って二度と目を覚まさなければ、そんな事も知らない所で起こるかも知れない。しかしそうはならず、目覚めると紐は紐の痕に戻り、そこにいるのは耐えがたくなって何処へでも歩いて行くしかなかった。そのとぼとぼと遅い歩みの獣を、高い所から見下ろす、木になれなかった自分が、獣の真上を動いて行く。一度も見上げなかったが、獣にはそれは分かった。進むほど荒れ地は段々と草に覆われて来て、少し先に細長い丘が見えた。一面草に覆われ、木の姿はなかった。或いは草の中に隠れて、木は芽を吹いているだろうか。（二〇一一年七月十八日）

（崩れ掛けた薄暗い…）

崩れ掛けた薄暗い石段を登り切ると霧が来て急に前を塞がれた。足下さえ見

えないが、振り返ると石段だけは見えた。早足で登って来るのは、霧の危うさを伝えに来る者だ。待ったが、近付くに連れその姿が何重にもぼやけて、見失った。私の横を通り過ぎて行く風だけは感じた。私にではないと分かった。その風の流れに促されてまた前を見ると、先に僅かに光る所があって、ただその光へ近付く位なら、石段を落ちて血塗れになる方が増しに思えた。霧に隠れた地面に俯せに倒れ込み、そのままで居られるように身を硬くした。分かっている事だけを目を閉じて整理して頭に浮かべようとすると、何も浮かばないが、目が却って見開かれ、直ぐ下が地面ではなく、霧の入り込めない空洞と見えた。明るくなったり暗くなったりするのは、私の息のせいだと暫くして気付いた。吐く息は薄く、霧のように広がる冷たい炎のようで、息を吸うとそれらは全てまた私の胸に収まるらしい。それでも吸い切れない光る欠片は、足下に溜まって足の甲から食み出ると水の泡になって、斜めの決まった方向に流れた。その先に目を遣ると先程の光の裏側へ通じていて、そこへなら近付けるし、その光を消しに掛かる事も出来るかも知れない。しかし体を硬くしているだけでは近付けないし、迂闊に体の緊張を解けば、その光の力が来てそこから身を引き剥がされないとも限らない。息をゆっくり吐き続けて一カ所に溜め、直ぐには消えない炎を灯して、その重さに縋って進むしかないと思うが、思うように行かない。現れては消え掛ける濃い炎の中に丸い虫が迷い込んでいて、私が息を吐

き続けるせいで、同じ所を堂々巡りしている。虫と私の体を入れ替える事が出来たら全ては巧く行くが、どう虫に提案すべきか。虫は私の企てを見透かして、「では互いの姿を見なかった事にしよう。そうすればお前の企ては巧く行く。」「見てしまったものをどうして見なかった事に出来るのか。」「石段から遣り直せ。登り切ったら虫に成れば良い。」「一度登ってしまったものを登り直す事は出来ない。」と言うと虫は見失われ、私の体は揺らめく大きな炎の中を転がっていた。それが虫の姿か確かめたかったが、どうしても自分の姿は見えない。段々と四角い光が近付いて来た。四角は平たくなって、その先に同じものが積み上がり、そこは石段の一段目に違いなかった。私は近付くのを躊躇った。近付く程、それを光として消すのが難しくなるから。もし虫の姿を得ているなら、羽を振るわせて飛べば良いのでは。羽の手応えがないままそうしている積もりになっていると、急に等身大の虫の姿が現れた。自分の姿に違いないと更に身を寄せると、その姿が端から消えて行く。それは仲間の虫で私はその体を勢い良く歯を立てて噛み千切り胃袋に納めていた。次々に等身大の仲間を食い続けて進むしかなく、腹はどんどん重くなり、食う勢いにも弾みが付いた。その先が明るくなって、今噛み付いたのが最後の一匹だと分かった。そいつは虫ではなく、初めからその抜け殻で、私はその中の空洞にのめり込んだ。中は等身大より大分広く、私の体は見る見る小さくなって、点のように小さな一匹の虫の姿

になった。虫の殻はバラバラに広がって砕け散り、私は私を虫の姿に照らす光の方へ這って進んだ。その内に光は殆ど見失われ、光の匂いを頼りに進んでいた。それでも自分が虫の姿のままであるのは、その体の動きから知れる。匂いの方向が分からなくなる事はなかったが、匂いは幾ら進んでも強くも弱くもならない。段々頭がぼんやりし、それに慣れ切って、もっと有意義な事を片手間にも始められそうだが、その手掛かりが見付からない。虫の体の内側にそれを探ると古い傷が見付かった。体の中にすっかり食い込んでいた。その傷を口で銜えて引っ張り出すと、冷たい炎のように輝いて、それに息が掛かると更に明るく輝き、息を吸うと少しくすんだ。その光の濃淡が周りに波紋を描いていて、私はその中心に留まって、光の匂いの方向を見失った。私自身が光の匂いを出しているなら、それは虫の匂いでもあるに違いなく、私が食った仲間の匂いも全て含まれていて、それが何を引き寄せるかは、（二〇一一年七月二十一日）

（放って置いても…）

放って置いても置かなくても、知恵は辺り構わず堆積する。なので少しでも多く知恵を身に着けていたいと思う者は、知恵ばかりが埋もれていそうな低く

狭い所や、いっそ地下に潜むのを好む。そんな知恵とは無縁でそれを求めようもない私なので、何時も足は広く高い方へ向かい、塔の先端を住み処にしている。屋根ばかりの景色を見下ろすと、知恵に塗れた人々の届かない高い所を風に乗って舞っている、この世界の知恵とは決して係わらないものを独り占めした気分になれる。勿論実際は独り占めなどしていない。それらは決して誰のものにもならない。見上げるなら高い塔はすがすがしい姿にも見えるが、住んでみれば、夏は一日中熱い陽を浴び続け、冬は一日中寒風吹き荒ぶ中に晒され、春と秋にしても暑過ぎるか寒過ぎるかのどちらかで、それらしい日和は年に何日もない。尤も四季など知恵を身に着けて歩いている者共が気に掛けるだけで、知恵のない私は、塔が傾いたりへし折れたりでもしない限り、気候の事は忘れていられる。問題は外との係わりではなく、頭の奥の方の神経の根元辺りに、初めから何か知恵と係わるらしいものが埋め込まれてしまっているのではないか、と言う事だ。それが恐らく、現状に飽き足らず、より高い塔を探すために私を新しい土地へと向かわせ、やっと見付けた塔の上に住みながらも、更に高い塔へと思いを馳せさせるものであるに違いない。私は全くそれに縛られ逃れられないし、逃れたいと思うのが良いのか悪いのかも分からないし、縛られるという程の事でもないような、或いは縛られるまでもなく、私とそれとは、どう仕様もなく分かち難いような。塔は日々それを新たに私の前に剥き出して、

それで愈愈それが分かり難くなり、それとどう向き合うべきか、などと考え始めたら、迷いは深まるばかりだ。挙げ句、もうお手上げとなれば、塔こそ知恵と係わるものの場所であり、塔に留まるには、常に私の持てる全ての知恵を動員していなければならないのではないか、それなら私は実際そうしているのではないか、などと妙な事も頭に浮かぶ。しかし私に知恵がないのは、はっきりしている。いや或いは、忘れてしまっただけで、私は嘗ては地下を好み、そこでせっせと知恵を貯め込んでいて、それが知らぬ間に頭の奥に埋め込まれてしまい、お節介にも勝手に働いているのか。それともその埋め込まれたものは、低い所に堆積する類いの知恵ではなく、決して吹き降りて来ない高い風の中に、色も形もないが常に含まれているようなものか。しかしそんな知恵をどうやって頭の奥に埋め込めるだろう。或いは埋め込まれていると勘違いしているだけで、その風の中の知恵を、頭の奥の方で嫌でも感じ取れてしまっているのかも知れない。そうであるなら、頭の奥の方で感じられるので、それをつい知恵と呼んでしまうが、それは、この世界の知恵とは決して係わらないものが、私の神経の中へ染みて来て、それが頭の奥まで流れ込んだものだろうか。そうとはっきり気付く事が出来るなら、それは幾らかは喜ばしいだろう。何故ならそこから更に高い塔を探しに新しい土地を彷徨うまでもなく、ただ神経を研ぎ澄まし、そこに染みて来るものだけを相手にしていれば済みそうだから。しかしそ

れで果たして良いのかどうか。塔の高さを気に掛ける必要がなくなったのは良いが、それで却って失うものはないのか。試しに塔を降りて態と低い土地を彷徨い歩いてみるのはどうだろう。しかし、そうしている内に、二度と塔を見付けられなくなり、頭の奥の方に感じ取れていたものも感じ取れなくなり、狭い地下の裂け目に迷い込んだまま、衰えて事切れるのではと恐れる。より高い塔を目指す事ばかり考えていた時にはあった、体の内から自ずと湧き出る尽きせぬ力のようなものは、もう決して当てに出来ないのだ。いやそうであったとしても、敢えてその恐れる通りに身を投げ出してみるべきではないか。何故なら私の衰えは、低い土地に堆積する知恵を知恵と見て取る力をも私から奪い、低いも高いも、知恵が何処に有るかないか、それが何であるかないかも、もう知った事ではなくなって、何も感じる必要もなく、そこでたとえ神経が何かへと働いても、(二〇二一年七月二十四日)

(空も風も…)

空も風も黒いのに、そこだけ白く、何処からか光を受けているようだが、何処にも光りは見付からない。唾だけが頼りだった。唾を垂らして、それを掬い

取ると、それは水平線の方へ流れる。唾は直ぐに黒ずんで見失われまた唾を垂らして掬い取ると、それが流れて水平線が見付かる。そうして体もまた水平線の方へ流れて行く。しかし直にほんの少しまぶたが重くなると、それが水平線でなかったと気付く。それは少しずつ傾いて行く。そしてそこへ流れ込んで行くのも唾ではないと気付けば、空も風も黒いままに遠のいて、白く光りを受ける拡がりの中に辺りは包まれて行く。しかし私はその中に居ない。水平線でなかった方に居て、唾でなかったものが私だった。それは傾き続ける上を流れ続けた。しかし傾いても傾いても、決して落ちる事はない。私を取り巻く何かが、常にその傾きを立て直し、そうしてまたそれは傾く事が出来た。或いは私だけがその傾きよりもっと傾いて、その傾きを立て直しているのかも知れない。そしてほんの少しずつ瞼を重くして行く事によって、そう出来るらしかった。瞼がそれ以上重くならない所で止まると、水平線が急に開けた。それは初めからほんの少しだけ傾いてそれより傾きも直りもせず、黒い空を支え、黒い風に吹かれていた。しかし水平線だけは黒には染まらず、空と風の向こうまでも延びて行って、石の台の上の真っ白な地球儀を探し当てた。海岸線だけでも書き込みたかったが、喉が涸れて唾が出なかった。石の台ごと背負って、水に行き当たるまで歩き続けるしかないのか。そう思って石の台に触れると、白く見えていたそれは黒く煤けていて、それを舐めると、その苦い味が口の中に唾を出し、

その黒い唾を白い地球儀に垂らして行くと、細い海岸線が描かれた。唾を垂らすのはその一度だけで良かった。後は地球儀を順々に回して、その唾を傾けて流して行けば、地球全体の海岸線を隈無く描けそうだった。唾の幅と厚みは変わらず、その中の黒も少しも減らなかった。しかし地球儀を半回転させて裏を向けると、描いた筈の海岸線が全て消えていて、白かった表面は僅かに赤味を帯び、その赤味の中へ降りて行くと、真っ白な波一つない静かな海の中に、真っ白な小さな鳥が溺れているのが見えた。しかし何故真っ白な中に真っ白なものが見えるのだろうと、更に降りて行くと、海と鳥の他にもう一つ、真っ白な何かが居ると分かって、それに近付くと、私はその中に溶けたのか、それは私になっていた。或いはそれが元々の私で、私はそこへ帰っただけのようでもあった。鳥は幾ら溺れて暴れても波は一切立たず、その溺れる姿をずっと側で眺めて居られるのが私は嬉しくてならなかった。そうして私達は地球儀ごと世界を旅して回っているに違いなかった。鳥が私に何か話し掛けた気がして、私が鳥に語る事が出来るのは黒い空と風の事だろうと、それを探して頭を巡らすと、そこは薄暗い原っぱで、草の根の中に身を隠す者達が、黒い空と風を元の色に戻す計画を密かに練っていた。私はその計画を誰に隠さなければならないのか尋ねた。彼らは驚いて一斉に黙り姿を消した。原っぱに生えるのは毒草ばかりになった。その根の中に身を隠すと信じられない程心地良く、閉じ掛けていた

瞼が軽やかに開かれ、その目で辺りを見直すと、そこに何があるのか分からない程、何処も白く見えた。少し動いただけで、自らの姿もその白さの中に見失われた。声を出してその姿を見付けようとしたが、必ず私の声に鳥の声が被さって、邪魔された。鳥の声は、私と常に一定の距離を保っているとは分かったが、それは遠いようでも近いようでもあって、その声から鳥の居場所を探り当てるのはとても出来そうになかった。しかしその内に二つの声は一つに重なって、鳥も私もなくなり、その声だけが花弁のように風に舞うと、その風は透き通っていて、そこにまた無数の鳥獣が戻って来る無数の音の中に声は紛れたが、一羽の蝶だけが、真っ白な地球儀の事を朧に覚えているらしく、それの事を聞き出したくてならず、私達の声を探して、（二〇一一年七月三十一日）

（強い音がして…）

強い音がして、場違いだったかのように、響き渡る間もなく直ぐに消された。その直前までそこは、光と影が入り交じり色取り取りだったたに違いない。何故なら、その音の消えた辺りは真っ白だったから。それは様々な色の失われた証しだった。そしてその音の消えた辺りは何処までも拡がって行く。失われた色

は一つも思い出せないが、目の前に広がるばかりの輝く白だけは、消された色の中には含まれていなかっただろう。そしてその輝きを左右に分ける微かな翳りが先へと引かれ、それもまた、音の消されたのと同じ辺りで、いきなり途切れた。そこに目を凝らすと、消えた強い音が、こちらとそちらのぶつかった音だと分かった。近付こうとして近付けない代わりに、そこに透けた明るい水を注いでいた。涙だろうか。いや、近付けない手前に隙間を空けて、水はそこから汲まれているに違いない。注がれた水もまたそこで消された。或いは何処か地下へでも流れ込んでいるなら、そちらを向きたかった。その向きを探そうとは出来た。そうしてあちこちへ向きを変えていて、その内に周りには何もない事以外、何も見えなくなった。何もないのだけは、はっきり見えた。白い輝きもその僅かな翳りも全てなくなっていた。しかしそれは見て取れる限りであって、見て取れる限りでないなら、そこには見尽くせない程のものがあるのではないか。そこから何の音も聞こえて来ない事が、その証しではないか。音は限られた中の限られたものからしか、出て来ないだろうから。身を傾かせると、またその方へ水を注げた。水を貯えた壷のような身であるかも知れないと、その形を目で探ろうとすると、水は出鱈目に噴き出して、どうにも止められず、そのまま速さを増し、もう水にも見えず、実際もう水ではなく、音を立てないままの音が、透き通って、無数に方向も定めずに飛び過ぎて行く。突然それが

耳に入って来て、一斉に破裂した。無音を纏っていた分だけ、どの音も繰り返し繰り返し耳の中で響き続けた。しかしそのどの音もそれ以上先へは届かない見えない壁らしきものがあると気付くと、体はそこへぶち当たって行った。その衝撃は、大音響となって、他の全ての音を消し飛ばした。道は二つ拓けた。迷わず賑やかな方を取ったが、それは直に弾けてバラバラになって、寂しい方の道を進んでいた。それでも、多分弾けたのはその景色だけらしく、賑やかな道はまだ直ぐ側に並んでいて、それが段々と離れて行く音だけが聞き取れた。寂しい道はどんどん細くなり、もうそれに獅噛み付いて這って進むしかない。身もまたそれに合った形に変わって行くようで、するとそれに対抗するように、更に道は細くなり宙に渡された綱のようで、身は左右に大きく揺れ、それを立て直す度に、紐のような細い体の左右両側に、小振りな透き通った翼が生えて伸びた。飛ぶためでなく均衡を取るために違いない。その翼に、舞い飛んで来る薄い綿屑のようなものが少しずつ付着して、それが段々と重なると、翼に白く輝く薄い覆いが掛けられたようになり、その白い輝きだけが宙へ伸び上がって、飛ぶための翼のような形を見せた。そこに様々な色のものがぶつかり、色々と賑やかな音を立てるようだが、何も聞こえなかった。或いは聞こえない振りをしていれば、それらは直ぐに何処かに消えた。そしてもう身が傾かなくなると、翼に微妙な角度を付けて、翼の白い覆いを操って、様々な音色を拵える

事が出来、それらは、恐らく聞き取れてはいなかったが、色になっては見えていたに違いない。その中から、綺麗な色だけが選び出され抜き取られ集められていて、それらを取り集めたら、部屋が後を追って来ていた。部屋は新しい音色を加える度に膨らみ続けたが、急に膨らむのが止まって、それでも音色は次々加わるのでそれらは密集し、更にその密集が丸ごと急に縮んで、部屋は一点に縮む方へと破裂した。それを後ろに見送って、そこだけ飛び抜けて高い、細い真っ直ぐな道を走っていた。低い方を覗き込んでも何も見えて来ない。周りは白く輝き、道だけが僅かな翳りを帯びて道と分かる。その道が急に終わると、その終わった所に、様々な音を一つずつ溶かした水が、数え切れず埋まっていて、音は、決して混ざり合わなかった。直ぐに飛び込んだが呆気なく弾かれるだけ。それらの姿形に粧う事は出来たので、念入りに粧ってまた飛び込むと、そこにもう音の水はない。割り込んで来た色のない真っ暗な水に恐れをなし、すっかり逃げ去っていた。真っ暗な水だけの中で、音の粧いをした身は、光りが噴き出すばかりのように輝くしかなく、その輝きは右と左にはっきり分かれて何処までも拡がった。構わず音だけを求めて真っ直ぐ前を見る。化粧が段々剥げて行くと、身は音を持たない一つの空っぽな塊か、或いは音を持たない所に身を置いていながら身はそこに溶けて消えているようで、先にはただ、音を失ってどんな色形も動きを止められた景色が待ち構えているようで、向きを変え

るための左右の翼は何とか見付け出せても、汚れた肌に吹き出た見窄らしい小さな粒にしか見えなかった。それでも真っ暗な水の中の疾っくに色を失った色の欠片が掠めると、粒は種の形へと向きを変え、芽を吹くための音を遠くに待つようで、（二〇二一年八月六日）

（穴を掘っても…）

穴を掘ってもその穴を振り返ってはならない。穴の出来映えを思い描いてもいけない。穴に何が埋められるか考えてはならないし、何かが埋められようとされるなら、ずっと目を逸らしていなければならない。そうきつく言われて来ていた。だから、土を削ったばかりの所も、削った痕の生々しさに目を奪われずないよう、そこを目の端に押し遣って、これから掘ろうとされる所にだけ、ずっと鼻面をくっつけている。掘り進む程、その言い付けを守って良かったと思える。掘り進む度に辺りを見回して穴の様子を確かめてなどいたら、穴に呑み込まれてしまっているような恐ろしさに囚われ、進むも退くも儘ならなくなっていただろう。そう思い至るだけで、穴の恐ろしさは直ぐ後ろに迫っている。掘り進む手が止まり、進むも退くも儘ならない。急な静けさの中に何かが投げ

込まれる音が来て、それからゆっくりと穴が埋め戻されて行く土の音が続く。そこはもう穴ではなく土の中だった。さて、そこでどうしろと何も言い付けられてはいない。さっさとそこから抜け出そうと、気の向く方へ土を掻いた。初めの一掻きで、目の前を塞ぐ土は全て消え、見晴らしの良い広い景色が開けた。しかしただ広いばかりで全く奥行きはなく、薄っぺらだった。一歩踏み出すだけで、紙のように突き破られるだろう。初めの一掻きの向きが、全てを決める程に大事だったのだ。その過ちに気付いても、引き返す手立てはない。次の一掻きで、その薄い拡がりは、見立て通り紙のように破れ、その突き破った先に身を置けば、そこもまた紙のように薄い所だった。痙攣をどうにも出来ないかのように、目の前に現れる景色を掻き続けるのを已められなくなっていた。景色をゆっくり眺める暇はなく、その様子は全く頭に残らない。多分景色はそれぞれに全く違ったものなのだろう。幾らかでも似た所があったなら、そこだけは少しは頭に残るだろうから。そうして段々と景色が景色であるのにも気が回らなくなり、ただ宙に浮いて止まっているかのような体だけが、ただ一つ、そこに姿形を描き出していた。そしてその体も、ただその体の他に何も持っていなかった。或いは一つだけ持っていたとしたら、何れはっきり日暮れと分かる夕焼けの景色が来て、ちょうどそこで疲れ果てた掻く手は動かなくなり、その前に立ち止まったまま、夜の中に体を溶かし込んで行けるかも知れない、とい

う望みだったろうか。それを待つまでもなく、体を闇が囲んでいた。しかしどうやら、何の景色も映さなくなった所が鏡のようになって、その前の、ただ体だけであるものを映しているに違いなかった。つまりその闇は、体の姿なのだ。いや、もしそうなら、闇に闇が闇と見えるだろうか。その闇を闇と見ているものは、他に居るのではないか。後ろを振り返ると、底の見えない穴だけがあって、体はもうそこへ落ちるしかないと覚悟を決めた。しかし体は、宙に浮くようなまま動かず、代わりに穴の中を、体の影が、仄白く点滅しながら転げ落ちて行くのが覗き込めた。その遠ざかる程、穴はどんどん狭くなって、その歪んだ内面に、体以外の事柄が、びっしりと描き込まれ、それらは歪んだまま潰れてぴったり張り付き合って、結晶のように輝く襞になった。体の影はもう穴の底を突き抜け、そこから高い方へ昇っているのかも知れなかった。その上を向く姿はどのようなものか。足を根元から切られた鳥の、翼を広げるような姿が、最も相応しく思えたが、ただ冷たそうな風の流れる音が穴の底から微かに届くだけではないか。いやそれは決して微かな音などではない。穴の内面を蠢き渡り、成長し続ける襞の輝く結晶の一つ一つに埋め込まれた体以外の出来事の、それぞれを一斉に震わせて、それぞれの音を作らせていた。それなら穴を吹き飛ばす程の轟音が聞こえて来なければならない。実際それは響いているのだ。ただそれを全て、穴の底を突き抜けた体の影が吸い取って、昇って行く力へと

変えているに違いない。いや、それはもう体の影ではなく、或いは初めから体の影ではなく、体以外のものと最後まで一度も係わらなかった、全くただ体であるだけのものではないか。勿論それは足を切られた鳥の姿などしていない。窮屈に丸められ、緊く縛られ、穴の底に埋められた恰好のまま、紙のように薄い景色の重なりの中を透け、その姿を、何時まで経っても掘り終わらない穴の底に晒し、（二〇二一年八月八日）

（見晴らしの良い…）

見晴らしの良い何時もの狭い丘から、昨日取り壊されたばかりの塔を眺めた。ただ空しかないと寂しく感じられれば、そこに昨日までの塔の姿は、その空っぽな空の中に、透かし見えている。下のだらだら坂から歌声が届く。歌は塔には触れていない。二番三番四番、更に何十番へとずっと途切れずに、終わる気配もなく続くが、それでも塔についてはは全く歌われない。塔など初めから建っていなかったのではないか。歌っている者達の姿を確かめようと下を覗くが、迫り出す岩に隠れて姿が見えない。もう百何番か分からないが、良く聞くとそれは同じ歌詞の繰り返しになっていて、その先へは進めないらしかった。

それは空の景色を歌っていた。遮るもののない何もない空は、何時まで眺めていても決して飽きず、その空っぽな美しさに永遠に魅せられる。ただそれだけの内容が、けだるい単調な旋律に乗せて歌われた。歌声はだんだんと掠れ、空っぽな空へ薄く拡がる煙のように昇って消えて行くのを望んでいるようでもある。その歌い手達が、岩を攀じ登ってこちらへ近付く姿を見せた。仮面と見紛う化粧をし、優美な曲線を強調するキラキラした装飾品で全身を覆っていた、それは飽くまで敵を威嚇するためで、それが戦闘服であるのは明らかだった。その姿もだが、それより尋常でないのが、岩を登る際の無駄な動き一つない敏捷な身の熟し。足音も岩を掴む音も衣擦れの音さえ立てない。堪らず背を向け一目散に身を隠したが、その己の足音だけが酷く耳障りに高く響いた。彼らは岩を登り切って丘の上に立ち、塔のなくなった空に向かって整列した。歌は途切れず続いていたが、歌詞を聞き取れない者には、ただ掠れた喉を打ち揃って絞っているだけに聞こえただろう。私はもう丘を下り切って、青っぽいごつごつした短い幹の、葉の少ない木の疎らに生える中を歩き回っていた。足を止める訳に行かないのは、足を止めれば、それを待って周りの木々が獣のように動いて私を囲み、私は彼らの餌食とされるかも知れないからだった。真上に空を見上げた時だけ、微かにまたあの彼らの歌が聞こえる気がして、頭に入っているだけのその歌詞を頭の中で並べると、益々、塔は初めからなかったという方

へと、記憶は傾いた。初めはただ気の向くままに歩いていたが、何時しか同じ順路を堂々巡りしていると気付いた。それから更に余分だと思える道順も分かって来たので、それらを切り整えて行くと、巡る道程はどんどん狭くなって、遂には、小さな丸の上を回るだけになり、その丸がそれ以上小さくなりそうになくなると、もう、木の獣に襲われるのを恐れて歩き回らなくても済みそうだった。そうなれば、丸の中に倒れ込んで、そこが死に場所になるなら何の心残りもないだろうから。そしてもう歩くのを止め、丸の真ん中に立って真上を見上げた。そうして見上げられるのが、空であるのかないのかが分からない。空か空でないか分からないなら、多分空ではないのだろう。そう決めて掛かれば、私は、塔の真下に立って空洞の塔を見上げているのではないか。そこへ隊列が来た。押し黙ってはいたが、あの歌い手達に違いなく、揃って裸だった。化粧も落とし初々しい頬の赤い若者の顔ばかりで、もう恐ろしくはなかった。私は、彼らにまた歌うように請うた。それを待っていたかのように、静かに歌い出されたのは別の歌で、塔の事ばかりが歌われた。それも歌詞は、塔が取り壊された所から始まって、時を順に遡っていた。そして遂に塔の建造が望まれる段まで来て歌は終わった。私は、何故塔が望まれたかの訳まで歌って欲しかった、それがなければ歌は尻切れ蜻蛉ではないか、と言った。そう言ってみて気付いたが、私は全身装飾品で飾り立てられ、その重みで動けない。そのまま彼らの

肩に担がれ、彼らは塔の中の螺旋階段を登った。階段は途中までしかなく、そこに西向きの窓が開いていて、彼らはそこから私を突き落とそうとしたが、狭い中で一斉に私の体に群がったので、却って作業は滞り、その間に私は、装飾品の絡み合う塊から裸で抜け出し、それに気付かない彼らを置いて、独り塔の内側を這い登った。手足に吸盤でも生えたように楽々と楽しく登れた。しかし暫くして見下ろすと、その窓はまだすぐ下だった。私の体は、登る程に小さくなっていた。窓の下に川が流れ、岸から川へ降りる青くごつごつした道を裸の隊列が進み、装飾品に包まれた私の体を川へ流した。直ぐにも後を追わなければ、私は私の体とはぐれてしまう。慌てて窓まで降りようとしたが、手足の吸盤を一々剥がすのに手間取り中中窓まで辿り着けない。すっかり日は暮れ、塔の中は真っ暗で、月もないようで何処が窓か分からない闇の壁を、頭の重みの示す方向だけを頼りに、ただ降り続けるしかない。頭だけがどんどん重くなり、頭以外は壁に擦れて砕けてなくなってしまったかのようだ。知らずに窓を通り過ぎ、もう塔の底がすぐそこに見えた。木の獣の光る瞳で、そこは照らされていた。頭の重みには抗えず、そこへ飛び降りるしかない。そこで死ぬなら、死ぬのはもう何度目だろう。塔の外で歌われている数え歌が聞こえる。とても最後まで聞き終えるのは叶わない。それならと、自ら歌詞を拵えて替え歌を歌い、巧く歌を終わらせると、丘の上の私は、昨日までそこに建っていた塔の姿を、

その優美な曲線の一本一本まで思い浮かべ、ただそこに一つだけ開いた一心に闇を覗き込んでいる小さな窓が、目に突き刺さる針のように邪魔で、（二〇一一年八月九日）

（穴から出ようと…）

穴から出ようとしていたが、土の中にでも埋まっていただろうか。何処かの穴に嵌まっていただろうか。足元はつるつるで、何にも遮られず、伸びやかに吹き渡る高い風の響きさえ、微かに伝わってくる。穴など何処にも見当たらない。敢えて穴というなら、これから出て行こうとしている所が、果てもなく大きな空っぽな穴かも知れない。或いは穴からやっと出ようとしている目に、その先がまた穴であるように見えてしまうだけか。その果てのない大きさも、先の見通せないせいで、所詮は一つの穴でしかないと。そうしてどうやら穴を出て、もうどちらへも行けるようになって、振り返ってみても、抜け出た筈の穴はやはり見付からない。そうして、どちらへ向いて振り返っているかも分からなくなった。どこともからない穴を出て、どちらを向いているのかも知りようがないなら、それも当たり前かも知れない。方向を見定め覚えておくためにの

何か目印が必要で、何もない見通しのない空っぽな中をぐるぐる見回して、やっと一つ低い方に小さな影を見付けて、そちらへ一歩近付く度に息苦しくなって、一々立ち止まって大きな息を吸い込まなければならない。その息は確かに胸に吸い込まれていたが、そのまま何処かの穴へ抜けるかのように、離れたその小さな影へと、吹き込まれているのではないか。進む程に吸うばかりで吐く息が減って、もう吐く息はなかった。一刻も早くその影に身を預け、それと溶け合うか何かしなければ、耐えられない。しかし影はまだ遠い。となればそれは、引き返す格好の言い訳になりそうだ。しかしそう思う程、何かもう一つの隠された理由を明らかにしなければ決して引き返せないとも思えた。それはたぶん私の中に隠されている或いはそれが私であることがその理由かも知れず、そうならそれは、初めから少しも隠されていないままだったか。しかしそうして、私とは何か、と確かめられようとされる私の姿は、影さえ見つからなかった。心臓の音なのか、ただ透き通った中に単調な鉄を打つような音だけが、何処かへ響きでる事もなく、そこに籠もっている。それは良い事に違いない。その音がいびつに響きバラバラに砕けて、思いも寄らないものを導き出したりしないので。音の在処を見失わずに済む、とはつまりは、己の在処を見失わずに済む事なので。そしてその音さえあれば、息苦しさなどもう終わった事に違いなかった。方向を見定めなければならない事からも解き放たれているのではな

いか。ただその音の籠もる辺りを上から覗き込んでしまうと、そこには何もない薄暗い湿った小さな穴が開いているだけだった。音などなかった。或いはその穴を、音と見誤っていただけなのか。或いはその穴が、その穴の掘られた時の音を、私の耳の奥に鳴らしてしまうのか。そしてその音は、その穴が掘られなければならなった理由を明かしているに違いなかった。私はやっと進むべき方向を見定められたように思えて、耳の奥へと全身を傾けた。耳の奥へ滑り込んだ体は、そこで三つに切り分けられ、それぞれ別の管へ通された。一本の管は闇に塞がれもう一本は光りに焼かれた。それを見ていた残りの一本の管の中は、空っぽだった。そこは丸まって縮んで行くばかりで、もう管ではなく空っぽが絡み合う、ゆっくりと裏がえって行く透き通った塊だった。それは時が刻まれるの待っているようだった。しかしそうして待ち続けるために、時がそこに入り込むのを退けているようだった。いやそれは既に廻り中時に晒されていてそれでも時に触れるのを拒んでいた。だから丸まって固まるしかなかったのだ。そしてその中心からそれを透き通らせていたものがそっと抜き取られると、そこはただ光と闇だけになって見失われた。いやその抜き取られていった穴だけは残ったのではないか。その見掛けが穴とは似ても似つかないで、何処かに紛れているだけで。或いは時を掛ければ時に触れようとしないそれを見つけ出せるだろうか。しかし見つけ出す必要もない。その穴だけがそこに残っている

ようなものだから。それは元からそこにあって時以外の何に対しても従順でいられる。いや既に時はその穴の中に全て溶かし込まれていないか。その時は水のように均質で、それ故僅かな隙からこぼれ出ている。その滴る滴が光と闇の狭間で燃やされた失われた時と擦れて音を立てると、その音が転げ落ちて行くのが初めの穴で、（二〇一一年九月二日）

（間違って毒を…）

間違って毒を飲んで生死の境をさまようらしい。その体が草の上に横たわる、その前に独り居て、どうそれを処置するか、試されている。最善の策は見て見ぬ振りで立ち去る事。そうしてそれが露見して厳しい罰を身に受ける。後には何も残らない。いや、直ぐに露見はするだろうが、刑の執行は引き延ばされ、もっと別の難題を次々吹っ掛けられないとも限らない。ここは寧ろこの体から毒を取り出し、それを仰いで自らに罰を与えた方が、面倒なようで手っ取り早い。それで取り敢えず仰向けの体を横に向けてみた。いきなりその背中に、まともに見たら目を潰しそうな強い光りが差すらしく、それが体を透けて胸から腹を仄白く見せた。しかし胸にも腹にも、骨や腑や血管の影は一つも浮かばず、

体の中は空っぽであるとしか見えない。皮膚だけを残して、毒が体の中の全てを溶かしてしまったか。青白い肌は柔らかく傷一つなく綺麗だが、足の左の親指の爪からだけは血が滲んで、僅かに草の上へ零れている。「何故こんな事をするのか」と、その血の一雫が声を上げた。「こんな事とは」と私が問い返した。その私の声も、同じ血の雫の中から出ていて、返事はない。その待つだけ無駄のような静けさの中で段々と私は、己が毒であるという考えに傾いて、それは妙ではあるが、変えられなかった。そして血は、毒である私に、辛うじて害されずに残った、体の中の最後のもので、私に恨み言をぶつけたいのではないか。そんな考えに極まれば、静けさも極まるようで、このまま待つ甲斐があるかないかも、どうであっても構わない。そのままに、そうでなくなる兆しもないままに、知らず、事は逆を向いていた。つまり私は、毒に害された全ての骨と血と腑のそれぞれの残り滓の集まりであり、足の爪先の最後に残った血の中に紛れていて、その私に向かって、毒の方から、先ずは問い掛けがなされていたのだ。「何故こんな事をするのか」と。それなら私は、問い返すのではなく、私なりのそれへの答えを持っているに違いない。毒はただ、心臓を止め、体を冷たくするためにだけ使われた筈なのに、何故、皮膚を残して全てが溶けるような反応を、体はしなければならなかったか。毒の何故と言う問い掛けは、それへの戸惑いを言い表したいものに違いない。で、それへの私の答えはと言

うと数え切れない程あって、何から答えて良いか分からない。全ての骨と腑と血に、それぞれの言い分があるだろう。そのどれかを幾つか取り出してみても、答えにはならない。全ての言い分を全て、しかもほぼ同時に言い返せて初めて、それなりの答えになるだろうが、出来る話しではない。それに引き替え毒は何と単調なのか。その単調さが、この事態を引き起こしたのだ。いや或いは、実は毒の成分は、骨と腑と血の全てよりずっと入り組んでいて、その複雑さが、そしてその複雑過ぎて私には単調でしかない事の耐え難さが、私に、私の殆ど全てを溶かすと言う反応を引き起こさせたのではないか。ただ、毒に向かってそんな事を言ってみても、毒への答えどころか、恐らくは何を言っているのかも理解されない。それなら答えを持っていないのと同じ。正確に言えば、答えを持っているせいで、答えを出せない。不意に横向きの体が、素速く寝返りを打った。爪先の血も草に垂れた血も何処かへ飛び散った。こちらを向いた背中の皮膚は綺麗に切り取られていて、標本のように色取り取りの骨と腑と血管が、体の中に押し詰められている様を見せた。或いは、寝返りを打ったのではないのかも知れない。何故なら、逆さを向いた草が上で、体が下だった。それだけ見ればただ天地がひっくり返っただけだろうが、私だけがその天地に居るなら、どうやら独り私だけの天地が寝返りを打ったらしい。いやそうなら、天が地に落ち掛かり地が天へ雪崩落ちて行かねばならないが、そうなっていない。それ

なら、ただ体と草原を照らす光りが、寝返りを打ったのだ。と言って、光りは相変わらず背中を照らし向きも変わっていない。向きはそのままで裏返った光りに照らされるとならば、毒は毒でなくなり、毒に害されていた筈の骨や腑や血が、毒になる。骨は、それが骨である事が骨にとって毒であり、腑や血も同様。そして私はもうそれらではない。だからもうそれら同士の問答に躓く事もない。私は光りであるしかないだろう。或いは全く光りとは懸け離れたものかも知れないが、それが、私は光りだった、と言って何の差し障りもない、それによって、何の変化の兆しも差さない。それなら私は光りでなくても構わないし他の何でなくとも構わない。そのような、そのように私をさせる光りなら、それこそが毒であるに違いない。しかしそう思うのは誰か。何でなくても構わない私にとっての毒など、特定できる筈もない。私が私であるのが私の毒である、と言ったところで、そうである筈はない。光りは強さを増し、皮膚を切り取られた背中から、骨や腑や血の中を何処までも微細に照らして行く。それでも体は透き通る事も空っぽになる事も焼かれる事もなく、ただ、その体を何時までもより激しく犯し続けたいと言う光りの都合だけが優先されて行くようだった。しかし血の痕で僅かに汚れた草の葉先が僅かに向きを変えると、その血の中の何かの残り滓が、光りを何処まで犯し、光りはもう逃げ場のない所まで追い詰められていて、その最後の光りが滲み出す先で、（二〇一一年九月二十

八日）

（勝手に増えて…）

　勝手に増えて、家畜の種類は数え切れない。それらを一つの畜舎に纏めて飼うしかなかった。牛と豚以外、名前も生態も分からず区別の仕様もない。何時からか牛も豚も見当たらない。肉食の連中に食われてしまったか。畜舎への立ち入りも控えるべきかも知れない。と言って、餌を与えずにいては、肉食の家畜だけが生き残り、彼ら同士で食うか食われるかの争いが始まり、いよいよ始末に負えなくなる。肉食だけを取り除く手立てが見付からないなら、肉食の食欲に見合った数の草食を確保すべく、干し草を補充して行くしかない。しかしどうやらその仕事は、既に誰かによって担われているらしい。或いは、家畜の中に、そんな知恵の回る奴が居て、そいつが何処からか草を調達して来ているのかも知れない。そんな訳で家畜の数は増え続け、彼ら自らの手によって、手狭になった畜舎の増築も、目の届かない奥の方でされているらしかった。獣の鳴き声に混じって普請中の物音が届くのだから間違いない。それならもうここに居る用はない。立ち去ろうとすると、手土産代わりか、ずんぐりした小さな

瓶を一つ渡された。それぞれ色形の違う、虫のように小さな胎児達が、生きたまま、ぎっしりと詰め込まれていて、彼らの新たな畜舎を探さなければならなくなった。勿論、大きなものは要らない。彼らが自らの手で畜舎を維持出来るまでの間、彼らを恙無く成長させられれば良い。ただそうは言っても周りにはもう何もない。使えるものは全て、増え続ける家畜の胃袋と畜舎の建て増しのために持ち去られた。胎児達を畜舎に放てば、見る間に餌食とされるのは分かり切っている。兎に角先ずは畜舎から見えない所まで遠ざかるべきだ。背を向けて五、六歩も進んで振り返ると、普請の音だけは、薄い煙のようにぼんやりと響いて来るが、もう畜舎は見えなくなっていた。知らずに、濡れた粘土でぬるぬるでもした抵抗の少ない急斜面を、滑り降りたかしたのだろう。そんな急斜面も見当たらないが、それは恐らく視力が落ちたせいだ。殆ど手が届く辺りにしか何があるか分からず、その辺りに手に取れるような何かがある訳でもない。風で動く程のものが出入りするだけで、吹き溜まりにもなっていなかった。しかしここでなら、小さな穴を掘り、そこへ蓋を開けた瓶を置き、その上に平たい泥の塊でも被せて、瓶を隠す事も出来そうだ。そうして地面に目を落とすと、視力は凄まじい勢いで甦り、地面のどんな細部をも見逃さないまま、その地面の先へ先へと何処までも見通して行けた。様々な色と質感の地面が次々に現れては行き過ぎたが、穴を掘れそうな柔らかな地面には行き着けない。寧ろ

行けば行くだけ、地面は全く歯が立たない程、絶望的に硬くなって行くようだった。しかしそれで嫌気が差してふと目を少しだけ上げると、それまで見て取って来た変化に満ちた地面は、ほんの猫の額程でしかないと分かった。そしてそれは、ただぼんやり見ているだけで更に狭く縮んでいるようで、もう瓶より小さくなっていた。慌ててまた、目をしっかり地面に落とし、地面の拡がる先へ先へ目を向けて、やっとまた広い地面が開けた。そして今度は、勢いを付けて一息に高い方を見上げた。地面が真下の一点へといきなり収縮したのが見えたかも知れない、その直ぐ後に、ただ湿った空だけが低く掠めて、その下を擦り抜けるように、起伏に富んだ柔らかそうな土地の景色が、水のように流れた。そこへ向けて私はもう、蓋を開けた瓶を逆さに翳して、中の胎児達を撒き散らしていた。それらは、その景色へと飛び過ぎて、直ぐに、ただ白い粉の舞うようにしか見えなくなった。本当にあれらは胎児だったのか。今更何も分かる筈もなかろうが、つい空になった瓶の底を覗いてしまうと、瓶の底は見る間に拡がって、目はその先へ先へと追って行く。しかし直ぐに、そうして瓶の奥へ何処までも入り込んで行って、取り返しの付かない事にならないか、それが気掛かりで、あらぬ方へ目を逸らした。或いは何処へも目は逸らされていないのかも知れないが、瓶の底は拡がるのを已め、独り私は瓶の底の端に取り残された。垂らした涎が瓶の底を這い、その涎越しに、起伏に富んだ景色を鳥瞰出来た。

先程は柔らかそうに見えた土地だが、今度は恐ろしく硬く見えた。胎児達はその硬い地面に激しく叩き付けられ、どれも大怪我を負って、身動きも儘ならない。ただその中にも、運良く起伏の傾斜に沿って巧い角度で落ちて、やっと身を起こしたのは、獣ではなく、二本足で立つ人の形だった。ただその二本足は金色の毛で覆われた獣の足で、声を掛けるとそいつは振り向いた。振り向きざま、その上半身へと私の上半身が滑り落ちて、そこへ乗り移るようだった。その私は私の腕を探したが見付からない。目で探したのが間違いなのだ。両肩の先へ息を吹き掛けると、両腕はその息の中に炙り出された。しかしその腕の力をどう振り向けても、何処へも伝わりそうにない。四つん這いになって腕を地面に擦り付ければ、その地面から幾らかは力は返って来るようで、何日もそれを続けた。そうして、励んだ甲斐があったのかなかったのか、足元の狭い地面が均されているのに気付いた。（二〇一一年九月三十日）

（誰もが徴を…）

誰もが徴を付けている。その徽章なしには居られない。かと言うとそうでもなく、どうやらそれを無くしてしまったらしいが、それで今のところ、弾き飛

ばされたり摘み出されたりはしていない。或いはそれと気付かないだけで、もう何処か外へ出されてしまっているか。それまで徽など全く気にも留めなかった。それが今、徽章を付けた者らで溢れ返って見えるのは、それらを外から眺めているからではないか。その内に、徽章を付けている者らは、どれも顰め面になって、まるでそのどろどろした徽章に呑み込まれるように萎んで姿を消し、ただ至る所、形の定まらない徽章だけが浮いて泳いでいるようになった。それを眺めている筈の自らも、浮いて泳いでいるようで、その中のどれかが、自らの姿であるしかないのだろうか。そうであるならまだ、中から出られずに居るのだ。そしてその中の一本の細い糸に絡まって動けなくなっているのが、自らの姿に違いなかった。そうして見直すと、それは糸が絡まっているのではなく、糸へ絡まろうとしていて、それによって、それはもう何の徽でもなく、ただ動くだけの一つの塊で、恐らくその細い糸を手繰って行ける先に何かの徽が見付かるかも知れない、と思い込んでいられる内は、このままで居られるようだった。直ぐ先でその糸の切れているのが見えた。糸は幾条にも解れ、糸屑のようになったそれぞれが、捩れながら自らを縒り直して、それぞれの方向に波打ちながら延びて行くようなだけで、その尖端はどれもぼやけて消えていた。動くだけの塊は、疾っくに掻き消されていた。初めから、自らの姿であるものなど、何もなかったのだ。さてそれらを硝子瓶の中に覗き込んで

いるのは、死んだ男の姿を、その硝子瓶の中に追い求めようとする、残された者達で、硝子瓶を囲んで、揃いの帽子を被っていた。部屋に足を踏み入れたばかりの私だけは、その帽子を被っていなかった。私に気付いた端の一人が、私に腕章を渡した。彼の頭を見直すと、それは帽子ではなく、長い髪を編んで帽子に見せ掛けたものだった。私の髪の長さではそれは編みようがないので、諦めて腕章を嵌めようとすると、それが髪の毛を編んだものだと気付いて、驚いて、それを取り落とした。足元に床も地面も見えず、拾えるものは何一つない。誰に促されるまでもなく、私は、ここを立ち去ろうとしたが、地面も見えずに何処へ立ち去れるのか。私に腕章を渡した者が私に耳打ちした。「立ち去らなくて良い。その代わり、彼らに食べ物を勧めて欲しい。」「彼らとは？」と言って周りを見回すと、そこに彼らは居た。壁を背に口を噤んで隙間なくびっしりと並んで居る。皆、髪の毛で編まれた腕章をしていた。私は壁の方に歩み寄って、何処にどんな食べ物が用意されているかも分からないまま、「兎に角、何か食べて下さい」と勧めて回った。そうして彼らの前を一巡すると、壁の端の者が、「あなたの落とし物です」と言って、腕章を渡した。それを嵌めてしまえば、壁に張り付いて空腹を我慢するだけの、彼らの内の一人になってしまう、そう思って私は、そっとその腕章を手放した。それからまた、食べる事を勧めながら、壁際の彼らを一廻りすると、また端の者が「あなたの落とし物です」

と、腕章を渡して来た。今度は腕をだらりと垂らしたまま、聞こえない振りをした。「そうですか」と端の者は私の耳元へ囁いた。「それも良いでしょう。あなたは何の徴も身に着けず、私達に毒を食べろと言うのですね。」「そうか、分かったぞ」と私は思わず声を弾ませた。「食べ物というのは私の体で、それがあなた方には毒なんですね。」「よくもそんな、訳の分からない見当違いが出来るものだ。」と端の者は呆れ顔を背けた。私はまだ彼の手にある腕章を取り上げた。冷水に指を浸けたような感じがあって、腕章は、小さな獣のように私の冷えた指先を擦り抜けて落ちた。私は腰を屈め、見えない地面に、その腕章を探ろうとした。逆さになった私の体は、小さな獣の肉を一心に求めて追うように、何も見えない中を何処までも転げ落ちて行くようで、彼らが地面を覗き込んでも、何の徴も付けていない私の姿は、見付かる筈もなく、（二〇一一年十月十三日）

（その季節は温い…）

その季節は温い風に誘われて、毎朝その大きな木の前を通るが、葉を落とすのを見た事がない。その内に、どの葉が何処にあってどんな形でどちらを向い

て、どちらの風を受けるとどう靡くかまで、全てかどうかは知れないが、大方頭に入ってしまったようで、木をざっと眺め回すだけで、その数え切れない葉のずっと変わらない様を、確かめられるようになっていた。しかし或る日、その木の高さとその背後の地平線との釣り合いが、前とは違うと気付かされた。地平線は、枝を伸ばす木の後ろに見え隠れするだけの、見窄らしいものになっていた。木が日々成長していたからだ。いや、葉の数は増えていただろうか。それとも、枝が伸びるに連れ、それぞれの葉が大きくなっていただろうか。そうでないなら、木が成長したのではなく、地平線が日々僅かずつ縮まっていたのではないか。そうしてまた地平線に目を遣ると、見付けるのもやっとな程に更に縮まって、それでもまだそれが地平線ならば、地平線自体が縮んでいるとでも疑わざるを得ないが、まさかそんな筈もないなら、この木の背後の地平線は、もう小さくなり過ぎて使い物にならず、取り外されるしかないだろう。もう見えるのは木ばかりになって、その取り外される現場を見物するには、まだ行った事のない木の向こうへ足を踏み入れるしかない。しかし木を回り込んで行く道を探すのに手間取って、やっとそちらへ行った時には、もう地平線は影も形もなく、その何もない辺りを下って行くと、青空の下にぽつんと建つ小さな芝居小屋があって、その埃塗れの壁に凭り掛かって、作業員達が寛いでいた。その内の一人が指差す方を振り返ると、木は細く尖った枝ばかりが目立つ程、葉

は疎らで、その真ん中の一箇所に、丸い実のような黄色い花が固まって咲いていた。その花がそれとそっくりな形の実になって、その実から生まれた娘を隣に座らせて、私は、小屋の中の高土間に居た。直ぐ目の前の花道で、歯の高い下駄を履いた、白くむっちりした足を剥き出した役者が、悶えるような大仰な表情を作って、足をガクガクさせながら、今見て来た死後の世界を、くどくどしく述べ立てている。土間席は水浸しで、その水が時々急に波打って、大人は胸から下、子供は首から下が、水に沈んだ。それでも誰もじっと黙って動かなかった。顔の赤い者、青い者、土気色の者、など色々と居て、見ている内に、その配置が頭に入った。天井の闇から、灰色の鷹が舞い降りて来て、役者の肩に留まった。役者が首を回すと、顔の色がくるくると変わった。その向きで、客の顔色が順に映っているだけかも知れない。肩を怒らせ、腕を逆に曲げて、明らかにそれは、私が毎朝眺める木を真似ているが、そうと分かるのは私だけか。隣の娘の姿がない。鷹の胃袋に収まってしまったと思えて仕方ない。飛び入りで芝居に加わって、鷹の腹を割ければ、それに越した事はないが、取り敢えず、水の退くのを待つ事にした。役者は体はこちらを向けているが、顔だけは逸らせて、私に、彼が何を考えているか分からせないようにしているらしかった。科白の途切れる事はなかったが、ぼそぼそと何を言っているか分からなくなっていた。水は勢いを得て、芝居小屋を丸ごと、ゆるゆると押し流して行

く気配だった。水は花道にも高土間にも来た。私は、片腕を伸ばし、役者の足首をしっかり掴んだ。それで私と役者だけはそこを動かずに居られそうだった。小屋が根刮ぎ水に壊される音が心地良いのか、鷹は居眠りを始めた。本当にそれは気持ち良さそうだったので、私も鷹を真似て、体を小さくして役者の肩に乗ろうとすると、もうそうしようとしただけで急な眠気が来て、縮んだ地平ごと、木が、葉の位置はやはりそのままで、水に流されて行く夢を見るようだが、その枝に鷹の死骸を見付けると、それが夢でないと分かった。しかし何故鷹の死骸を見付ければ、それが夢でないと分かるのだろう、と考え始めると、取り外された地平線が花道になっていたのだ分かって、（二〇一一年十一月十六日）

（そこに彼は…）

そこに彼は居ると分かっていても、そこへ行けなければ、その周りに矢印のように線を引くしかない。彼の所へ行こうとされる度に、線は新しく引かれ、重なり合って所々真っ黒くなって、もう一本一本を見分けるのは難しい。線と線の重なりが、矢印のような形になって、まだ線の引かれていない方向が指されたりもしていて、それらを一度に消してしまいさえすれば、直ぐにも彼に触

れられそうな気さえする。そう思いながら誰かがまた彼の所へ行こうと線を引いてしまっているが、その誰かにしても、実はそこに居るのが彼ではないと言う話しを、それはもう古くからの言い伝えなのだから、一度は聞いている筈だ。ただそこへ行くだけなら、大抵もうそこへ行けている。ただ彼に会えず何処がそこか見分けが付かないので、知らずに通り過ぎているだけだ。そこまで分かっているのなら、ただ線を引いて終わってしまった者達からの話しを聞き集めれば、そこに居る彼がどの様な者か知れる筈だ。それはそうなのだが、その線を引いて去って行った者達の行方が知れない。或いは知れているのかも知れないが、その話しを聞き取ろうとする者には、彼らを探し出す手立てがない。いや、その、それを聞き取ろうとする者は誰なのか。抑もその者の居場所も知れない。或いはそれは、彼の居ない所に居るのではないか。そうに違いない。他の誰が、その者が誰であるかなど、知ろうするだろうか。その者自身が、自らについて知りたくて、その前を通り過ぎて行った者達の話しを聞きたいのだ。しかし、その者は、そこを離れる訳には行かない。その者はずっとそこに居続けて、そこに居ない彼の代わりを務めなければならない。彼の居ない代わりまでそこを居なくなれば、誰ももう線も引けなくなる。それなら、その代わりの代わりを見付けよう。そう思って、行き過ぎる誰かの腕を掴もうと手は伸ばすが、誰も影のように素速く身を躱して捕まらない。手は段々疲れて、結局擱め

たのは、自らのもう片方の腕だった。すると、その掴んだ方の片腕に、他の誰かの手がそっと触れた。手は次々に来て、その腕に触れて行った。それは、その腕の持ち主こそ、彼だったからだ。いや、それが彼の代わりであるのに変わりはないのだが、誰もそれを代わりとは見ず、彼だと見て、喜び勇んで触れて来るに違いなく、そうであるならもう、彼の居ない代わりに居ると言う務めを果たせなくなっている、或いは少なくともその務めを食み出している訳で、直ぐにも、そこを去るべきではないか。そのまま居座れば、それはもう誰にとっても、彼がそこに居るのと同じ。そこに彼が居るのと何も変わらない、つまりは、その腕の持ち主こそ彼であるしかなくなってしまう。しかし何処へ去れるだろう。彼の代わりにそこに居る事しか出来ない彼なのだ。いっそその彼が元々の彼になってしまう、或いは、彼の代わりを務めていたその彼こそ、実は彼当人であると、新たに言い伝えてしまえば良いではないか。元々が、言い伝えから始まった事であり、それを新たな事態に即して言い換えても、言い伝えとしての値打ちが下がる訳でもない。ただその言い換えを誰に言い伝えたら良いのか。腕を触って行く者達に、言葉の通じる筈もない。何故なら彼らは、その腕の持ち主を彼だと確信していて、その彼とは、彼らとは懸け離れた、生まれ付き言葉などと無縁な、汚れのない者であり、だからこそ、それは会いに行って触れる価値もあるのである。その彼と言葉が通じてしまうなら、それは彼で

はない別人だろう。その別人が、自らを彼当人である、などと言い張って誰が聞く耳を持つのか。それなら、黙っていれば良いだけの事、なのかと言うと、勿論そうではない。何故なら、そのままでは、古い言い伝えは消えずに残るままだから。間違いなく彼の腕に触れて尚、彼らは、そこに居ない彼を行き過ぎてもいて、でありながら、彼がそこに居るのと何も変わらない。いや何故それで何も変わらないなどと言えるのか、殆ど一切が変わってしまっているではないか。ただ古い言い伝えが残ってしまっている事に惑わされて、その変わった事に誰も気付けずにいるに過ぎないのだ。尤もそういう事だけなら或いはそれで済むかも知れない。問題は線だ。線はもう引かれない。腕に触れれば、線は引かずに済む。ただそれは或る一群に限られている。新しい事は、徐々にしか進まない。未だ線を引く者も多い。しかしその線はそれまでのように重なり合う事がない。それだけ、彼の居る所が、拡がってしまった。まるで線さえ引いて仕舞えば、彼の所に行こうとしたのだとでも割り切ってしまったかのように。或いはもう、何のために線を引くのかも、あやふやになっていないだろうか。彼らは言葉を忘れたかのように口を利かない。線と線が離れ離れではそれも仕方ない。そこに居るのが彼でないと言う言い伝えも、呆気なく立ち消えた。そうなっては、線さえ引かれれば、そこに彼は居るのだった。それなのに、あの一群は一体何をしているのか。線は何時の間にか、その一群の周りを取り囲み、

段々と互いの距離は狭まり、また交わったり重なったりするようになった。そうしてその一群もそれを囲む者達も、どんどん窮屈になって、酷い事が起こらない前に、巧く折り合いを付けるべきだった。言葉を忘れたでは済まない。或いは言葉を忘れても、もっと忘れてはならない事がありそうだ。今こそ、彼が求められている。こういう時のために、ずっと彼の事が意識されていたのではなかったか。その彼はもう、線を消して回っていた。ただそれに目を留める者は居なかった。誰の目にも留まらないので、彼は心置きなく線を消せるに違いない。或いは線は、独りでに消えているのではないか。と言って、彼がそこに居ないのではない。独りでに消える線が、彼をそこに居させるのだ。そうして全ての線が消された時、彼の何もせずにそこに居る姿が、誰の目にも留まるだろうが、新手の線が次々に引かれては古い言い伝えを携えて迫って来て、恐らくは彼自らも、その時が来るなどと見通してはいないだろうし、その見通せない事に凭り掛かって、彼はその身をそこに支えられるに違いなく、それなら或いは新手の線は彼自らが引いているとも考えられないか。新手の線に限らず、全ての線は初めから、彼の手によって引かれていたとしたら、彼は、（二〇一一年十一月日二十六）

（何の話しかは…）

何の話しかは幾つかあって、決まっている。変わる事はない。ただ時に応じて、その話す順は変わる。その順も幾つかに決まっている。しかしどれも一度も声に出しては話されていない。だからそれらは、話しではないのかも知れない。敢えてそれを何だとはっきりさせようとすれば、それは何々の話しである、としか言いようがないだけで、はっきりさせないままで済むなら、それらは、ただ幾つかあるものの、幾通りかに順に並ぶものであるままで良い。勿論それらはなくてはならない。と言うか、それらの他に何もなく、もしそれらを忘れてしまったら、どうなるやら見当も付かない。だから忘れないように、それらに見立てた布切れを足に結んでいる。歩き回って立ち止まる度に、その結んだものを見直す。すると、その結び様がどれも間違っていたと気付かされて、一度全て解いて結び直さなければならない。そうするから、忘れ掛けていたものも、またはっきりと思い出せる。ひょっとして、その解いて結び直す時こそ、声には出さないが、その時に応じた話しを独りでしているのかも知れない。その時の表情が、その前の時と比べて、柔らかかったり険しかったりしているのが分かる。それは誰に見せるための表情なのか。勿論、その話しと、その話しを選ばせたその時の有りようと、解かれ結ばれる布切れに対してだろう。他に

何もなければ。そして勿論その表情を導いたのもそれらで、つまり表情はそれを導いたものへ返された訳だが、そうして返されてしまうと、二度とそれは取り戻せない。取り戻せなくても構わないならそれで良いが、その時はそれで済んでも、後でその惜しまれる表情もある。そしてその惜しまれる時には、それはもうその浮かんだ時の一瞬の表情ではなく、そしてお面のような形を持った、一個の物になっているしかない。しかもそれは、何度も試みたが、どうやら決して持ち歩いては行けないものらしい。尤も持ち歩いて行けるものなど端から何もなければ、それも致し方ない訳だが、その惜しむ気持ちまでそこに振り捨てて行くには、少しばかり時が要る。それは短い時だが、その何処かの一瞬の内に、それまで捨てて行った全ての表情が甦るのを垣間見てしまうようで、自ずと足が竦む。そしてその時にもう、まだ一歩も歩み出してはいなくても、幾つかある何かの話しは、一変してしまっていないか。その余りの素速さにそれに気付かず、それらは決まっていてずっと変わらないのだと、思い込んでいただけで。気付かない内にも話しが全て変わってしまったからこそ、竦んだ足がまた暫くして新しい土を踏むために前に進んで行くのだとしたら。新たに歩を進めるのは、その一瞬を巡る惑いを、敢えてそれを惑いと呼べばだが、振り払うために違いない。そしてそれは振り払うしかない。その一瞬の内へと命を捨てられるのでもなければ。或いは何時か、そんな話しにも巡り会えそうだが、足はじん

じんと痛んで、命と思しきものは土の下から突き上がって来る。それがきっと、何も見えない前を見詰める理由でもありそうだ。その先には、それまで味わった事のない、より貧しい話しの取り合わせしか待っていないと分かっていても。布切れも、日に日に色褪せ解れて行くばかりなのだから、それはもう疾うに諦められている訳だが、その布切れが擦れる地面が、日に日に柔らかくなって行くのは何故か。確かにそれは気掛かりではあるが、別に立ち止まったり振り返ったりする程の事でもない。その柔らかさ同様に、気持ちも柔らかくされて、より貧しい話しに身を攫われる行く末に花を添えられるようでもあれば、何も見えない前に目を瞑る事も出来よう。それで却って身は軽くなり、土を踏む足の形を、自分でも思いも寄らない風に色々に変える事が出来て、（二〇一一年十一月二十八日）

（案内係りが…）

案内係りが長たらしい地名を口にしたので、その顔を覗き込んで「どういう意味ですか、その何やらという」と尋ねると「…です。八つの湾という意味です」と言う言葉を残して、薄っぺらな案内係りの体は消えた。消えると思って

いた。あんな薄い体で、よくも立って息が出来ていたものだ。その名の意味からして入り組んだ地形なのだろうが、景色は見えて来ない。案内係りの消えた顔の辺りをまた覗き込むと、餓死者の数を報告している濡れて汚れた紙切れが波間に落ちているのを見付け、そこに記されたその機関の住所を確かめると、もうその直ぐ前まで来ていると分かった。幅の狭い出入り口を大人数が窮屈そうに行き交っている。幅は狭いのに、真下から見上げると、出入り口は高い天井のぎりぎりまでの高さがあり、無意味な高さとしか思えないが、実はそれには何か意味があって、それを分からないままにそこを行き過ぎて良いものか躊躇われたが、人の流れに押されて中に入った。そこは建物の中なのか。出入り口から続く天井は直ぐに途切れ、出入り口の両脇にさえ、壁は見当たらない。ただ違うのは、外では口を噤んでいた者達が、小声ではあるが、盛んに言葉を交わしている事で、それらは流れるように自然に耳に入って来たが、そのどれか一つを捉えて耳を欹てると、どれも恐ろしく早口でしかも直ぐに途切れた。明らかに彼らは言葉を惜しんでいた。或いは、その場で考え付いた長い言い回しの省略形を、得意げに隣の耳に吹き込んでいるようだった。外では長たらしく聞こえた湾の地名も、そのようにして言われていないか。微かに耳に残るその名の響きは、そう思わせた。口から「八つの湾、八つの湾」と、涎のように自ずと言葉が流れ出た。それも切れ切れの涎。更に人の流れに押されて、振り

返ってももう出入り口は見付からず、何時か上り坂になり、どんどんそれが急になって、人々はどんどん脱落して行った。もう誰にも押されないが、それが心地良くて、ぐんぐんと急な坂を登り切った。誰も最後まで付いて来られなかった。複雑に入り組んだ湾全体が見下ろせた。成る程それは八つの湾が組み合わさっているようだが、どう数えれば八つなのか、はっきりと分からなかった。湾の出入り口の水の色が変わる境の、その湾を少し外に出た果ての一箇所だけ、白波が小さく渦を描き続けていて、目障りで、却って目を外せなくなった。渦は更に小さくなって行くようだったが、中中消えてはくれなかった。それはきっと言葉にされるのを待っているのだ、それを表す言葉をここから掛ければ、それは消えるに違いない、とそう無理矢理自らに言い聞かせ、言葉を探してみた。言葉は止め処なく浮かんだ。どれもがそれをぴったり言い表している。それなら言葉はもう已んでも良いのに、その気配もないどころか、その浮かぶ速さは増すばかり。そうなってしまうのは、それらが、水の色の変わる果てへと止め処なく流れ落ちて行くからに違いない。このままでは何ともならない。言葉の出所を探すと、それは頭の中ではなく、八つある中の一番小さな湾らしい辺りで、海面の奥に暗い色の水の速い流れが見付かって、その暗さから言葉が湧き出ているのだと分かった。それはみるみる狭くなって海に沈み、それで言葉は多分止まった。或いは止まっていないのかも知れないが、多分、止

まっていなくても良くなった。ただそのみるみる狭くなって行った、その狭さに、それはもう消えた筈なのに、目が行くとは、一体何処へ行くのかと探すと、地面に、どれも丸っこい、それでもそれぞれに他と違って歪に曲がった白く小さな石ころが、固めて置かれてある。それが八つある事は数えなくても分かったが、数えてみると、七つになったり九つになったりはしても、八つにはならなかった。それでもそれは八つなのだ。何故ならその配置から浮かび上がる図形が、八つの点と八つの辺を示していたから。その図形を湾の景色に当て嵌めてみると、湾は、はっきりと八つに区分けされて見えた。ただそれも、指差しながら数えて見ると、七つになったり九つになったりはしても、やはり八つにはならなかった。その数える際の捻った手首が起こした風が、湾を揺らし、その海面を波打たせた。しかし手首を止めると、湾に当て嵌めた図形だけが揺れていて、湾は変わらず静かだった。その揺れる図形の中に示される八を指でなぞろうと、また手首を捻ると、図形は消えた。いや、消えたのではなく、手首の中へと入り込んで、手首の八つの小さな骨に分けられた。その確かに八つである事によって、手首は捻り続けられるのだった。それはしかし、何を求めて捻られるのか。湾はもう、見るべきものではなくなっていた。数えなくても数えてみても、必ず八つの湾になってしまうので。手首はただ手首の八つの骨のために捻られるに違いない。捻るのを已めれば、その八つは、あっ

という間に見失われるに違いない。その捻る向きもまた、八つに分けて見て取れた。その八つの方向へ順に振り向いて行き、それが一巡して、次に向くべき方向が見失われると、その見失われた中に仄めかされるのは、その肝腎な箇所を切り取られたような何とも単純な形で、実はその形こそが初めからあって、その先に何もないので、案内係りの口から出た湾の名に、八を意味する響きも重ねられて、(二〇二一年十一月三十日)

(藪までの道は…)

藪までの道は一本しかないが、この前の雨で水が出て、何処が道だか分からない。それなら、道なき道を行けばそこが道になる。ただその道の何処かの穴に不意に嵌まって溺れる事もあると腹を括れば、それなりに命の心配はしなければならないが、道の心配はしなくて良い。勿論、先ずは道で、その心配を取り除いて、命の心配もなしにすべきと考える向きもあるだろうが、その道の心配の間に、命を落としてしまっていては何にもならない。しかしそれ程、切迫しているのか。水が引くのを待てば、命の心配まではせずに済む道は、自ずと見付かる筈。それを待てない何が、藪の中にあるのか。いや、もう待つだけ待

って、中中引かなかった水も、大方引いて、酷く泥濘んではいるが、水が来る前の道筋も、途切れ途切れにでも辿れない訳ではない。ただそれを、事態は良い方へ向いている、と少しも見えないだけだ。それはまだ道筋に過ぎなくて道ではない、と言う事ではない。その道の何処に命の危険が潜んでいるか知れない、と言うのでもない。初めに戻るが、藪までの一本の道が何処だか分からない、と言う事だ。水が来るまでは分かっていたのに、恐らくは。水は、何をしい行ったのか。或いは、藪は今も、水の来る前の藪のままなのか。或いは抑も水の来る前に、そこは藪だったのか。過ぎた事を思い煩っても仕方ない。この藪は藪であり、そこまでの一本の道の在処が、命とさえ天秤に掛けられる程の事なのだ。尤も、命と天秤に掛けられていないものなどあるだろうか。藪からも道からもそっぽを向いたところで、その方がずっと命を軽く扱ってしまっているのかも知れない。つまりは、命の心配など所詮何の役にも立たない。それでさて、命の心配から解き放たれて、藪とそこまでの一本の道の分からないのが、どうにかなるか。ならない。或いはどうにでもなるが、そのどうにでもなるままに、どうにもならない。何がどうにもならないか。そのままのその扱い難さがどうにもならない。それなら扱い方を変えるしかない。藪と道とを一括りにするので扱い難いのなら、取り敢えず藪は忘れ、一本の道だけに取り組めばどうか。道を通さない事には何処にも行けない。いや、何処にあるか分から

ないものにどう取り組めるのか。先ずは見えている藪をどうにかしよう。と言っても、藪はもう藪であって、そのようになっているものを今更どうするもない。となれば、取り組むに値するものを別に見付けるしかないが、水が引いてしまっていては、もう何かが運ばれて来る気配もない。ただ行けない藪を眺めるだけ。或いは藪さえ、そこにはなく、ただ何もない眺めの扱い難さが、その眺めの中に藪を映し込むだけなら、そこへの道など分かっても仕方ない。或いは、そこへのただ一本の道の見失われているのが、ここでの何もない事の扱い難さの、何よりの表れか。それならその扱い難さの扱い方を変えようはないだろう。藪とそこへの一本の道の分からないのは、何もない扱い難さの、そこからの眺めの、その見て取れる限りの行き着いた先なのだから。となれば、藪は何かの弾みで藪でなくなるし、一本道の用もなくなる。いやもう藪は見失われていた。或いは、藪など繁る筈もなさそうな眺めに囲まれていた。ただ驚きは少しもなく、そうなるに決まっている事が、その通りに遣って来ただけで、次の展開も、ありありとは浮かばなくても、やはりそうなるに決まった事が起こるだけであるのが楽々と見通せた。いや、ただ何もないのを良い事に何もせずにいられるだけで、一体何を見通せているのか、と思うと、藪の木々の根元だった辺りに、暗い赤味が差した。それは、その辺りの何処かの何もない中が割れて出来た赤味に違いなく、赤味の奥に、その割れ目の僅かに揺らめくのが透

けたが、それは直ぐに、こちらがそれを見て取ったのを察知したかのように、身を隠すように消えた。それで、ここには決して何もない訳ではない、ただその扱い難さに手こずっているだけで、隠れて消えるような何かがあって、それを今ありありと見て取れたに違いない、とそう思えたが、他にはもう、消えてくれそうな何かは探しても見付からないだろう事も見通せた。そしてその見通せる先に見えて来るのは、どう見直しても藪でしかなかった。それならもう、そこへの一本の道もくっきりと引かれているに違いなく、その道の端まで降りて行こうとすると、藪は、上下左右の同じ大きさの四つになって、その真ん中を突っ切って藪の向こうへ続く、一本の道が初めてくっきりと目に映った。その道は何処へ行くのだろう、などと果たして考える事が出来るのかを、立ち止まって考えなければならなかった。それが何処へ行くかと考える事の出来ない道なら、確かにそれは一本しかなくて、くっきりと目に映るだろうと、(二〇一一年十二月四日)

(彼の周りは…)

彼の周りは図抜けた奴ばかりだった。どんな障害ももとのもせず、その思い

通りに遣り抜いて、立ち止まる事など知らなかった。そういう訳で、もう誰も残っていない。彼らがぶち抜いて行った障害の残骸が、少しだけ彼には窮屈だったが、それらも別に、跨いで越えようと思えば出来る。ただそうしても仕方ないからしない。寧ろ跨いで越えた先はもっと窮屈だろう。何故ならそこでは、彼らが次々にぶち抜いて行ったもっと大きな障害の残骸に行き当たるだろうから。或いは、それらの残骸は彼には大まか過ぎて、案外それらの間を容易く擦り抜けられるだろうか。しかしそんな事を期待して出掛けて行くなら、彼らの二の舞、いや二の舞にもならず、ただその辺りを転げ回るだけで、彼らのように何も残さず姿を消せる筈もない。ただそうであっても、別に彼らだけが図抜けていた訳ではない。ただ彼独りに、機会が巡って来なかっただけだ。それはしかし、彼にそう思えるだけで、実は彼も、彼には用意された機会はちゃんと掴んでいた。そう言えば彼には眠った覚えがない。彼はずっと立って踊り続けていた。彼だけがそう出来た。他の者達は眠らずには居られない。眠りながら、立って踊るしかない。それには凄まじい知力と労力が要る。それを彼らは成し遂げたが、それでも限界があって、立っても踊ってもいられなくなって、別の事へと、その身を振り向けて行かなければならないし、それは一人では出来ず、彼らを新しい場所へ運んでくれる者達を呼び寄せなければならない。途中で倒れたかも知れない。それでも彼らは、たとえ倒れたままでも、それをどうにか

乗り越えて行ったのだろう。そうして彼らに相応しい場所へと運ばれて行ったのだろう。彼はもう独りなのだから。彼らが図抜けたと見えたのは、そうした事だ。だからその彼らの内の何人かでも後ろを振り返って、全く眠らずに立って踊り続ける彼の姿を見付けたら、彼こそ図抜けた奴と一目置かれるに違いない。そのような身であるなら、用意された機会を彼なりに掴んでいるに違いない。そう確信は出来ても、もう踊り続けなければならないとも思えないのだった。ただ、眠らずに立ったままでは居なければならない。別に何を待つ訳でもないが、もし立つのを已めたら、と言うより、立っていなければならない、と言う確信を抛ったら、その場の彼の身は丸ごと、後から来る者にぶち破られなければならない障害になるしかなさそうだった。或いはそうなればそうなるだけの事かも知れないが、そうして残骸になった己の姿を思い描くと、それは、煌めく黄金の塊の幾つも転がっているようではないか。それは、それまでの眠らずに踊り続けた成果なのか。とてもそうは思えない。成果が期待されるなら、それは彼らのように、ここから姿を消す事で、残骸になって残るにしても、その残骸は時が経てば粉々になって何処かへ吹き飛ばされてしまうのでなければならない。思い描かれる黄金は、何時までも罰を受け続けなければならない己の姿に違いなかった。しかし、それを避けるために何が出来るだろう。何時までもずっと眠らずに立っていられる筈はない。それを諦めなければならない時

は必ず来る。そう思い至ってしまえば、それはもう、それまでの確信を抛ったのであって、彼は既に、その思い描いた通りの黄金の姿なのだ。しかもそれはもう、何時からか思い出せない程、ずっと前からそうなのだ。成る程そのようなものであれば、眠らずにも居られようし、その煌きは、そのまま舞い踊る姿であるだろう。しかし彼にその己の姿を見詰める事が出来るなら、それはその姿と彼との隔たりをも見て取っているのであり、その隔たりはどんどん拡がって、もうその隔たりだけがあって、彼も彼の姿も、その隔たりの両端の遙か遠くへ追い遣られていて、それはもう見失われているようでもあり、そうならもうその隔たりも見失われていて、（二〇一一年十二月三十一日）

断片　二〇一一

著者　u_

© 2011 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published